

年中行事

まえがき

坂本地区の西、入山・北野牧の辺を俗に入牧と呼ぶが、この土地は入山峠を越えて長野県軽井沢に通ずる所から、地元の人には東軽井沢の異名を名乗っている。ここは碓氷の関所より西にあるため、昔から上州側よりも信州側との交流が多かったといわれる。このためか年中行事にも信州側との関連を考慮すべきものが少なくないのが、一つの特色となっている。

なかでも、道祖神の行事などはきわだっていて、信州側と比較してみる必要が痛感される。

各部落の入口となる路傍には道祖神の石像（二神像が多い）をよく見かけるが、ここで小正月十四日にドンドン焼きをする。狐堂ではこの時に、松のムイシヤツボリ（もえくじ）を一木ずつ家に持ち帰ってカマドの下に入れ、火だねとして翌十五日のアズキガユを煮ることにしている。ドンドン焼きを小正月の迎え火としたものであろう。また、木で作った腸ざしのうら（先）をドンドン焼きの火でこがして、その炭を手のひらにつけた若い衆が、初道祖神（部落に来て初めての道祖神）を迎えた縁をつかまえて顔に炭をぬりつける風習があった。聖い火種でもって子種を呪うところから発したものであろうか。

「原のむこさんけつあぶり、坂本嫁さん水祝い」ということばがあるが、原部落ではむこに來た人がドンドン焼きの残り火の上で胴上げをさ

れ、酒を買わないと尻をたたかれたものだという。坂本では縁を籠に掛けて外から水をかけて祝ったが、ふだん憎まれている家の縁は籠の戸をあけて顔に水をかけられたという。いずれも新しいむこや嫁を対象とした道祖神祭の行事になっているのが興味深い。

もっと奇抜な性的信仰を伴った行事も、明賀や思賀部落に伝えられている。「籠祝い」と称して部落の新婚夫婦を祝う行事だが、道祖神（若い衆が紛装）の一行が籠の中に男の道具・女の道具を吊るしたものをかついで新婚家庭を訪問する。訪問を受ける家には、近所の女衆が集まって花嫁を守っている。そこへくりこんだ一行が、防ぐ女衆を排除して縁の頭にかついで来た籠をかぶせるといふ一幕が演じられる。道祖神には性的な俗信がよく伴うが、これほどはつきりした形で伝承しているものは珍しい。

この道祖神は二月八日にも祭られる。思賀部落ではこの日を「馬の節供」といい、馬にあずきを食べさせる日で、ぼた餅を作って馬に食わせる。また、わらで馬を作り、背にぼた餅をつけて引っぱって道祖神にお参りに行き、ぼた餅のあんこをぬりつけて来る。これを「道祖神の火事見舞」と呼んでいる。狐堂では、道祖神は部落の入り口にいて厄病神が侵入してくるのをだまして道祖神小屋に泊め、ドンドン焼きで焼き払って防いでくれるので、その御礼に二月八日に部落の人々が火事見舞に行くのだと説明している。道祖神に甘い物を供える風習は信州側にもあるというし、わらの馬も信州側の風習にもある。このように道祖神祭りがさかんなことは、この地区の特色といえよう。

なお、記録は川下から上流の方へ及ぶように心がけたが、必ずしもそうならない箇所も生じた。

鉄道の開通によつて、坂本宿は衰微甚だしく、生活も困窮し、年中行事はその間においては空白期となつた。

宿駅の栄えた頃の風習、宵越しの金は持たないという習慣は、なかなか抜けきれないものがある。

年中行事は、新暦で行なうようになったのは、空白期を経てからである。(関口正巳)

一 月

大正月一日〜十三日

年 男

元日には年男が朝早く起き、井戸から若水を汲む。また年男は朝湯をたてて、一番初めにはいる。(岩の平)

年男は主人であつて三日の供え物を供える。元日朝早く起き、井戸水を汲んで茶をわかし、神様にあげ、次で家族揃つて茶を飲む。(芦田谷)

若水を年男や当主がくむ。(恩賀)

朝 湯

朝湯に入り、若水をくんで料理する。若水くみは男の子が多い。(狐薈)

朝湯はわかす家もあるが、普通今ではわかさないことになっている。わかした場合は、先ず主人が入り、次で家族が入る。(芦田谷)

初 参 り

除夜の鐘がなると諏訪神社に二年詣りする。(芦田谷)
氏神様(神景山——入山神社——)に参詣する。この神社には、天照

皇大神、大山祇神、イズナ神などが合祀されている。(岩の平)

初参りに行ったが、今では神社に村中寄つて新年会があるのでそこへ行く。(狐薈)

年 始 回 り

年始回りは、羽織、袴をつけて隣組を家ごみに行なつた。商人は、手拭をお年賀として配つた。

年始回りをやめたのは、昭和五年ごろだった。(坂本)
二日に隣近所の年始まわりをする。(岩の平)

家 例

三が日は、はき出さない。

長岡家の家例

十二月三十一日 雑すい

元日 ぞうに

二日 うどん

三日 そば

四日 ところろ(川久保)

元日はうどん、そば。三が日のうち一回はそば。四日になって雑煮。

(恩賀)

一日から三日まで、各家でそれぞれ家例にしたがつた食制、行事がある。(峠)

元日の朝食は、うどん、ソバの家が多い。なお、二日は雑煮、三日はトロ飯、四日は雑炊(お供えたものを入れる)である。(岩の平)

明賀では、暮のうちに、三が日の飯を飲いてしまふ。そして、三が日は冷飯を食べる。餅は三日につく。(明賀)

家例としてソバを食べるが、「細くとも長く」ということも一つのいわれになっている。(狐薈)

家によつて違ふが、ぞうに家例、ところろ、おしるこ、うどんの家がある。(坂本)

三が日には、うどんか、そばを食べる。汁のコは、ネギ、アブラゲ程度で、朝、家族そろって食べるわけだが、このごろは子どもたちは餅を焼いて食べたりにしてソバを喜ばない。

餅は三十日についてオカザリをつくるときに進ぜるので、三十一日にオソナエだけ上げて、その他のものは進ぜない。大神宮、ダルマサマ、大黒さん、床の間にはカケジをかけてオソナエを供える。門松には「ヤセツボ」をわらで二つつけてかけ、三が日の間だけ朝晩オヤシナイといつて進ぜる。ヤセツボはカマドにもつくって進ぜる。(電馬)

初絵売

子供が、春駒、胡笠大明神、えびす、大黒など縁起のよい色絵を、大晦日に売り歩いた。(原)

初絵は一日の朝早く来た。一枚十円で、この絵を神棚にはった。(新井)

正月の一日、二日に初絵といって、福の神やめでたい絵の印刷してある絵紙を売りに来る。初夢の紙も売りに来る。神棚などに帖ってかざる。(若宮)

遊芸人

昭和初年に、富士見などから五人ほど、春駒で来た。それまでは来ていたらしい。

太平洋戦争までは、三河万才が来たし、獅子舞は今でも来ている。

かねたきや、こぜも昔は来たことがあった。(原)

正月

大正月は一日〜十三日。小正月は十四日から十九日まで。二十日正月は二十日。以上で正月は終り。(恩賀)

山入り(二日)

この日には一時間ぐらいの間、申し訳程度に山へ行く人もいるが、炭をやっている人などは炭を背負い出して来る人もいる。

一日、三日は本当の休みになるので、石ガマで炭をやっている「セッ

こういい人」は、炭が一日で仕上るので、焼いて来る人もいる。毎日焼く人の石ガマは、ふつう四俵ずつ焼けるので一日で仕上るわけだが、大きい石ガマは六俵から七俵で、二日ばかりになる。(電馬)

一月二日に、山はじめをする家もあるが、任意である。これという行事はない。(原)

仕事始めで山に行つて木を一本でもよいから切つてくる。しかし、山入りとはいわない。(菅田谷)

不浄の日(三日)

この日は不浄の日なので何もしごとはしない。(狐堂)

お棚さがし(四日)

初詣供で若い夫婦が連れ立って実家に行く。このとき一升ますの下の大きさに切つた餅を三〜五枚持つていく。

三が日神様にあげたものを、マゲモノのナナツバチに入れてまとめておいて、この日オジャにしてたべる。(菅田谷)

お札

熊野様から、正月トシガミサマ、荒神さま、年中払い、大神宮のお札が配られる。お初穂二百円上げる。

夏には、なごしの払いといって、昔は一人一枚だった人形が、一戸一枚配られる。

五穀豊穣を祈るために千羽がらすのお札が配られる。

宮世話人は、大世話人が四人、年番が八人いる。

出雲大社―このお社のお札は最近受けていない。誰が持つて来たかわかつていない。

不動様のお札―四月二十八日にお参りして受ける。維持費の割当てがある。横川と合同。大世話人三人、年番四人である。

お寺のお札―部落内で、他の宗旨があるが、金剛寺では家内安全のお札を、正月四日の年始回りに配る。一戸百円ずつ納める。大世話人三人年番四人である。(原)

神だには、ふつう、峠の神主から配られるオンペロ（御幣）、熊野皇太神宮のお札と、どこから来るかわからないが、天照皇太神宮のお札がある。三笠神のオンペロもある。

伊勢講が、大正六年まであって、天照皇太神宮のお札は受けて来た。大正六年は、森田小金吾（安政五年生、当時七十七才）が世話人で、三十七、八人で講を作り、お参りをした。天照皇太神宮のお札を受けない家もあるという。

養蚕をする家では、坂本と鳥淵（今、群馬郡吾妻村）の境にある、きぬがさ様のお札を受けている家もある。五月十二日が例祭だという。

昔、坂本の中央（鈴木三代吉氏宅の裏）で、三月二十八日に、養蚕の市がたつたが、十五年くらいでなくなった。（坂本）

六日年、観音さま（六日）

この日は六日年という年とりの日なので、夕食のときには、魚のおかずでメシを食う。（狐菫）

六日年とい、元日と同様、年神に供えものをする。（岩の平）

六日年で神様に御飯、サカナをあげる。六日爪といって爪を切る。

（芦田谷）

六日年の日にはすきとくわの模型をつくって、熊野様へもって行って、神社の六日年の行事の火でもやした。（峠）

お田遊びの神事

一月六日の夜中におまつりする。神前に神主が各地からあつめた馬（お初穂料）をすしすずあつめて一升ますに入れてお供えし、牛と馬のかたちをかざる。また、鎌・鋤・鍬の模造品（真鍮製）をかざる。本殿の前へまきを井げたにくんで火をたいて、参拝者はそれにあたりながらおまいりする。この間神事の唱えことがある。（別記の通り）神事は一時に終り、そのあとおみくじをひくことになっている。これを峠様のはんじ（判じ）と称している。その年の晴雨吉凶を占うのである。

神主は、お供えしてあるお初穂料を、「まこうな、まこうな、福のた

ねをまこうな」といいながらまく。それを参会者は拾って行って、翌朝の七草のかゆの中に入れてたく。無事息災のためという。

なお、たき木は本殿前中央、上信国境線上を中心にして井桁（つな）にむ。たき木のもえて倒れた方が、その年の景気がいいとしている。

また、先にあげたお初穂料の取得は、担当地区の分については、それぞれの担当者の収入になっている。担当区域は一村ごとの場合もあり、同姓集団の場合もあり、コーチごとの場合もありいろいろであるが、その権利は買においたり、売買することもできた。（明治のはじめごろまでは、権利の譲渡があつたようだ。）（峠）

七草（七日）

正月七日の朝鳥追いをする。セリとナズナをまな板の上のせ、包丁で刻みながら、

「七草なすな 唐土の鳥が 渡らぬうちに ひっぱたけ ひっぱたけ」と唱え言を大声でいう。（瀬田）

六日の朝早く七草をとる。七草はセリ・ナズナ・大豆・小豆・大根・オイモ（里芋）・人参で、これらを入れて煮たお粥をたべる。七草の歌

「ナナクサナズナノセリハタキ
ニホンノトリト トウトノトリト
ワタラヌサキニ ナナクサナズナ
ノセリハタキ」

と唱えながら、お勝手に包丁の刃でたたき。（芦田谷）

「七草なすな 渡らぬうちに ひっぱたけ ひっぱたけ」という。（川久保）

七日は七草ガユを食べる。カユにはセリ・ナズナ・人参・ゴボウなどを入れる。それらの材料は「七草ナズナのセリ叩き、唐土の鳥が、日本の国に渡らぬ先にストトコトントントン」を唱えながら、マナイタの上で細かく切る。（岩の平）

七草は七草がゆをたべただけ、あるだけのものをあつめて、おかゆの中へ入れて食べた。（峠）

倉びらき(十一日)

正月のオソナエを下げてゾウニにして、オソナエを全部食べる。(狐

寛)

モノヅクリ(十一、十二日)

コウズの中から使ってたてたハナをつくり、大正月のシメカザリの代りに上げる。いまはコウズも売れないので、切らないから使わないで、山からハシギを切ってきて、皮をむいてから少しほしておいてつくとハナがよくできる。

同じ日にアーポヒポもつくる。これはヌリデの木で、皮をむいたのと(アワボ)、むかないもの(ヒエボ)をつくり、五尺ほどの竹を切つて上の方三尺ほど割り、先をとがらしたものにヌリデをさしてつくる。棒の重みで垂れてきれいなものになる。お勝手の大がまの近くになつて、堆肥場に立てる家もある。

またヌリデで俵をつくり、大黒さんに上げ、ハラミバシ・カヌカキボウ・スキ・タワ・エンガ・カマなどの農具もつくる。(亀馬)

タワ・カマなどの農具、ハナ・アーポヒポ・七福神(俵)ハラミバシ・ケエカキボウをつくる。(狐寛)

十一日はオクラビラキといい、倉の戸を開ける。モノヅクリともいう。供え餅をやいて食べる。マユ玉をさす木を山にとり行く。

ヌリデンボウの木を切ってきて、刀(大・小)を作る。(今では十三日に作る)また、その木で、七福神(米俵のかわり)一、三、五、七の奇数にする。——(〇〇)を作る。ハシの木を切ってきて、ケズリ花を作る。昔は必ず、一升マスの上でけづつた。これを神棚に供える。(岩ノ

平)

十一日はおくらびらき、朝ぞうにをいただいた。(峠)

オクラビラキの日に切る山菜は、どこの山の木を切っても構わないことになっている。(新井)

テンガ・エンガ・カマ・ナタ・ノコギリ等の道具をノルデンボウ(ぬるで)をつくる。やはりノルデンボウを切つて、その端に米・麦・大豆・七福神などと書いたものを二本とか六本、家によってちがうが、「米俵」と称してつくる。ほかに粟稗の俵もつくる。ケイカキボウも。これは十五日の朝「天下泰平」と称えながら粥をかきまわす。ハラミバシ、ワキザシもつくる。(恩賀)

山からヌルデの木を伐つてきて、テンガ・エンガ・アーポヒポ・イ・タワラ(五つ乃至三つで、米・豆・麦・小豆などと墨書する)を作る。また道祖神祭のカタナを作る。カタナは男性の数だけ作り、十四日の道祖神様の祭りに、小さい方の一本を持って行って燃す。またこの日マユダマの木を切つた。(芦田谷)

ハ ナ

ハナは、白萩やハンノ木でかく、ハナかきなたという小形のナタがある。皮をかくと、くるくるとむけて白いハナになる。一節、三節、五節など作る。長いのは七段一本、十六段一本を作る。

ハナ木は十一日の藏開きの日に伐つてきて、皮を一度むいて、かわかしておく。(芦田谷)

小正月には、ハナ・アーポヒポ・七福神(タワラ)ハラミバシ・ケエカキボウをつくり、神だなに進ぜたりする。(狐寛)

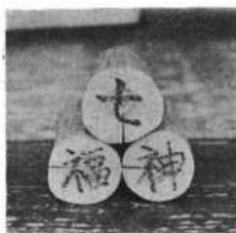
アーポヒポ

小正月の子祝行事として十一日ごろ、ヌリデの木をとつて来て、スキ、タワなどの農具の形をつくり、正月だなのわきにナワをはってそこに柄をかけて下げた。アーポヒポもヌリデを使い、竹の太いのを八尺くらいの長さで切り、先の方を三尺ほど割つて先をとがらせ、皮をむいたものと皮をむかないものとを竹にさして、お勝手の大ガマの近くや、堆肥場になつてもので、木の重さで竹がまわりたれてきれいなものになる。これといっしょにコウズ(こうぞ—紙の原料)のからを使つてナタでゴホンダル(ハナ)をつくり、大正月のシメカザリの代りに上げ

る。いまはコウズを使わないので、「ハシギ」を切つて来て皮をむいてから少し乾しておき、それからつくとハナがよくできる。(電馬)

福ダワラ

ヌリデで福ダワラをつくり、皮をむいた上に俵の絵をかき、「何万石」などと書いてダイコトサンに連せた。これは三、五、七俵という数があった。(電馬)



俵 (遠入)
依 (撮影) 吉岡一峰

ハラミバシ
ハナツクリのとき一緒にヌリデの木を巾広く割ってふくらむように作る。このハシは十五日ガユを食べるときに使った。このカユはどんなに熱くても「ふいて」食べると田植のときに風が吹くといわれている。(電馬)

カユカキボウ

ヌリデでつくるが、コダチ(頭の方)を四つ割りにし、先は杭のようにとがらしておき、十四日の朝、割ったところにマユダマをさしこみ、十五日ガユのときにカユの中をさっとかきまわしてから食べる。このときマユダマがカユの中に入ることがあり、これを食べるとエンギが良いといわれた。(電馬)

カユカキボウは、春の苗代つくりのとき水口に二本たてるのだが、このごろは略しちやつて神だなに上げておく。(遠入・電馬)

カユカキボウは、苗代の水口になたてることになっていて、このときは白米を白紙に包んで(オサゴ)カユカキボウの割りこんだ中に入れてから水口になたてる。(電馬)

正月の品々

だるま・福袋・かゆかき棒・エンギ物・天狗の面。(岩の平、佐藤喜

十郎氏方)



正月の品々 (岩の平)
(撮影 今井喜一郎)

十二講(十二日)
もはやったものというが、現
在はやらない。(狐巻)

小正月

(十三日—十六日)

マルメドシ(マユ玉)

(十三日)

十三日の晩、うどんを打つたべる。このうどんなの事をまぶしのつりなわという。蚤の当るようにとである。十三日夜、マユ玉(米の粉のだんご)を作り、十四日の

朝ふかす。マユ玉はボクにさして神棚へ上る。座敷には大きな木を伐つてきて立て、マユ玉を一杯にさす。十六マユ玉といものは大形のもの、十六個、宝珠の玉といものはやはり大形のを十七個さす。(芦田谷)

トシトリ、マルメドシともいう。山桑の木にマユ玉をさし、神棚、仏壇、エビス様などにあげる。また、このトトリの夜はシラツカユ(お粥のような御飯)を神様にあげる。(芦田谷)

十三日の夜、オマイダマを作る。形はマユの形と丸形。(芦田谷)

十三日はマルメドシといって、マユのかたちに米の粉をまるめて、柳の木をとって来て、それにさして、松をおろしたあとにあげた。おろした松は、どうろくじんのところへもって行った。(峠)

十三日、松飾りなどをおろし、マユ玉を作つて供える。マルメドシ(マユ玉をまるめるからか)の日という。(岩の平)

飾り替える時に、マユ玉を玄米や米で作り、神棚に上げる。そのほか

仏だん、床の間、便所、屋敷稲荷に飾る。中には、座敷いっばいに飾る家もある。二十日正月、しまい正月はしない。(坂本)

十三日はマルメドシで、ボタを切つてきてオマイダマをさす。シマダマのツリナワの意味をもってウドンを夜たべて、そのあと作る。

十四日朝、オマイダマをサイロでふかす。そしてハシノキ(十一日に山桑の木に一緒にとり、皮をむいて乾しておく、素性のよい木を用いる)を小さいハナカキナタで掻き、マユダマをさしたとりにさげる。年神様には十七段のハナ、マイダマは大きい宝珠のタマ型のもの、キヌガサ様と山の神様には十六段のハナ、マイダマは蘭の型のタマを供える。三・五段のハナは門口・便所・厩・豚小屋など生物のいるところ全部にさす。(新井)

マイダマをゆでるときはその湯を馬や家畜にたべさせる。

マイダマは十六日にとる家もあるが普通二十日正月にとる。一番大きいオマイダマの木は座敷の神棚の前に結えておく。撤去するときは結えてあるのを切らず、解けという。

またオマイダマの代りに寒餅をさす家もある。(新井)

仏の年越し(十四日)

小正月は「仏の正月」といわれて、十四日の夜は「仏の年こし」という。だから小正月にはオソナエモチはつくらない。(狐堂)

成り木賣め

ナリモノの幹を、ナタでたたいて傷つけると、その年はよく成るといわれ、今もやっている。(竜馬)

道祖神祭(十四日)

ドンドン焼き 一月十三日、子供が、お正月飾りを集めて、十四日の夜にどんどん焼きをする。

おまゆ玉を持って行き、焼いて食べる。ひとの家のものを食べるといふ。松のもえくじは、たばこの火にしたり、十五日の小豆がゆの火だねにする。昭和四十年まで行なった。(川久保)

正月十四日のドンドン焼きのとき、マユ玉を焼いて他人のものを食べつこをする。火のモエタジ(燃えのこりの火のついた小枝)を持ってきて、家のお祖父さんのタバコの火をつけたり、十五日粥のカマドのもと火にする。(灘田)

ドンドン焼きは、一月十四日の夜行。門松、松、竹を中、高校生が伐つて持ってきて小屋を作り、各人は自宅で夕食をたべた後集つて燃す。山桑の木の先にマユダマをさして持ってきて、あぶつてたべる。そうすると風邪をひかないという。

厄年の人(男二十五、四十二才、女十九、三十三才)がみかん一箱、人によると一十口位を、厄落しとして火を燃しながら撒く。子供はこれを拾つてたべる。

このドンドン焼きは小学生三・四年から中学二、三年生が主として燃すが、後始末は大人がすることになっている。

燃しているとき、経十口位の石を火の中に入れて焼き、燃え終るとこの石をもって道祖神に供える。

大刀、小刀をヌルデの木で作る、大刀はそのまま道祖神に供え、小刀はその先をこがして、それを火種に家に持帰り、年神様の棚の燈明をつけ、年取りの燈明とし、このあと軒下にかけて魔除けとする。これは七、八年前まで行っていた。(岩の平)

ドンドン焼(道祖神)―この火でマユ玉を焼いて食べると風邪を引かないという。厄年の人はミカンを投げる。

ドンドン焼で、長い方の刀(十一日に作ったもの)に火をつけて、消さないようにして持ち帰り、その火でお燈明をあげる、燃えさした長刀はトポロにおいて魔除けにする。小刀の方は道祖神に供えておく。(岩の平)

ドーロクジンは子供の神様である。この日一戸一人ずつ男が出て、お飾りの松・竹を持ち寄り小屋を作った。全部寄ったところで、概ね午後六時から六時半頃、くらくらくなって男衆が火をつけた。このときオマイダマ

を焼いてたべると風邪をひかないといひ、またお正月様に供えたスルメも焼いてたべる。書初めもこの火で燃し、高く燃え上ると手習いが出世するといふ。

ドーロクジン焼きのとき、厄年の男女（男は二十五、四十二、女は十九、三十三で男の四十一、女の三十二はマエヤク、男の四十二、女の三十三はホンヤクという）は厄落しといってミカンを撒く。（芦田谷）

田の中に小屋を作り、今では松も殆ど立てないので竹を持ち寄り、飾りものを加えて燃す。

夕方ドンドン焼きをして帰って、トシリリの酒をのむから、芦田谷ではそのほかは飲まないが、若宮では道祖神のところで酒を飲んでくる。

（若宮）

前日、村中から大人が一人ずつ出て、持ち寄った松かざりなどを使って大きな小屋をつくる。このころは子供たちが中心になってつくるようになって来ている。また、書初を上げる。

ドンドンヤキは、夕食後、村中が集まってからやる。人を集めることばや、うたはない。「オーイ」と呼んで集めてから、火をつける。この日には厄年になる人は集まっている人にみかんをまいて厄オトシをする。（狐巻）

一月十四日、中恵賀では、もと小屋を作つて燃したが、それが原因で火事になつたので、廃止し、上恵賀に合同してやるようになった。上恵賀の道祖神様の前の道で焼く。ワケシーシ世話人が二人あつて世話をする。

焼く時はモノツクリにつくつたワケザシを、男は一人一本ずつほかに道祖神様のブニ（分）として持参する。ワケザシには、「奉納道祖神、年月、佐藤家」などと書く人もある。このワケザシは火にこがして、道祖神様のブニは供え、めいめいのものは家に持って帰るが、そのワケザシにつけた火を正月棚の御神燈に移し、その後は神棚に上げ、又はトボー口に置くと、厄病が流行しないといふ。

道祖神焼きの晩、厄年の者（男二十五、四十二、女は十九、三十三）は、そこでみかんを買つて投げて厄落しをする。

道祖神は子育ての神といひ、また耳の神という。耳だれがなおつた時お碗に穴をあけて供える。（恩賀）

上州側は上州分の道祖神のほこのところ、信州側は信州分の道祖神のところでドンドンヤキをした。

一月十五日が松ひきの日で、この日、エトー、エトーといつて、各家からおかざりをあつめて、道祖神の前でやいた。小屋はつくらなかつた。以前は子供がやっていたが、現在は大人が焼いている。

おさいせんを各戸から出してもらつて、みんで分けてつかつた。正月中におそなえをのせた紙をあつめて、おんべえをつくり、それをさおの先につけて各戸をお礼にまわつた。各家では、いやがらせに、おんべえをふりこまれないように、おさいせんを余計やつた。おんべえかつきは子供のなかで一番大きいもので、親方といつた。（峠）

松井田町に合併してから、このところ五、六年道祖神焼きをやらない。町で配布する門松の紙を、門口に、お正月飾りの時に貼るので、道祖神焼きはできない。

山が近いので、昔から、お松迎えをして、お正月も七日に外飾りを取り、十二日に家のなかの飾り替えをして、道祖神様の祭つてあるところで、門松や、お飾りを燃やし、ぬるでの木刀を焼き、おまゆ玉をあぶつて食べた。少し焼いた木刀は、家の門口に上げた。（坂本）

炭ぬり

ドンドンヤキの火でマイダマやイカを焼いて食べるが、このマイダマを食べるとカゼをひかない。

ヌリデの木でワケザシを男の子の数だけつくつてもつてゆき、ドンドンヤキの火でコガシテから道祖神に運せて、一本だけ持ち帰る。

ワケザシのうらのコゲた所を手持って、炭を手にならして、新しい嫁サマの顔にぬりつけた。これはドンドンヤキの日の若い衆のしごとで、

嫁サマは初ドウロク神のときは行かねばならないしきたりになっていった。(この頃ははしくなつた。)

ドンドンヤキのマイシヤツボリ(燃え残り)を一本持ち帰り、十五日ガユのたきつけにする。(狐書)

水祝い

「原のむこさん、けつあぶり。」

坂本よめさん、水祝い。」

むこさんは、どんどん焼きの残り火の上で胴上げをされ、酒を買わないうと尻を叩かれたものだという。

一月十四日の夜、酒一升買って、宿で若い衆が氣勢を上げた。若い衆には二十才くらいからはいり、その世話人は二人であった。

夕方四時頃に、どんどん焼きの火をつけ、七時頃に夕食をみんなで行なつた。

この行事は、明治三十四、五年まで続いていた。

坂本のよめさんは、かごに入れて水をかけたが、ふだんにくまれている家のよめさんは、かごの戸をあけて、顔に水をかけられたという。

原のドンドン焼きは、小屋を作らない。七日に松飾りはずし、十三日に内飾りを下げ、ドウロクジンバに集めてもす。

まゆ玉を作るが、大きい玉を十二か十六作る。むすびを一つ、それに箸を立てる。年より一つよけいさしたまゆ玉とするめと、ぬるでんぼう二本とをドンドン焼きに持つて行く。ぬるでんぼうは、一本は燃して一本はこがす。こがしたのは、松の燃えくじと家を持つて帰る。

松の燃えくじは、火のたねとして家のかまどの下に入れ、翌日十五日その火で小豆がゆを作り、家中で食べる。ぬるでんぼうは、家の門口に上げる。(原)

かご祝い

一月十五日の午後、その前一年中に嫁の来た処ではカゴイワイということを受ける。部落の男達は集つてイズミ(嬰児籠)のような籠を作る

り、それに二本ヌルデで大男根を作って赤くぬつたのをさしてもつてゆく。その外に小型なものも二本作つて水引をかけてゆく。新嫁のある家へもつてゆき、今日はお祝でございませうからといつてあげる。買った方では有りかとうございませうといたゞく。それから男衆は嫁に籠をかぶせようとするが、近所の女連が出てかぶせまいとする。ヤツシヨイと押し合う。大体籠をかぶせる処迄行って中止して、村の道祖神へ行つて道祖神にかぶせて棒は道ばたへおいてくる。それから座敷へ坐りおめでとうございませうと挨拶する。小さい道具(水引の)は神棚へ上る。

恩賀あたりでは、水で祝いましょうか籠祝いにしましょうかと、聞く。その家で、水は止して籠で祝つて貰いたいというのと、以上の様にする。男根形二本のところと一本の処とある。(赤浜)

カゴ祝いは一月十五日の昼頃、新婚家庭を訪問する。男衆がヌルデの木で男物(キンマラという)を作り、先に丹ガラを塗つて、もとの方をカゴにしぼりつける。カゴを押すと先に出るわけである。これを女が押返すと引込む。嫁の家には村中の女衆がよつていて、村中の男衆十五、六人はかぶせようとし、女衆はかぶせないようにし、両者押しっこをする。ヨツシヨイ、ヨツシヨイと両者で十、二十分位もみ合う。この間新婚の嫁は逃げてゐる。

結局女に押出されて、新婚の家で酒、さかなをもつて男女一緒に御祝儀のときのような大騒ぎをして飲む。あとでキンマラは道祖神の傍におき、カゴは石像道祖神にかぶせる。またカゴは子供を入れるユズミに使う人もあつた。

これは大正五年一月十五日まで行われたものである。(赤浜)

カゴ祝いは一月十五日。この一年間に嫁をもらった家に若いシヨウ(衆)が行つてお祝いをする。

この朝若い衆はそろつてその家に行つて、「御当家にはおめでたい儀があるが、それについて、水で祝いましょうか、かごで祝いましょうか。」と聞く、その家の主人は「一月の寒い時だから、水でなくてかご

で祝つてもらいましよう。」と答える。「それじゃあそうしましよう。」とて、若衆は一升もらつて、その家から一番遠い部落内の家に行つて、つくり物をする。(前記の「水で祝う」というのは、むこがはだかになつて水をあびる行事のことらしい。)

つくり物は、かご、幼児を育てるイズミ(またはユズミという)と道具(男の道具、女の道具といひ、また男の方をオキヤマラと呼ぶ。)をつくる。道具の方は、形もそっくりに毛までつけてある。ともぬで製。これができる、祝う家まで使いが出る。五升樽の上に男女の道具をのせて行き、もう来てよいかどうか、おろかがいゝをたてる。それから若い衆が部落中を練り歩く。

主役になる者を道陸神といひ、子どものオシメ(おむつ)を袴に、女シヨウ(衆)の襦袢を着こんで、ひげをつけ、肥料入れのかますを腰にぶらさげて鬨と、シアーク(ひしゃく)をきせるにし、冠には腰籠をかぶつて、ぬるでの脇差二本、ユーマアたつぷりに、列の先頭をゆく。続いて道具を入れたかごを二人の者がかつぐ。道具はかごの目から出たり入ったりするように仕組んであるから、誠に奇怪な行列となる。

女衆はその家のまかないの手伝いをする。が、右の行列が到着する時には、ザシキの真中に花嫁様を守つて座る。男衆は障子をあけて一度にわたつて入る。そして花嫁様にかごをかぶせようとする。女衆はかぶさせまいとする。一度、二度、三度同じことをくりかえし、かごを嫁にかぶせたことにしてこれは終る。

その後は道陸神がザシキの正座に座り、宴会となる。

なおその後、かごと道具は道祖神(これも道陸神という)に供えておく。その年赤ん坊が生れる家があると、そのかごを貰つて行つて、イズミとして使う。(恩賀)

正月十五日に、五穀豊穡のためということで、昭和七年ぐらゐまで、カゴワイイといつて、その年一年内に来た婿に水をかぶせ、嫁に籠をかぶせた。若い者頭を先頭に、ぬるでのもで作つた真赤にぬつた男根を、

籠の中辺に結びつけて、嫁の家に行くと、女衆がおし返した。嫁は座敷からとび出す。この籠はいずれにはならない。福だるまのように神棚にしんせる。

くぼりゆうまでは、どんどん焼の時、スミヌリといつて手に油すみを婿さん嫁さんにつけた。籠にはいくら塗つてもいいが、顔には塗らないでくれといつた。(下平)

かご祝いは三十八年前、昭和の初めまではやつて、当時は子どもにかつがせて、村中をはね歩かせた。廃止してから祝いは十年ぐらひは続いた。(明賀)

十五日がゆ(十五日)

小豆ガユを作る。十一日の朝、タワラと一箱にケーキ棒を作り、その頭を四つに割つてオマイダマをはさみ、このでこの日小豆粥をかき廻して煮る。お粥はノリデン棒で作つたハラミ箸でたべるが、そのときオマイダマをたべると「キジの卵をみつけたぞ」といって喜びを表わす。

小豆粥を吹いてたべると、田植のとき風が吹くといつて忌む。

ハラミ箸は使用後燃してしまふ。

ケーキ棒は神棚におき、春になって田の苗間の水口に立てる。

前夜のドンドコ焼きのオマトツの燃え残りの火のついているのを、各戸一本ずつ拾つてきて、その火を保存しておいて、この小豆粥を煮ることになつてゐる。

アイビーボーは、竹を割つて柳の枝のようにしてその先にさし、タビバに立てた。(芦田谷)

十五日、小正月の餅を掲ぐ。オカユを食べる。このカユは、ヌリデンボウの木のを四つに割り、マユ玉をはさみ込んだ棒(二本作る)で、かきまぜる。後、この棒を三宝荒神(火と空気と水の神)に供えて、苗代の水口にさす。(岩の平)

一月十五日、小正月の朝、小豆がゆをした。(峠)

朝、十五日がゆをつくって食べる。このときは前につくっておいいたカユカキ棒の割れ目にマユダマを一つさしこみ、二本(カユカキ棒は二本つくるもの)の棒でザツとかきまわしてから、ハラミパンを使ってカユを食べる。このハシは食べづらいが、どんなに熱くても、ふいて食べる。またカユカキ棒でカユをかきまわしたとき、さしておいたマユダマがカユの中に落ちて入ってしまうことがあり、これを食べるとエンギがいいという。(竜馬)

墓参り(十六日)

仏の正月なのでこの日に墓参りする。(狐菰)

十六日は墓参する。(芦田谷)

一月十六日 やぶいり、この日はあそんだ。(峠)

山の神(十六日)

十六日は山の神祭り。十二月、一月、三月の十六日にお祭りする。魚をたべる。正月十六日早く行くと山の神の矢がふるとて、ゆっくり山へ行く。山の神祭りには神様が好きだというので飯を強いて盛って食わせる習慣がある。

山の禁忌—山へ入るのに山の神様は嫌いだとて梅干をもつてゆかない。伐って悪い木は三つ又の木、マド木(山シバがよくなる)で伐ると怪我するという。

山の神の日は神様へオシタメ(注連縄)を上げる。(芦田谷)

宵祭りの形でこの日にやる。宿は順番できまわって、村の衆が招かれて来る。山の神にオミキを上げ、本膳で、ヒラ・ツボ・汁・肴・飯などを盛りつけし、オミキを一杯ずつ重ねまわしてからカン酒が出てノミカイになり、夕飯を食べる。同じことを三月、十一月にもやる。(赤坂) 米を五合ずつ出すがその他は宿で出す。一戸一人は出ているからケエヤクみたいなもので、村うちのことはここできまる。十一月、十二月、一月、三月とやる。(狐菰)

山の神は男の神さまで、もち米だけ出すがその他は宿で出し、酒は一升ときまわっているがお庚申とちがってダシホーケ、ノミホーケになっている。会は山の神のカケジを拝んでからやる。(久保・竜馬)

一月十七日は山の神、山をするような人たちがあつまって、お酒を飲んで祝った。(峠)

マイカキ(十七日)

マイカキといって、オマイダマを枝からとってたべる。(芦田谷)

十九夜さま(十九日)

十九夜さまはお産の神さまで、女だけが集まってお祭りをする。宿はふつうはお産のある家となり、そんな家がないときは順番で宿がきまる。十九夜さまのカケジをかけ、朝の十時ごろから宿に集まってカワリモンをつくり、会食をして、五時ごろまでも話し合うが、終りごろに十九夜和讃を唱える。(小柏)

二十日正月(二十日)

エビス講(十九・二十日)

二十日正月というのはエビス大黒の正月といわれる。

十九日にはエビスサマと大黒さんが働きに出かける日になるので、賃本になるように、一升ますにありつたけの、サツ、ゼニなどを入れて進める。山盛りのごはんを二膳供える。正月様のイワシを食べる。(狐菰)

メシを山盛りに盛り、オカシラツキ(多くはイワシ)、アブラゲの煮つけ、汁を二膳進める。メンペイタ(メンペイターうどんをつくる板)の上にエビス、大黒をのせ、その前に財布ごとのオカネを口を開けて進める。大黒さんがはたらきに行くモトデを出すためだという。(竜馬)

二十日はシマイ正月、オエビス様の日。オエビス様の祭りは、十九日の夜から始める。神棚の前に台を出してエビス・大黒を飾り、お膳を置

き、金をマスに入れて供え持たせてかせぎに出してやる。またその他の供物は十九日の夜はウドン、ソバの長いもの。二十日は赤飯、または小豆飯、オカシラツキ（いわしを主に用い、サンマはサンマサワガシといつて用いない）などである。（芦田谷）

二十日ゴウセン

二十日正月には、七色コウセン（麦、トウモロコシ、大豆などを炒つて石臼で曳いてコウセンにする）を神に供える。その後、十一（三）日に作つた刀を差して家の回りを三度廻つてコウセンガラを撒きながら、「蛇もムカデもどうけ、どけ。俺が鍛冶屋のメイボウ（モエホコリかといふ）だ。ナタガマ八丁。カマ八丁。」と唱える。この行事は蛇やムカデを追い、その害を避けるためである。

十一（三）日に作る刀は結局三種類ある。一は、太さ十cm、長さ二m位のもので、道祖神の火をつけて持ち帰る。二は、道祖神にあげる長さ一m位で、なるべく太いもの。三は二十日正月に差す細めのもの。木は全てヌリデンボウである。（岩の平）

二十日ヌカゴウセンを五合メンバに入れ、オタナにあげそれをもって外に出て、刀を腰にさして家の周囲に撒き、蛇よけをする。そのときの唱え言は

「へびもムカデもどけどけ
やりもかたなもさしてきた

どうなかきられてびりつくな」（芦田谷）

二十日正月にハツカゴウセンというのをつくる。ホーロクで麦をいって粉にしてコオセンをつくり、ふるいでふるってさとろを入れ、神に供えた後で家中の者が食べる。

ふるったかすは入れものに入れて家のまわりにまく、このときドンドンヤキのときにつくって来たワキザシを腰にさした子どもがコオセンをまきながら「へびもムカデもどうけどけ、槍も刀も持つてるぞ」といひながら歩くことになっている。（狐寛）

ハツカゴウセンを家のグルワにまいて歩く。東からまき始める。短いワキザシを二本さして、

へびも ムカデも
オラー カジャノ メイモコダ

ドーナカキラレテ ビリツクナ

と唱えながらまく。

ひきわりをひいた粉をいったものをハツカゴウセンという。（恵智）二十日（朝）はえびすこ。ありったけのお金を出しておえびすさまにあげておいた。本膳を出して、おわんにごはんをもちあげた。

こうせんをひいて（豆、ごまをいれた）おえびすさんにあげておいて、おえびすさんがおおると、こうせんをうちのぐるわに、子供にまかせた。そのときのとねえごと

「へびも、むかぜもどうけ、どけ。おれは火事のめーもくだ。どうなかきられて、びりつくない」といってまいた。これは、へびやむかでがでてこないようにというわけ。（峠）

しまい正月
一月二十日は二十日正月、この日正月さまをおろした。ごはんをあたらしくたいてあげた。おかざりを全部おろしてどろろくじんへもって行ってやいた。（峠）

正月のおカザリは、二十日正月に全部下げることになっている。（竜馬）

馬頭観音（二十日）
村が参加する講にはならなかったが、馬を飼つてる人が多かった頃には、この日、埼玉の神岡の観音さんに代参にゆき、ガク（鞍馬）とササの葉をうけて来て配り、そこでお祭りをして飲食をした。（遠入）

天神講（二十四日）

むかしは二十四日にやったそうだが、現在はこのころの日曜日に子どもたちが集まって講をもつ。男と女は別々に最年長の者の家に集まり、料理をつくって「奉納天満神宮」という字を書きした旗をつくり、薬師さんのそばにある天神さんの石宮にお参りし、男の子はオミキ、女の子は水で一杯ずつ飲み、宿に帰って朝食をする。お昼と夕食の二回食事をするが、現在は小学校へ就学する子どもは「お客さん」として招かれることになっている。(久保)

二十五日は天神講。子供が銭と米を出しあって、宿の家に行き、五目飯やスシを食べる。「奉納、天満天満神宮」と書いた紙の旗を昇社(各部落の神社)に奉納する。(岩の平)

愛宕様(二十四日)

二十四日は愛宕様の祭。精進祭ともいう。朝起きて、お茶も飲まずに宿に行き、御神酒をあげて、飯を食べてくる。(岩の平)

おにの目(三十日)

一月三十日 おにの目をつくった。これは信州分だけの行事、竹のくに、だんごを三つさした。



米のだんご

そばのだんご

米のだんご

怪は五センチぐらい。これを西の方のき下にさしておいた。鬼が三十日の朝こ年始に来てみて、自分の目は二つしかないのに、人間の目は三つあるのかと行って、逃げて行ってしまおうというわけ。これは、二、三日かざっておいた。
上州側ではこの行事はない。(峠)

二月

節分(三日)

豆いり

ホウロクで七トラ(七回)豆をいり、節分をする。七トラいるのは豆が生えないようにするため、かんます(かきまわす)ことはしないでこがした。口封じはやらない。

この日が最後の年とりの日になるので、年取り魚としてサケの切身でメシを食う。(狐堂)

ひいらぎのまたの小枝に、いわしの頭をさして、それにつばを吐きつける。これは、魔除け、虫封じのためである。(川久保)

大豆をいって、豆投げをする。豆がらを燃していりながら「松虫、鈴虫、クワッ虫、コオロギ……」など虫の名を唱え、七回にきっている。魚の頭につばきをかけながら焼く。そしてこれを、水くさの木の二股

にさしてトボー口にさす。(思賀)

豆まき

節分には三時ごろまめをいる。まめは七いりする。ほうろくでいった。主婦がいった。いったまめはますの中へ入れて、神棚へあげておいた。(生理の場合は、女の人には手をつけなかった)

まめまきは夜あけにした。はじめに、神棚とえびすさまのところへまいた。「福は内、鬼は外」といってまいた。「福は内」というときには神棚の方へむき、「鬼は外」というときに、外へむいてまいた。えびすさまのところでは、「えびす、だいきく目をひらけ」といってまいた。

家中まいた。まめはひろっておいで、初雷のときにみんなで食べるとかみなりさんにうたれないといっていた。また、朝、まめを自分の年の数だけたべた。(峠)

三日は節分。豆マキ。「福は内、福は内、鬼は外」「エビス、大黒、目を開け」と唱える。豆は、神棚の前、座敷、勝手(カマド)、便所、物置の順にまく。なお、豆は、取っておいいた秋の豆ガヲを燃やして三度炒る。

節分の豆は、一つ袋に入れて、カギ様(イロリのカギ)つるしておき、初ガミナリが鳴ったら食べる。悪い病気にかゝらない。(岩の平)

主人が「福は内、鬼は外」と各三回唱えつつ神棚、床の間、勝手などに豆をまく。家族の者はその豆を拾い、自分の年だけたべる。また豆を紙に包んで、どこにでもすぐみつきりやすい所にしまっておいて、初雷のときたべる。雷の落ちたときその雷に合ふぬようにとの意味である。また山に行くとき一粒たべて出るまムシに合わないといひ、毎朝一粒たべて仕事に出るとイタチに合わないといひ（芦田谷）
新曆では節分をする。夕方、大豆をいって「福は内、鬼は外」と唱えるが、中には、「福は外、鬼は内」とふざけていう人もいふ。
関心がうすい。（坂本）

豆占い

この夜、夕食後大豆を占いをする。大豆を一粒ずつホドのまわりにおいて計十二粒、これを一粒ずつとり出して、黒くなれば降り、白ければ照り、というようにして、一月はてり、二月もてり、三月は降りなどときめる。（恩賀）

初午（午の日）

二月の新年になつての初めての午の日、ヒノエウマは避ける。蚤を飼う家では各戸別に行い、マンジュウ、オマイダマをお稲荷様にあげる。この日信州岩村田の稲荷様にお詣りする人もいふ。（芦田谷）

初午は節分後初の午の日。マユ玉を作つて一升餅に入れて神棚に上る。（芦田谷）

初午（二月の初めの午の日） マユ玉を作つて神（蚤の神）に供える。初午が丙午なら二の午にする。（岩の平）

米の粉でうでまんじゅうをつくり、マイダマをつくつて網笠さま一蚤の神さまと神だなに進せる。豊蚕を祝うもの。（狐董）

米の粉を湯でこねてアンを入れ、ふかして餅をつくり、ウマの日でエンプがよいといつてタカガミサマ―神だなへ進ぜ、仏さんにも上げて「蚤がたくさんあたるように」ダンゴもつくり、重箱に入れて上げる。下の家ではザルにシビを入れ、まゆをつくるといつてマユダマを入れて

進せる。（小柏）

オマイダマやヒイヤモチをつくつて神様に供える。（恩賀）

この日だんごをつくつた。お宮（熊野社）へおまいりに行った。三十日に西の方（信州側）からおにの目をもらうので、この日は、東の方（上州側）から初午だんご（まゆのかたちにつくる）を重箱に入れて西側へおかせた。（これは親類間の贈答である。）（峠）

ことはじめ（八日）

道祖神の火事見舞

おことはじめは二月八日、この日に、ぼたもちを八つ道祖神にぬる。ことおさまは十二月八日、この日にも、ぼたもち八つを道祖神にぬる。（川久保）

八日は八日もちをつくつた。ぼたもちを各家でつくつてご先祖さんへそなえた。神さまには、つぶしたごはんをまるめて、五つぐらいかみのはちにいれてあげた。（峠）

二月八日はことはじめ、どうろくじんの火事見舞いといつて、ぼた餅を持って行く。（下平）

八日は馬の節供。ポタ餅を道祖神の顔にぬりつけて、残りを家に帰つて食べる。（岩の平）

道祖神祭は二月八日、牡丹餅を作つてもつてゆき、道祖神の石碑や石像にぬりつける。（芦田谷）

朝、ポタモチをつくつてドウロク神の火事見舞といつて、村のドウロク神にポタモチをぬりつける。子どもたちのしごとになっているので、ぬるといふより、はたきつけてくる。（小柏）

ワラで高さ一尺ほどの馬をつくり、おもちを入れるカゴのようなものをつくつて馬の左右に下げこれにおもち―ポタモチを入れて、ひっぱつて行ってドウロク神にぬつて来た。その頃は雪が多いので馬を抱いて行ったこともある。馬は長野県の風習で武田市五郎氏の祖父が長野県の出

身だったので作ってくれたものという。(電馬)

朝、ボタモチをつくって家族数だけもってゆき、おはしなどで少しずつドウロク神さまにぬりつけて来るが、残ったのをもち帰ってかぜをひかないようにオグフウ(オゴフ)として食う。

どうしてこの日がドウロク神の火事見舞かという、ドウロク神は村の入口に立って見張りをしている神さまで、厄病神が村へ入ってゆこうとしてやって来たのを見て、このまま入られては困ると思つてドウロク神さまが、「うまいこと」をいって「オレンチ(おれの家へ泊れ)」といつて小屋へ泊めて、その晩小屋を燃してしまい、厄病神が行く先を書いて来た書きつけまで焼いてしまい、どこへ行つたらよいかわからなくしてしまった。こうして村中を救つてくれたドウロク神さまの火事のお見舞にボタモチをもつてゆくのだという。

もとは、子どもたちはボタモチをぬる役をするだけでなく、その後、学校から帰ってから、村をまわつて各家から何がしかのぜにをもらい、むかしはオミキを買い、菓子を買つて来てドウロク神の前でお祭りをした。(狐蒼)

馬の節供

二月八日は塩原多助が小豆を馬につけていった。川に入つたら、同行した馬はみな流れてしまったのに、多助の馬だけは助かったので、この日を祝うようになった。

馬に小豆を食べさせるといふ。牡丹餅をつくつて食べさせ、また馬をあまりつかいたがらない。またわら馬をつくつて、これに牡丹餅をつけ、道祖神の前にひいていって、あんこを道祖神にぬりつけてくる。これを火事見舞だといふ。なぜかという、正月に道祖神の小屋は燃されてしまったので。(思賢)

三 月

ひな祭り(三日)

古いおひなさまは飯綱さまのおモリに納める。

孫の女の子には初節供といつておひなさまを届けるが、嫁に行った娘には初節供といふことはしない。(狐蒼)

ひなまつりの餅は、二月二十八日や三月一日につく。この餅は一夜餅でもかまわない。ひし(形)に切る。紅はどちらでもよいが、段々にして重ねて進せる。(小柏)

二月の末よりひな飾りをし、三月一日に餅つきをして、ひな様に供える。

餅は、ひし餅で、紅白はあまり使わない。餅のほかに、お菓子も供える。七、八日ごろひなを納める。(坂本)

三日はひな祭。赤、青、白のヒシ餅を供える。ひなは古くなると神社に納める。(岩の平)

三月一日に飾り、しまうのは家によつて異なる。草もちとはごぼう葉を入れてつき、ひし餅をそなえた。また豆いりをし、砂糖をたくさんつけたものを重箱に入れ前年のオミゼンを豆といっしょにあげる。

オミゼンとは、正月にお供えした御飯を干したものである。これは何年も腐敗しない保存食である。子どもたちは近所のヒナサマを見にいってこのオミゼンをもらつて食べるのが楽しみだった。

初節供の土産はとくにきまつていない。

ヒナは小話か松井田の市から買つて贈つた。お返しは節供によんで(主に女衆)コタツで祝つた程度である。(峠)

三日は桃の節供、ひなさまは、一日ごろ、あるだけ出してかざった。三日がおわれましょう。これは家によつてちがう。ひなは、松井田とか

小諸の市で買った。初節供の家は、親類からひなをもらった。また、嫁の初節供の場合には、土産をもたせて里へかえした。(峠)

先祖まつり(十二日)

遠入佐藤家の先祖まつりで、部落中の女衆が、菓子やお線香をもって総本家に来て、大先祖佐藤監物の霊に線香を上げ、オネンブツを申すが、ふつうのときは他部落からは来ない。(遠入)

山の神(十六日)(狐堂)

彼岸

春、秋の彼岸の中日(春分、秋分)には、おはぎを作り、お墓参りをする。(坂本)

ボタ餅や精進揚げなどを供える。(岩の平)

春の彼岸、牡丹餅を作る。天ぷらなども作る。彼岸は中日だけで入り口、走り口は休まない。(芦田谷)

彼岸の入り口の日にはすし、中日にはおはぎ、彼岸あけにはなにか適当なものをつくった。墓まわりは雪が多くて行けない場合の方が多かった。村内で、よその家へおがみに行き合った。おたがいにお茶をよばれてきた。これが楽しみであった。(峠)

庚申講

最近まで行なった。春、秋年二回都合のよい時に、庚申仲間が十七人から二十人くらいで、二組にわかれてした。

男手だけで作った精進料理を食べる。「御馳走さまでした」といってから、高盛りを強いて出す。食べ終わらないと、解散にならないので泣いた人もあったという。

宿にはいると、まず宿の人にあいさつをし、線香を上げて絵姿を拝み仲間へあいさつをし、会食になる。

それから絵姿に線香を上げて拝み終わりになる。(原)

三夜講(三夜様)

女の人だけで、今もしている。

新暦二十三日夜、如意輪観音のかけ軸の前で念仏を唱えたが、念仏を唱っている人がいなくなつてからは線香を上げる程度である。

御馳走を作るのが大がかりなので食事はやめて、だんごだけにした。

上・中・下の隣組にする。(原)

白ひげ神社

明治四十二、三年に、神社の境内にあった三十五、六本の杉、御神木の槍、めぐり二丈もあるけやきを切つて、峠(熊野神社)へ合祀し、白ひげ神社は廃社にした。

今は、仮宮をたててある。(原)

きぬがさ市

三月二十八日、みよさんいっちゃん(鈴木みよ吉、一郎父子の呼び名)の空き地に、銅笠大明神の石碑があり、そこで、桑苗、金物、農機具の市がたつ。(原)

四月

卯月八日

オシヤカサマノハナクソモチというだんごをつくつてお釈迦様に供える。(恩賞)

四月八日に草餅をついて神棚にあげる。(芦田谷)

八日は、太々講で一日すこした。よその家へ手伝いに行く人もあった。(峠)

久保の薬師(八日)

久保の薬師さんにお参りに行くと、ハナクサモチを白いのと青いのとを一つずつくれた。ふつうの家ではこの日にハナクサモチ(モチグサモチ)をついた。(狐堂)

久保の薬師さんのお祭りには、町から露店も出てにぎやかだった。薬

師さんは個人持ちのもので、お祭りのときには何とかダンゴをつくらせておき、お参りに来る人にくれた。いまは久保、鹿馬の衆ぐらしか行かないが、もとは乳の出ない人や、目の悪い人がオガンシヲをかけてお参りに来た。(久保)

コンピラサマ

小柏ではこの日、三急さんの石宮——コンピラサンにボンデンを立て、オミキを上げる。ボンデンは十尺もある竹に麦だわらをしぼりつけ、ゴヘイをきざんでさしたもので、下の部落の道からも見えた。(小柏)

薬師市 (十八日)

四月十八日は川久保薬師のところに市がたち、農機具、苗木、玩具を商う。(川久保)

甘酒まつり (二十七、八日)

入牧全体の春祭り、松井田のコウジヤに注文したコウジで家毎に甘酒をつくり、客をもてなす。好きな人にはシウチュウを入れてくれる。村の衆は甘酒まつりというのだが下の方の人たちはドロク祭りという。(遠入)

四月二十六日午後から二十七日にかけてで、甘酒祭で、廿八日はアトマツリという。コウジを少なくとも二升、普通五六升用い、石臼でついて甘酒を作り、他所からきた人には誰でものませ、また一升瓶でお土産にもたせた。(若宮)

二十七日は鎮守祭。松井田から神主(現在では新堀の高木千尋氏)がきて祝詞をあげる。各戸赤飯や甘酒を作る。(岩の平)

御嶽講

四月二十八日に信州へ、横川の文さん(行者)を先達にしてお参りした。御嶽さんが乗ったという人があったという。

信心している者だけ、お参りをしたが、ごまききは、不動様で行なつた。もう十五、六年やらない。(原)

お不動様のお祭 (二十八日)

不動様の姿が石に刻んである。

これは、弘法大師が羽石山で硯を作り、筆を投げてできたものだという伝説がある。

県内外、遠近より参詣に来る。

その石は、試験のお守りとなる、といつて中学生、高校生が信仰している向きもある。

お籠り堂は二間×三間の建物で、前日から弁当持参でおこもりする信者もある。

坂本の上、中、下宿の世話人衆の当番十二、三人が、事務所(二間×三間の建物)につめて、お参りをすませてから、札と護符を配る。(小柴)

森田氏は、次のように語る。

弘法大師云々とあるが、坂本の宿場が寛永二年(紀元一六二五)に構成された頃に、この辺の神社、寺院も作られたのであろう。(坂本)

四月は太々講(神講)でいそがしくすごした。講中の人を迎えるのに一日おきにした。となりどうして援助しあつた。(峠)

五月

道ぶしん (一日)

昭和三十年に米軍演習地問題で入山峠開通後、入山中の人たちが出て入山峠の道ぶしんが始まった。半日ですむが、町から助成金が出て、峠の上でオミキをもらうのでひと休みしながら、ジュス石やマガタマをさがしたりする。(赤坂)

フジの花 (一日)

この日、軒下にフジの花をかざるが、一夜ものはかざってはいけないといわれる。(狐菫)

八十八夜

「別れ霜」というが、別に何もしいない。(小柏)

端午の節供(五日)

よもぎ、しょうぶを軒端にさす。お風呂にも、しょうぶよもぎを使う。魔よけのため。(川久保)

菖蒲とヨモギを屋根にさし、また、風呂に入れる。節供には赤飯をたき柏餅を買ってたべる。初節句の家へは人形や鯉などを上る。嫁に来た最初の年は赤飯と干鰯をもって実家へ客に行く。(芦田谷)

軒端に、よもぎ、しょうぶをさし家の中に、矢車、鯉のぼり、吹き流しを飾る。この頃、外に立てる家もある。

餅をつく。(坂本)

四日を宵節供といい、ショウブ湯(ショウブ、ヨモギ)にはいる。また、神棚と屋根にショウブとヨモギをあげる。(岩の平)

ショウブ湯(四日)

お節供の前日(ヨイ節供)にショウブ湯をたてるが、風呂に入って腹にショウブの茎の方をあてて、片方の手で葉の方をピービとこくと「腹の虫が切れる」といわれている。ショウブは、二日前にとり、たばねてふろに入れる。(狐菫)

食習

男の子の初節供におひなさまや、鯉のぼりをおくる。この日の料理は家によってちがうが、モチ・オコワ・スシなどをつくる。(狐菫)

この頃になると暑くなって来てモチもまずくなるので、コワメシをつくる。(小柏)

五月八日

四月八日にはハナタノモチとて餅をつくが、五月の方は草餅をつく。餅の花をとって来て神棚、トボー口等にさす。

ワカインシヨは神津牧場へ行つた。(恩賀)

青葉祭(十五日)

若葉祭 五月十五日に碓氷熊野神社で祭礼がある。(峠)

菫もち

春菫の休みのときにヤスミモチをつくが、家によってはボタモチや、アソコモチもあって、隣りの家とか、本家、新宅などのひとの家に配る。向うからももって来てくれる。この日にはモチの外に、米の粉でダンゴとか、マユダマをつくって重箱につめ、菫の部屋へ進める。(竜馬) 菫が休むたびに休みモチをつき、柏の葉を使って包んでふかす。(米の粉でつくる) 麦粉でつくったものを柏の葉で包んでふかすこともあり、こうすると一べんによくふける。柏の葉が黄色くなるとシンまでふける。近所の家にくばった。(小柏)

六 月

ハゲンサマ(半夏至)

むかしハゲンサマという人がいて、この人が半夏至の日にネギ畑に入り立往生したから、ハゲンサマのようにならないようにこの日にネギ畑に入つてはいけない。(狐菫)

男の節供(五日)

月おくれでした。むかしはのぼりをたてた。この日くさもちをした。もちの中へよもぎをいれた。屋根へよもぎとしょうぶをさした。むかし、鬼に追いかけて、よもぎとしょうぶのしげったところへかくれたら、鬼には見えないでたすかったというはなしがある。(峠)

ひとがた(人形)

六月二十日に、熊野神社から区長さんのところへ、それから隣組長へ、ひとがたが配られる。

ひとがたに、年齢と名を書いて、自分のからだを撫でて、八月七日か七月二十日に流す。

これを暑氣払いと言っている。(坂本)

遠入、久保、竜馬などの入山分だけで、狐置や赤坂には峠さま(熊野権現神社)は来ない。一軒に二枚ずつの人影をもって来るので、家中の人が体をなせてから遠入川へ流す。(竜馬)

七月

農休み(十八、十九日)

町村合併の前は十九、二十日だったが、農休みには土用を一日入れるものとなっていた。この日に働くと「ナマケモンの節供ばたらき」といわれ、村中から笑われた。

土用モチをつけて、田植えなどで手伝ってくれた人に重箱へつめてくばり、男にはシャツなどの着る物、女シユウにはユカタ地などをお礼した。(狐置)

モチつきをし、手伝ってもらった人に届けた。男にはタバコ、女には砂糖などと一緒にもって行ってお礼をした。(竜馬)

十九、二十日は農休み。(昔、土用の前日と土用の日は「葦上げ」といって仕事を休んだ。十九日には柏餅、赤飯を食べ、二十日には小麦マシジュウを作った。(岩の平)

農休みは七月十九、二十日。新しい小麦でまんじゅうを作る。嫁さんは家へゆく。

(参考) お嫁さんの帰る日

農休み、正月四日(六日に戻る)お祭り(四月)節供(正月四、五日)別に秋祭りが他所があると入山へ帰ってくる。(芦田谷)

愛宕精進(二十四日)

愛宕精進、愛宕様の所へ精進料理のお膳をもって行って上がり、また、たべた。みそ、きりり、米などである。(芦田谷)

精進祭り(二十七日)

二十四日、正月と同じ様な精進祭をした。(岩の平)
部落の上の方の山の神の石宮に村中から出てそうじをしてから下り、床の間に山の神のカゲジをかざり(あたごさん)、村中の人で一升買ってありあわせのやさいを肴にして飲む。宿は隣り組の組長さんの家になつていた。

戦後は家数もへったりしてやらなくなった。(小柏)

石尊様(二十八日)

七月二十八日、大山祇神社へ一戸一人お参りする。その時、四十二本の幣束をわらに立て、それに長い竹の竿を柄にしてかついで行く。水あびをする行がある。石尊講とも石尊行ともいう。

各人、膳わん、米二合(昼食分)、もち米五合を宿に持ち寄る。

女は手を出さないで、一切男手でやる。小豆、砂糖を買い、大きな餅を作る。宿は、みそ木損といい、みそ、燃料を負担する。昔は、代表を本社参りに品川までやった。(原)

イナムラサン(二十八日)

狐置、赤坂のお祭り、稲村山に登り、石宮(石尊さん)のわきにボンデンをたて、シメナワをはりかえ、オミキ、キユウリ、オコワなどを供えた後、山の上でオミキの封を切り、キユウリを切つて肴にして飲む。急な坂道なので下るにはオミキの足で相当こたえるが、下山後の行事は何もない。むかしは女人禁制の山だった。(狐置・赤坂)

田植えは近所で助け合う。赤飯。(芦田谷)

土用の丑の日、魚を食べる。(芦田谷)

八月

オカマの口あけ(一日)

お盆が近づいたので地獄のカマのふたが開けられ、仏さんが自分の家へ向う日が一日で、炭酸マンジュウをつくり仏に上げる。この日に墓そうじをする。(狐登)

カマの口あけは八月一日。地獄の釜の口があいて仏様がお客に出てくる日。お饅頭を作り、お墓の掃除をする。(芦田谷)

八月一日は川流れの日とよんでいる。まんじゅうをつくって食べた。

(峠)

新暦八月一日、この日は、カマの口あけといつて、生物を殺してはいけない日としているが、この日に墓の掃除をする。(川久保)

オカマの口あけ―御墓の掃除をし、小麦マンジュウを作る。(岩の平)

オカマの口あけは八月一日。この日から仏様が地獄から出て来るので、お墓の掃除をする。小麦粉のおまんじゅう。(恩賀)

道刈り

峠に行く道の草を、盆前に刈りにいく、道全と坂本衆が、軽井沢の道、一之字山への道、小瀬長日向を通る道をかたつた。(道全)

たなばた(七日)

昔は、さといもの葉の露で墨をすり、たなばた祭の文字を筆で書いた。大正年代まで、そのように行なわれていたが、今では井戸水、水道の水で書いている。

新竹か、笹に、短冊形の切り紙や風船、そのほかいろいろの飾り物を下げる。

短冊の文字は、川の名、山の名など何ということなしに、子供、おとなが、六日に書く。

七日の夕方には、飾りを取り去ってしまう。(坂本)

七夕には新竹を切つて来てこの枝に色紙に歌など書いて下げる。土用干しもこの日にする。

七回水をあびて、まんじゅうを七つよけいに食べる、といわれた。

終つてから、竹は大川へ流すか、大根畑へ持って行く。畑へたてると虫がつかないという。(恩賀)

七夕には、七夕飾りをし、小麦マンジュウを作る。子供はマンジュウを七ツ食べて、七回水浴びをするという。

飾りには「天の川」「七夕や」「今日ミササギの」「橋を渡るらん」などと書いた。また、七夕飾りは、大根畑に立て、虫除けにする。(岩の平)

七夕、六日の晩竹をきって、色紙に川の名(天の川、碓氷川、入山川など)を書いて、家の軒先に立てる。六日の晩立て、七日に入山川へ流したり、または大根畑へもって立ってよおく。

昔は川へ行って頭の毛を洗った。(芦田谷)

たなばたにはぼたもちを作つて食べる。かぜをひかないため。(川久保)

炭酸マンジュウをつくつたなばたさまに進げる。たなばたかざりもするが川に流さず、大根畑に立てると虫がつかないというので畑にたてる人も多い。

この日はキュウリ畑に入つてはいけない日で、もし入れれば大水がでて水害がおこるといふ。(狐登)

八月七日が七夕である。この日の朝墓掃除をし、盆だなのチガヤと杉の葉をとつてくる。

七夕飾りは子供たちがつくる。七夕の竹は、七夕がすむと大根畑へ立てる。紙飾りのイカリだけは近くの川へ流す。(坂本・原)

七日は七夕、竹をとってきて、五色の紙に歌をかい、笹にゆわいつけた。新鮮な果物とか着物をあげた。七夕さんには、きゅうりとかなすとか果物を、机を出してその上にあげた。そのうしろについたてなどをあげ、あたらしい着物(ゆかたなど)をさげた。

七夕さまは女の神さまという。

おまんじゅうもこしらえてあげた。竹は二本たてて、一本は川へ流し、一本は大根ばたけへもって行ってた。大根のむしよけになるといった。(神)

盆 (十三—十六日)

迎え盆 (十三日)

十三日、朝露のある頃、ちがやを刈り、日に干す。午後叩いて繩にして、盆棚を結う。

位牌をきれいにし、盆ごさを敷いた盆棚に飾る。盆棚は、新竹に、草や杉の実のついた小枝を、ちがやの繩にさして作る。

夕方、入浴してゆかた姿になり、盆迎えに行く。

三本辻で、線香一束上げる。

「おじいさん、おばあさん、この煙に乗っておいで下さい。」

ほうづきちようちは、ロソクの火をともして手に持って帰る。その火を盆棚の火に移す。線香をめいめい三本ずつ立てて拜む。無縁仏はふだん回向してもらえない仏のことで、棚の下でもてなして、供え物をする。(川久保)

灘田部落では盆の十三日は早朝露の下りない中に、チガヤを抜いて日向に拡げて干し、午後はそのチガヤで繩をない、盆棚をつくる。盆棚の四隅には新竹を立てる。位牌を盆棚にならべてから風呂に入り、浴衣姿になって三本辻まで行き、線香を三束立てかける。そして、

「おじいさん、おばあさん

この煙に乗って

お出で下さい。」

と唱える。それから提灯に火をともし、門口にきてサンダワラにこの火を移し、さらに盆棚へと移す。そこで盆棚に線香を立ててから夕飯に火を無縁仏は三本辻に線香一束をおいておくと、その煙に乗って来ると伝えられている。(灘田)

八月十三日、迎え火をたいて、迎え盆、送り盆は十五日(原)十三日の夕方庭で麦稗をたいて、「ほんさま、ほんさま、この煙にのって来るように」という。(戸田谷)

十三日夜、迎え盆。夕方路傍で、麦ワラを焚き、「オジイサンも、オバアサンも、この煙に乗ってござあれ、ござあれ」という。その晩は精進揚げを供える。なお線香の両親の位牌は棚の上にはあるが、客仏といって、供え物は棚下に机を置き別にする。(岩の平)

庭先で麦わらを燃して「盆さん盆さん、このけむりに乗って(このあかりに)来とくれよう」と大声で呼ばわってから家に入り、盆だなへ灯りを入れるので、墓には直接行くことをしない。

この夜はメシになっていて、必ず魚を買って来て食べることにきまっている。これは「仏に口を吸われないようにナマグサを食う」といい伝えられている。(狐堂)

八月十三日の夕方、三本辻で、麦わらを燃す。めいめいの家である。この時、子どもたちは、

ジイサンモ、バアサンモ
コノケブリニ乗ッテ、キャツツヤレロー

と唱える。(恩賀)

先祖さまは、十三日の夕方、お墓へむかえに行った。よそいぎの仕度をして、むかえに行った。むかえほんとして、自分の家の庭で火をたいた。そのけむりに乗っておぼんさんがおいでになったという。となえごととはべつにない。

お棚へそなえものをあげるのに、ほうの葉をしいてその上にあげた。

(神、水沢家の場合)

盆 棚

八月十日までに、墓の掃除をする。

山へ、桔梗、おみなえしなどの花を取りに行く。

十三日、新竹で筒を作り、墓の前に置く。家では、仏だんを飾る。杉の葉を、ちがやでなった細い繩に下げて、新竹にしめ繩のようにして、

上下二段に張る。

新盆の時は、盆ごさを新しく買い求めて、別に仏だんを作り、仏をまつる。

仏だんには、なす、きゅうりに竹の枝などで足をつけたものを供える。

お盆の間は、おはぎを作り、お供え物をする。(坂本)

新盆だけでなく、盆棚を作る。

無地が多いが、盆ごさを買ひ、棚に敷き、ちがやでなった細い繩に、杉の葉、ほうづき、青い物を下げて新竹の葉の少ししいたものに、しめ繩のように上下二段に張る。無縁仏は別にする。(原)

盆棚は、四隅に新竹を立て、前に一本横に渡して、ちがやでなった繩

でとめる。その上に盆ゴサを敷き、全ての位牌を仏壇から出して、その上に安置する。ちがやの繩には、草花を切ってきて指す。(岩の平)

盆棚の上段には重箱に入れ、下段にはお皿に入れて供える。西上州では一般に結婚前に死んだ者は、盆棚の下段にそまつに祀られるのが普通であるが、ここでは上段に祀られる。

線が実の親の位牌をもらってきてお盆のとき祀るのは、キヤクボトケといっている。

なおお盆を終えて送るときは、オベントウ(団子)を芋の葉やカボチャの葉にのせてもたせる。(岩の平)

盆だなは茶の間につくる。(峠)

まこもとってきてすだれをつくった。それを段の上にひいて、その

上へご先祖さまをかざった。ぼんだなの柱は各家の事例によってちがう。(ほうの木の家もあり、かしわの木の家もあった)これは毎年山へとりに行つてつくった。なわは麻でなつた。(峠)

盆棚作り、十二日に作る(芦田谷)

盆だなは十三日の昼につくることになっており、青竹四本で柱をたて、クソツバ藤やチガヤでなつた二重にまわして杉葉(ひのきを

を使うことも多い)を下げ、盆だなをつくる。

ナスの牛、キユウリの馬をつくり、足には竹を使い、牛は少し短かく

して角もつけ、しっぽにはトウモロコシの毛を使う。先祖の位はいく

り出しに入れてある古い物も出して並べ、盆の風に会わせる。えらい者

から順に奥から並べる。(狐宮)

普通の盆の場合は、仏壇の両端に新竹を立てる程度で特別棚はつくら

ない。アラポンの家では、仏壇の前に蚤のカゴデー(台)を出し、そこ

に、ガマを刈つて来てあんでむしろのようにして下げ、そこに新しい位

牌その他を飾る。胡瓜、茄子等にて馬をつくる。(恩賀)

盆ばなとり

盆花はキキョウ、アワバナなどで、主に採草地(かつて共有)からと

つて来る。(恩賀)

盆ばなは十三日前に近くの間からとってくる。山ゆり・おばな・おぜ

んばな・ききょうなどである。

佐藤和郎、佐藤弥太郎両氏の家では、南軽井沢の原までとりに行く。

もとは歩いたが、いまではバスか汽車に乗って行く。(原)

十三日は迎え盆で、この日山へ仏さまへあげる花(なでしこ、おみな

えしなど)をとりに行った。(峠)

盆花とり、十二日より前に盆花をとる。桔梗、粟花等。(芦田谷)

無縁仏

子どもの位はいも他の仏さんと同じに上へ上げる。

むかしは無縁仏はたなの下に机などを出してのせ、家の仏は上のたな

にかざったが、だんだんそうしたこともうすれて今では無縁仏も変わりなくなつた。(遠入)

子どもや、人になれなかつた者は、お盆のときは盆だなへ上れないから段を二段つくり、下の段に子どもをの位はを上げる。無縁仏は関係がないかぎり上げない。(赤坂)

盆棚は作る。無縁仏(位牌も何もない)は一段下の棚を作って祭る。お客仏は普通の上の棚、御馳走は別々に上る。(芦田谷)

無縁仏は棚のわきにちよつとしたおぼんでも用意して、そこへそなえものをした。無縁仏はよそへ行ってなくなつた人たちなどのことである。(峠)

新 盆

新盆の家には、親類や近隣の人が新盆見舞に行く。(坂本)

新盆の時、十四、五日に親類や近隣の人が、そうめん、線香、砂糖を供えてお見舞をする。(原)

普段の盆には他家へ行かぬが新盆の家へはお金やうどんを持って行く。(芦田谷)

新盆の家へ隣り組とか親せき、親しい人とかの関係深い人たちが十三、十四日ごろ行く。十六日は送り盆になるので行かない。

仏の好きだったものとか、線香、ろうそくなどを持って行く。(狐蒼)

新盆の家にはアラポンの見舞に行く。昔はうどん粉を持って行った。普通の場合の挨拶は、「ケッコウナオ盆サンデ、オメデトウゴザイマス。」(恩賀)

あらぼんのときには、親類縁者がいろいろなものをもってきて、仏さまにそなえた。そのときのあいさつは「おさみしいおぼんです。」(峠)

送り盆(十六日)

墓の入口に、なす、きゅうりの馬を持って行き。送り火をたく。(坂本)



おくり盆の供物 (久保)
(撮影 萩原道)



おくり盆の供物 (久保)
(撮影 吉岡一峰)

送り盆は、さと芋の葉にみやげ物を包んで、

「おじいさんも、おばあさんも おかえり下さい。またお彼岸 において下さい。」

という。家によっては十五日夜、十六日朝にする。

「お盆中は、いきものを殺す なトンボ、セミ。」

という。(川久保)

送り盆は、サトイモの葉にみやげものをくるんで三本辻にゆき、

おじいさん、おばあさん おかえり下さい

と唱える。(渡田)

送り盆には、道祖神のところに、盆棚や、供えたケユウリ、ナスの馬などと里芋の葉につみんで

持って行く。お茶も紙につみんで持って行く。それらに火をつけて、

「オジイサンも、オバアサンも、この煙に乗って行きなよう。

また秋の彼岸にはござあれ、ござあれ」と唱える。昼に供えたダン

ゴも持って行き、出会った人と交換してくる。それを食べると夏ヤセし

たり、病気になるという。(岩の平)

やはり庭で火をたき「盆椽盆椽、この煙にのって帰ってくれろ」と唱える。茄子や胡瓜の馬を辻のところへ捨てる。(岩田谷)

十六日朝マンジユウを遣せると、午前中にボンダナを外し、お供えものは全部下げてキユウリの葉やカボチャの葉に包み、こぬか(馬のえさか)お茶をそえてもってゆき、川原や道ばたにひろげて練香をたてて来る。このとき他人の家のものをもらって食べるとカゼをひかないといふ。

夜になると庭先やケन्दで表わらを燃し、「盆さん盆さん、この煙に乗ってとくれよう」とか、「盆さん、このあかりで帰とくれよう」といって送り出す。迎え盆も送り盆も主として子どもたちが唱え言をいうので、その時間になると遠くからも聞えて来る。(狐薈)

遠入ではお墓が部落の東の方にあっても、村中の家が西の川原の辺まで行って表わらを燃して、迎えたり、送ったりする。(遠入)

家中そろって墓参りに行く。水・だんご・練香・花を持って。盆に供えたものは、がまごごに包んで、川に流してしまふ。墓参りがすんでから、三本辻で火を燃す。その時の唱え言。

「ジイサン バアサン

ケムリニ乗ツテ、イガツシヤレヨ

秋ノヒガンニ マタゴザレウウゴザレヨウ」(恩賀)

朝、仏さまにあげたもの一切を、まこもにつんでしまふ。それをむかしは、軽井沢迄のがけへ送つたが、今は山へすてていよう。

夕方、むかえほんのように庭先で火をたいた。そのけむりのつて、ご先祖さまはおかえりになるといった。

この日やぶ入りと称して、奉公人をやすませた。(峠)

八月十六日はやぶいり、仏様が地獄のかまの蓋をあけて出てくる日といふ。(峠)

盆の食事

十三日は米の飯に天ブラ、臭いものを食べなければ仏様に口を吸われ

ると言つて、魚を食べる。さば、ます等。(恩賀)

十三日のごちそうは、朝、おまんじゅう。

十四日は、そうめんでもしてあげた。

十五日は赤飯。

十六日はおくりぼん。この日のごちそうはぼたもち。(峠)

十四日朝、マンジユウ。昼、ウド。夜、ゴハンを供える。

十五日朝、ボタ餅。昼、ウドン。夜、ゴハンをあげる。

十六日朝、ゴハン。昼、ダンゴ(真中にタボミのある)を供える。

(岩の平)

十四日朝 ボタモチ

昼 うどん

夜 メシ、てんぷら

うどんは盆だの手に生のものをひっかけて手綱とする。

この日上州芋(さと芋)を葉のついたまま洗って進ぜる。

十五日朝、あずきま(めし)

昼、特にきまつたものなし

夜、うどん(そば)、冷むぎ。

十六日朝、タンサンマンジユウ。(狐薈)

盆踊り

盆踊りはお祭り(九月十五日)とかお盆の時に随時やられた。明治四

十三年以前までしかやらなかった。曲目は越後の唄が多かった。三界

節、甚九、おけさ、伊勢音頭とさまざまであった。円陣をつくつてや

つた。囃子は太鼓しか使わなかつた。宿場の空地を利用してやられた。時

には揃いの浴衣を着たこともあった。(坂本下宿)

先祖まつり(二十八日)

狐薈、赤坂の佐藤家の先祖まつりで、昔は本家に集まつてお祭りをしたが、明治二十年ころから当番制になり、ボンデンをつくつてご先祖の墓とみられる古い三カ所のお墓にお参りし、宿に帰つてからお祭りの

酒となる。時期のやさいや料理などをめいめいが一種ずつ持参することになっているが、その他は宿で出すことになっている。(狐萱・赤坂)

トッコシ (年越し?) (三十一日)

二十十日の前の日にあたり、翌日の二十十日が無事にすむようにというので、マンジュウをつくり、神や仏に供えてお祈りする。(小柏)

九月

二十十日 (一日)

カワリモンをして神、仏に供える。ことばとしては八朔の節供というものがあるが、特別のことは何もしない。嫁が実家へお客に行くこともしない。(狐萱)

二十十日、(八朔といつてはやらない) 九月一日で、赤飯をたく。(芦田谷)

田谷)

赤飯、マンジュウを食べる。(岩の平)

二十十日 (十日)

簡単にやる。(岩の平)

二十十日と同じようなことをする。(萱狐)

十五夜

旧暦八月十五日の夜。すきを上げ、お供えはまるいだんご、あん入りだんごもある。柿、さつまいもなど。物質のない時、子供が下げに来たが、今はしない。

十三夜は、旧暦九月十三日の夜、十五夜と同じようにやった。(原) ススキ、線香、水をあげる。また月見ダンゴ・小麦マンジュウ・柿・栗・枝豆などを供える。子供たちが竹棒にクギをつけて盗みにくる。(十三夜は十五夜と同じ様であるが、ススキのかわりに菊の花を供え

る。(岩の平)

十五 月見、炭酸まんじゅうを作る。(芦田谷)

ススキ・小麦マンジュウ・柿・枝豆・栗などをお月様に供える。(芦田谷)

田谷)

マンジュウをつくり、十五夜を十五夜さんに進げる。(小柏)

炭酸マンジュウとダンゴをつくる。さつまいも、くり、かきなども机の上に供える。この日に曇ると翌年の小麦があたりという。この日はマンジュウなどを誰かが取ってもさしつかえない日になっており、子どもたちが活やくする日だった。(狐萱)

彼岸

変り物(だんご、ぼた餅など)を中日に作る。お墓参りしない人が普通。(芦田谷・若宮)

仏にぼた餅や小麦マンジュウを供える。(岩の平)

春の彼岸と同じ。(狐萱・峠)

彼岸の入りやアケには、カワリモンのスシやポタモチなどをつくる。中日にお墓参りをする。お墓参りには、この朝つくったものと、アライゴメ(神に供えるときにはオサゴを使うが、仏にはオサゴはいけなし)と水をもって行く。(狐萱)

社日

社は彼岸についてまわるといだが、特別の行事はない。(狐萱)

八幡宮の祭典

昔は、四月にも行なっていた。五、六年前まで九月十五日に秋祭をしていた。その時は、街道の軒近く竹を一列に立て、しめ縄をはり、赤いちょうちん(ほおづきちょうちん)を下げた。ちょうちんは、上、中、下という文字入りで、共同のもので、祭当番から配布された。このようすは、県内でも珍しいと言われていた。

今は、十月一日に祭をする。

神主は、峠の熊野神社の曾根氏である。神社総代は、上・下・中より各二名ずつ出ている。

道路が舗装されてからは、軒下へはおづきちようちん、少ないが御神燈を下げる。

祭の下の行事に、獅子舞があつたが、明治の年代に終わってしまった。(坂本)

十月

十三夜

十五夜をしたら十三夜もするものだという。今はしない家が多い。

この日にもマンジュウをつくり、十三コ供える。(狐寛)

秋祭り

上恩賀では旧九月十五日が神明様の祭りで、中恩賀では旧十月六日が行者様の祭り。ともにオコワをふかして、互によばれっこした。

また全体のお諏訪様の祭りは旧七月二十七日で、世話人が甘酒をつくり、参詣者に吞ませた。また獅子舞が甘菜郡の大栗から来た。(恩賀)

紅葉祭(十五日)

熊野神社の大祭。戦前は長野群馬・両方の県庁から奉幣使が来た。

(峠)

ナイシヨまつり(十五日)

この日は入牧全体の秋祭りにあたるが、神職も頼まないし、特別に他にも話をしないでナイシヨにお祭りをするのでナイシヨまつりという。

(狐寛、他)

十五日は秋休みといい、赤飯をふかして食べ、仕事を休む。

ナイシヨ祭をする。(村だけでやり、親類などよばない。)(岩の平)

山の神祭り(十六日)

山の神祭りには女衆が、午後から宿に集まり、ご馳走を作る。男衆は夕方から集まる。酒、食事の前に、山の神(掛軸に書かれている)にお線香をあげる。飯は山盛りにして食べる。宴が終ってから、オチノコボでまた食べる。(芦田谷)

十一月

十日夜(十日)

みょうがの枯れたのを、ワラで包んで、ワラデッポウを作つて、子供が七、八人集まつて、

「とうかんやは、いいもんだ。」と、唱えながら庭を叩いた。(原)

トウカンヤ。餅をつく。稲ワラを細い縄でまいて、ワラデッポウを作り地面を叩く。その折、「トウカンヤ、ヨイモンダ。アサキリソバニ、ヒルダンゴ、ヨウメシクツテ、ブツバタケ。モグラモ、ネズミモドウケドケ」と唱える。(岩の平)

十日はトウカンヤ。お月様の祭りともいう。みょうがの軸をとつて、それにワラをまき、地面を叩く。モグラを追いはらうといわれている。

(唱え言は岩の平部落と同じ。)(芦田谷)

トウカンヤは「大根の年とり」で、長いのと丸いのとを一本ずつ供える。モチをつく。

わらの芯にみょうがを入れてワラデッポウをつくり「十日夜、十日夜、朝そばきりに昼だんご、夕めし食つて腹デエコ(太鼓)」と歌いながら地面を叩き歩く。もぐらに田畑をおこされないようにやる。(狐寛)

月の十日にやり、餅をつく。みょうがの芯を入れ変わらでつくる。

(小柏)

餅をつき、大根二本と共に縁がわに供える。子どもたちは麦畑にもぐ

らがつたぬように路面をたたいて歩く。

「十日夜 十日夜 十日夜はいいもんだ。朝そぼきりに昼だんご 夕飯 ぐつちやあ ぶつたたけ。」(恩賀)

むかしは、多少夜にかしたようだが、十日夜なし。(峠)

旧曆十月十日の夜、芋がらをしんにしてわらをたばねて、ワラデッコウを作つて、子供がたいた。

今はしない。(坂本)

エビス講 (二十日)

十九日は宵エビス。赤飯をふかし、オカシラツキをあげる。ケンチン汁や煮シメも作る。升に金を入れて供える(岩ノ平)

エビス講は二十日の朝まつる。お正月と同じ。(峠)

二十日はエビス講。夕方エビス様を迎えて、赤飯・オカシラツキ・煮モノ・ケンチン汁を供える。またお金を升に入れて上げることになっている。

(この部落のエビス様は、一月二十日まで家にいることになっている。一月十九日の夜には、ソバ、ウドン酒など供える。その折、お金——エビス様のオコソカイとして、また、お金をかせいでくれる元手として——をあげる。二十日早朝には、ゴハンの高盛り、オカシラツキ、煮モノを供えて送る。)(芦田谷)

昔は十二月だったが、今は十一月二十日に行なう。

峠の神主(熊野神社)、その日の御馳走を供える。

夕方、えびす様に、その日の御馳走を供える。

一月二十日にも、えびす講をする。これは、暮に帰って来たえびす様が出かける日だという。朝に、御馳走を供える。(坂本下宿)

風船上げ

大正のはじめ頃まであった少年の遊び。十七、八才の者が頭になって高等科の生徒といっしょに、竹で風船を作つた。

風船は、直径三尺くらいの竹の輪をまず作る。それに十文字に針金をかける。竹の輪の上に、輪をふちにして高さ三尺くらいになるまで、使

つた溜子の紙の袋になるように張る。

よくかわかして、針金の十文字のところに石油をふくませた布をつける。たき火をして、袋の中に軽い空気を満たすように、みんなで、風船をたき火にかざす。袋の様子を見て石油をふくませた布に火をつけて、上昇しそうな頃合いと、しもから吹き上げる風とを見はからつて、手を放す。すると、風船はふわりふわりと、どこまでも上つて行く。火が消える頃には冷えて、どこかの山に落ちる。十月から十一月頃の行事であった。危険だというのでやめた。(原)

クワアライ

麦まきが終つたときにやる。もとは麦まきというのとタレ、肥といつて、下肥と堆肥、水、麦種をハンギリ(半切り)という大きな入れものに入れてかきまぜ、肥桶でベッタラベッタラとまいたりして、農具などが汚れたりしたのでやったことだという。(龍馬)

十二月

川渡れ(一日)

不淨不潔をきよめる日といわれ、あずきめしをつくり神仏に供える。年神様かくるので清める(狐堂)

コトオサメ(八日)

十二月八日の「オコトオサメ」の日にボタモチをつくり、道祖神の顔にぬりつける。「オコトオサメ」の二月八日も同じことをする。(灘)

八日—コトオサメ。アンコ餅を作る。(芦田谷)

一年中の年貢(税金)をまとめて納めたお祝いで餅つきをする。(狐堂)

八日餅は十二月八日、二月と同様に餅をついた。(峠)

コト納め(十二月二十日頃)

コトオサメから正月までは仕事をすもんじやなかった。コト納めには女衆もまじって遊んだ。家にころころして、ホンビキをして、一文銭をかけて遊んだ。番長が五、六本の綱を投げて、玉のついた綱を取った人が勝ちになる。(小柏)

ヒツジダンゴ

またはヒツジダンスという。十二月八日あるいはそのころの羊の日。オマイダマを平べったくしたものを置に三つあるいは五つぐらいさして、トボー口、屋内外の神々にしんぜる。鬼が来ないという(恩賀)

十二月八日の日を事納めという。このころの羊の日にだんごを作る。鬼の目は二つだけど、お山の目は三つあると言つて、そばだんごを三つ串にさしてトボー口に出す。(明賀)

山の神(十六日) (久保・小柏)

やしきいなり(十五日)

各人の家で、幣束を切つて石宮に納める。赤飯・ごまめ・めざしなどの頭つきを供える。供える時に、いきをかけるな、供えたら、後をふり向くなという。

赤飯は、重箱に軽く入れて、供えに行き、供えた残りを「ゴフ」といつて家中で少しづつ分けて食べる。

十二月十五日の夕方の行事である。(原)

十二月十五日にやしき神様のお祭をする。しめ縄をはり、赤飯、おかしらつきを供える。(川久保)

十五日はイナリ祭。赤飯とオカシラツキを供える。供えものをしたら、後をみないで帰る。上げたものは、きれいに食べてもらう方がよい。(岩の平)

イナリ祭(屋敷祭ともいう)

イナリ様は、家の傍の石宮に祭祀されている。祭の折に、石宮の傍に飯宮(スギ、ヒノキの枝などを立て、柱とし、それに薬屋根をつける)

を作り、そこに、赤飯、油揚げ一枚、イワシを半紙にのせて供える。

松迎えをする。山に入って三階松を巡んでとつてくる。松は子供や女衆のまたがないところにおく。(芦田谷)

十五日は狐置のイナリ宮の祭り、もとは村の入口からノボリが神社まで立つたという。今は特別の祭りらしいことはしない。氏神がイナリサンなので各家ではオコワをふかす程度で特別のことをしない。

(狐置)

やしきいなりのお祭は、十二月十五日に行なり。

宮作りは、前日の十四日にする。

いぬの日は、十五日がいぬの日ならば、延ばす。赤飯、おかしらつきさかな、あげ(油あげ)を供える。

宮は、石宮が多い。

宮作りといつても、石宮に、オンペロを下げて、しめ縄をはるだけで、わらで飯宮を作る家は、ほとんどない。(坂本)

秋休み(十五、十六日)

秋のとり入れが終り、ひと息つくときにあたり、ちょうどハチャヤ柿もく時期でもある。

コワメンをふかして遊ぶ。この頃はレジャーとかいうので旅行ばかりなので旅行に出かけることが多いが以前は芝居や、義太夫などの演芸会をやったことも多い。(小柏)

すすはらい

二十七日をヨゴレ年といひ、大掃除をする。(岩の平)

大掃除は二十五、六日ごろする。すすはらいは使わなくても青物で二本作るもので、使った後は、どこかじやまにならない所におく。夜はヨゴレ年といひ、初めての年取りで、サケの切れ身を白飯を食う。(萱萱)

十三日はすすはらい。雨がふるうが、雪がふるうが、十三日にすすはらいをした。(水沢家)ただし、家によって日どりは多少ちがった。この晩お年とりだといひ。おかしらつき、けんちん汁、白のごはんをし

て、手伝ってくれた人たちをよんで、いろりのはたでまろくくなってごちそうをいただいた。

笹の葉をとってきて、さおの先につけてすずをはらった。それはあとでやいた。キリ火をしてふくちをつかって神さまに火をあげた。この火でいろりもきよめて、あたらしく火をつけた。いろりも、こたつも丁寧にはらった。(峠)

冬至(二十一日)

カボチャ(中気にならない)とコンニャク(一年中の砂はらい)を食べる。また、キンカン(金貨がたまると)、ギンナン(銀貨がたまると)、ニンジン(銅貨がたまると)、ハンペン(おふだ一札がたまると)、レンコン(お鳥目がたまると)を食べると、一年中お金に不自由しないという。(岩の平)

歳末諸事

お歳暮

実家へはサケの塩びきをもってゆくことにきまっている。仲人には小さいものをもってゆすが、子どもが生まれれば仲人のところへは届けなくともよい。(孤萱)

餅つき(二十八日、三十日)

二十八日は餅つき。一、十五、二十八日は神棚をいじってはよくないといわれ、大掃除はしない。二十九日は、モチといって、餅をついてはいけない。(岩ノ平)

三十日、餅つき。最初についた餅から、お供えを十二重ねとる。(声田谷)

一夜餅はよくない。このごろは遠くの親せきなど送る都合があつて早くつくことになり、二十八日に餅つきをする家が多くなつてきた。(狐萱)

餅は二十八日についた。(水沢家) タンチモチはいけないといった。苦餅だから。餅の種類はつぎの通り。

くさもち—ごぼうっぱを七月ごろ山からこいで来て、乾燥しておく。それを暮に出してよく水でにて、よくよくさわつてつきこんだ。米だけの場合と、あわ三に米七ぐらいの割合の中につきこんだ場合もあった。これは神さまにはあげなかった。のしもちにしたり、あんをいれたりした。

あわもち—米七にあわ三ぐらいとか、両方半々ぐらいの割合でついたもの。のしもちにしておいたべた。

おそなえ—米だけでついた。神棚、おとしだな、ご先祖さまなどへあげた。径七、八寸ぐらいのおそなえを二そろえずつあげた。ねずみも神さんだといつて、お勝手のところへ二そろいあげた。これはやや小さいもの。それをねずみもつて行ってしまつと、「よかつた、よかつた」といい、もつて行かないと、縁起がわるいといつた。(峠)

おかざり

三十日は松飾り、出入りして枝が三段、五段の松を切つてきてする。門口には新竹を切つてさす。

ワラの椀を作る。(三が日、門口に朝晩供え物—家族の食事と同じ—をする。神棚の供えものには、七ツ鉢といつて、ヒノ木のマゲモノを使う。)

神棚の前には、竹の棒に、串柿・スルメ・コブ・イワシ・ミカン等をさけて、供える。

なお、お飾りは三十一日にはしない。一夜飾りとして忌む。(岩の平)

餅つきの後、お飾りをする。年神様の部屋は総じめ(部屋の周りにする)にする。年神様には、栗・干柿・ミカン・イカ・コブ・イワシ・マリ・ハネなどを供える。(声田谷)

シメナワや松かざりは、餅つきの日にいろりばたでつくり、かざりつ

ける。つくるのは正月より二日前の夜用意するもので、一夜もんはきらわれる。

総じめー 正月だなをつくる部屋のまわり中にシメをはるが、戦後は略した。

八勝神ー 正月だなへ五、他に三つつけてかざりつける。

コシタベー 小さいもので、神社、お墓、道祖神、水神、イナリサン、観音さんなどへ上げる。(狐堂)

おかざりは、もちがつけてからで、二十九日か三十日。

門松は、松を立てた。芯がたつていないといけなかった。ただの枝松ではいけないとした。(峠)

坂本の本陣が正月の門松を飾らないうちは町の者は飾らなかつた。本陣のようすを見てからやることにきまつていた。本陣が潰れてからは、神主の佐藤家がやらないうちは町の各戸が飾らないというように変ってきた。(坂本)

年 神

昔はチャノマ(イドコ)の部屋の周囲にシメを張った。今は神棚にだけシメを張る。神棚には大神宮様、年神様(天照皇大神宮)三宝荒神を祀る。供え餅も供え、神棚の前にオカザリをつる。それはコブ(喜ぶ意)・ミカン・カキ・イカ・イワシ・ハネ(はね上るようにとの意)・マリ(まるくの意)・トリ(くりまわしのようにとの意)・マス(益々繁昌するようにとの意)などである。(芦田谷)

神棚は南向きで、常設にしてある。年神さんのお年棚は、暮の二十七、八日のころに出して、茶の間につた。神棚は南向きだが、年神さんは神棚の東側に西向きにつるした。毎年同じ方角にむけてつるした。しめなわをその間(棚と棚の間)だけにはりめぐらせた。(峠)

書初め

書初めは暮のうちに書いた。子供たちは、書初めを書いて全戸配った。子供たちが「お歳暮のお礼申しやす」というと、お金とか、手帳と

か鉛筆をくれた。書初めは、神棚の下に全部ならべて飾った。(峠)

大みそか、大歳(三十一日)

昔、厄払いが「払いましようか、厄払い」と唱えて家回わって歩き酒でももらって飲んだ、という。(原)

年とりの酒のみ、魚でごはんを食べる。除夜の鐘は聞くもので、早く寝ると白髪が生える。二年参りというようなことは余り聞いたことがない。大みそかを大トシという。(狐堂)

大晦日の晩、火鉢に火をとって、まわりに線香を立て、これに目のあるかごをかぶせ、台所の大トボウの所におく。厄病神が入って来ない、という。

この晩は、いろりに入ってはいけないといつて、タチタバリ(ふみこんで火にあたる)はしない。ろの火はたやしてはいけない。この晩早寝をすと白髪が生える。(思實)

煮 習

大みそかの晩には大鍋でゴツタ煮をつくり、野菜などをふんだんに入れたものをこしらえておき、正月三が日間食べる風がある。また正月四日間に一年中食べるものをひと通り食べるといふ伝えがあり、一日の朝雑煮、二日の朝うどん、三日の朝そば、四日トロロという家もある。(薄田)

オミタマ

十二月三十一日のトシトリの夜は、径二匁位の丸いおにぎり(オミタマという)を十二コ作り、カヤパンを一本ずつさし、高さ十匁、巾二十匁位のお膳にのせて仏様にあげる。(芦田谷)

十二、御飯をまるくまどめて、重箱に入れ、仏壇にしんざる。(下平) 仏さんは正月には関係がないので、大晦日に供えものをした後は正月中は何も進ぜないで放っておく。(狐堂)

ホトケサマノゴハン

三十一日の夜、おにぎりを七つ、これに箸七本をそれぞれに立てて仏

様に供える。これを仏様ノゴゼンという。これは正月十四日までそのままにしておいて、十四日に供える。下げたものは寒ざらししておいで、土用になってから、いって食べる。(恩賀)

ミソカカンジヨウ

もとは盆暮のカンジヨウだったので、カケトリが来た。(狐薙)

口頭伝承

まえがき

親子の一字ずつをとったり、夫婦の名を並べたりする複合命令は、第一回の片品村の調査以来なかったが、この坂本地区では、「セイトクさん」(本名武井徳太郎で、父が清作)「オトトクさん」(本名石田とくで、夫が市太郎)などの呼び名が報告されている。

あだ名の種類も多く、下平のように一軒残らず、あだ名がついていた例もある。仏の、さん、マンカラ、さん、ズクナシ、さん、グズグズ、さんなど、これらのあだ名から、その当時の期待される、もしくは期待されざる人間像が如実にうかがわれる。「離島生活の研究」中の石川県鹿島郡能登島別所覚書を見ると、三十戸近く家並の順に、あだ名の例があげられている。坂本地区と比較し興味がある。

伝説の主人公は、碓氷貞光、山中鹿之助の妻、丸目蔵人を始め、灘田の左太夫から、へつぱり関さんに至るまで、どれも愉快な話題の人物である。特に灘田の左太夫は、時に山賊であり、時に狩人であり、大力でありして、人気者である。

日本武尊がむすびを授けてあげた星穴、弘法大師の井戸、コロモガ岩、ヒヅメ石、千ヶ淵、ヒダリブチ、ツウラギ、清鏡の酒などの伝説、また信州に隣っているので境争いの話など豊富である。(上野勇)

一命名

(一) 人名

苗字はあまり呼ばない。名前や屋号でよび、岡田伊助は越中音沢からきたので音沢とよび、中村由太郎は秋間からきたので秋間とよび、昭和以前は出身地の名をよぶのが大部分であった。例えば

能登公さん(能登からきたので)

音沢

秋間

長松(越中から)

六さん(越中から)

すてさん(越中から) (道全)

名前は先祖の名を取れば、丈夫に育つという。難しい名前がある。一正(かずまさ)、敬利(ゆきとし)、計利(かずのり)、要範(としのり)信要(のぶとし)、取人(たまと)。 (小栢)

福徳全、円満ということで、福太郎・徳次郎・全三郎・円三郎・満四郎と名づけた家がある。

鍋吉・鍋一郎、鍋のしつたをぬいて、底をくぐらせると、丈夫に育つ。こりょうにいた。

あぐり、女が幾たりもできると、あぐりをつける。フングリ(反対)

に男ができる。

夜泣きをする、捨て子にし、お捨てと名づける。

へその緒をかけて生れると、袈裟吉、袈裟五郎と名づけた。(平)

(二) あだ名

人名(愛った呼び方の人)

天狗(はしっこかった)

大公、中公

エンシユウ(エンマサマともよばれた。マムシつかまえの名人)

三百(バクチをして、三百勝つたら止めるというのがクセであった。)

一体に人名に「公」シユウという呼び方をしてよぶ例が多かった。(赤浜)

た。(赤浜)

教育者に上原伸吉という先生がいた。もとの北野牧だけの学校、入山学校で教えていた。この先生のあだ名はモクジ先生といった。

あだ名ではないが、病氣などするとおがんでもらって名を替えた。この例では上原佐吉さんが安五郎に、安五郎さんが与五郎に、松次郎さんが慶吉になった。

一般のあだ名は何か特徴をとらえてつけられる。

佐藤 茂氏——ゴベシユウ(ゴベは炭を消す灰の事である)

上原弥吉氏——テングシユウ(木を伐るのに場所の悪い所でも伐る事ができた。)

上原栄太郎氏——エンマ、エンシユウ、(不明、オトナシイ人であった)

上原清太郎氏——清シユウ(不明)

上原才太郎氏——ハゲン(半夏は百姓の神様で、働きぬいて休まなかつた。)

上原源次郎氏——源バン(バンは番匠、大工の意)

佐藤春三氏——ガンシユウ(額に雁の形をしたキズがあった。)

半田捨五郎氏——ステッポロク(頭がホーロクのように禿っていた。)

上原勇吉氏——ユウテン(祐天上人をもじった言葉)

上原浜吉氏——トラサン(小さい時弱く、きつい名にするといつてかえた。)

この外に公儀名といって、代々家に伝わる表用の名があったが今はなくなつた。例えば佐六という人は安五郎というのが代々の公儀名だつた。(赤浜)

エンマの春さん いつもエンマさまのようなこわい顔をしていたので

エンマの春さんとよんだ。

仏の庄さん 仏さんのように口数が少なかったのでこういった。

マンカラ幸さん 「千三つ」ともいい、嘘ばかりいって、万に一つも

ほんとうのことがないといつたのでマンカラとよんだ。

鬼孫さん 鬼のように見えたので鬼の孫さんといった。

また、親子の一字ずつをとったり夫婦の名を並べたりする呼び名も行われていた。たとえば「セイトクさん」というのは、本名武井徳太郎であつたが父が清作さんだったので清作の子の徳ということでセイトクとよんだ。「モキカメさん」というのは本名佐藤亀五郎で父が茂作だったのでモキカメとよんだ。「オトクイチさん」というのは本名石田とくで

夫が市太郎だったので市太郎のところのカメでオトクイチである。「ミ

ヨサンイチ」は父が鈴木美代吉でその子鈴木一郎さんをこうよんだ。

(坂本字原)

1 イネムリ○○○

2 セイタカ○○○

3 グズグズ○○○

4 オシヤレノ○○○

5 ハライタ○○○

6 チョンマゲ○○○

- 7 ジャンカノ○○サン
 8 セコセコ○○サン
 9 ズタナシ○○

1 警察署で調べられても、馬の上でも居眠りしていた。1・2は同一人。5胃が悪いので、よく腹痛を起した。6昭和七年頃死ぬまで、ちゃんまげを落さなかった。8いつも働いていた。9仕事が好きで、一人で一升ぐらいのんだ。これらのあだ名は、村の者は知らないで、よそ村のものがつけた。(下平)

(三) 人体各部の名称

マキメ・ホツベタ・ミミツタボ・コメカミ・テカケ・チンゲ・ブンノ
 クボ・アグ・ノドチンボ・コウデ・コシグルマ・シリツベタ・フトモ
 モ・ヒザコソウ・フトラツバギ(タワラツバギ)・ムコウツツネ・アシ
 ノコ・ウアツツ(上宿)

(四) 地名・地形名

赤浜Ⅱ浜辺だったという。
 岩の平Ⅱ西牧の八つ平の内の一つ。西野牧に下平があり、坂本に二つ平が来てしまったので、西牧は今六つ平になった。
 膝、南牧七つ沢、西牧八つ平

賀Ⅱという地名が多い。
 明賀Ⅱ敵に追われて大喧嘩の夜村へたどりついた。夜があけたら元日なので、今でも餅は三日につく。あけがたのいわいというので明賀という。

思賀Ⅱ忍賀といったという。暮に忍んで落ちて来たので忍賀という。
 赤坂Ⅱ坂道がある。

遠入Ⅱトワイリ的事。

竜馬Ⅱ不明

狐置Ⅱ狐がいた。鎮守様が飯魂神社である。神社の下に馬落しという淵があって、付近の馬が死ぬと捨てた。狐が四、五十匹も出て来て食った。食馬(タイマ)の淵という。

稲村Ⅱ狐置に稲荷様がある。

谷急(ヤキエウ)Ⅱ急の谷がある。

高岩山Ⅱ高い岩山、御岳様を祀る。

若宮Ⅱ若宮八幡様がある。(赤浜)

山の地名

ツツジの曲り、日向清鏡、日だまりの沢(確水権現様の森へ日がおちるまで日があたる場所)、日蔭清鏡、外輪平、ヤセオネ、クリの木立の沢、ムジナツカヤの沢、カカサ松の平、ニダンの沢、ニダンの大丸、土塩分け、明石沢、アザミの大丸、ナベワレ、トラカケ、タナガサワ、シラジツツボの沢等あり、タイラ、ヒラ、ソリ、大マル、タナ(流の上の段の平なところ)などが下につけられる地形名が大部分である。(道全)

淵の名

霧積川に添って多くの淵があり、下からセシガフチ、トウラズの方チ、セイキョウのフチ、デアイのフチ、ツツミのフチなどある。(道全)
 テグリノサワ 炭や木を運ぶとき、順に手で運ぶ沢。(下平)
 センボンダル 切り立ったような岩に幾本も筋があるがけ。たるは滝シンシタル いのししを追いつめるところ。(下平)

二 方言

(一) 入山方言

ニシラ 自分

オダハラ話 世間話

バンチヨウ
 チョウタ
 タム、タンジマウ
 ベッコ
 ダイバ
 カツバ
 マサカリ
 ガニ
 カタクやる
 マナ
 シヤクシナ
 上州芋
 トワイ
 エンデ来ル
 ショウシイ
 オミキスズ
 オボタ
 エライ
 オツタルケエル
 千クラ
 ビチャル
 ズタネエヤツ
 セッコウ
 テンデ(ン)
 ゴンゴウ
 オト
 ヨビツケ
 シントサン

順番、当番
 突き出ているところ、先の方のこと
 とりかえる
 別に、別々に
 馬の病氣
 株
 マサカリ、斧
 カニ
 義理堅くやる
 体業
 さといも
 違ひ
 歩いて来る
 恥づかしい
 おみき筒
 ぼたもち
 大変
 ころぶ、ひっくりかえる
 千回
 捨てる
 いくしなし
 各人、めいめい
 五合
 声、大声
 敬称略のこと
 法印や先達のこと

オジゴ
 シイナ
 コウチ
 コウズ
 タカガミサマ
 シビ
 チョウドヨカツタニ
 ビクロ
 カヅケ
 ノタル
 スジケエイトコ
 エンセへ出ル
 ギョウサよく
 イイッテ
 マルメエ
 ナンボカ
 アツツイ
 サミイ
 ホダイ
 カタケ
 ヒトカタケ
 オテノクボ
 ゴツタタ
 ヤツパン
 サカセ
 ジント
 ケンチャン汁
 トリマン

おじ
 突の入らない穀類
 部落(村)
 こうぞ(紙の原料の)
 神だな
 わらくず
 ちようどよかつたね
 びんぼう
 ことよせて
 ずつてくる
 いとこの子
 縁側へ出る
 行儀よく
 よい
 丸見え
 どれほどか
 暑い
 寒い
 おかずなしで食べる
 飯のかわりにいっぱい
 一食のこと
 掌にとる
 ちらかすこと
 やはり
 さかさま
 まとも
 けんちん汁
 とりまん

コブチまわり

毎戸順々に

ダシホウケ

出し放だい

ノミホウケ

飲み放だい

ケラ

きつつき

ハナタサモチ

くさもち

モロコシ

とうもろこし

ケエド

門口

ヨツピテ

ひと晩中

(二) 虫・草の名

虫の名

ノコギリ、イタツペラ 角のまがっていないかみきり虫

ブタ 角が短いかぶと虫

マガリ 角のまがっているかみきり虫

草の名

ビヨンビヨ 花だけ食べられるかんそ

カンジダサ かんそ

アメフリダサ ほたるぶくろ (下平)

(三) 鳥のなき声

ケラ キツツキのことで、木に穴をあけてヨタをする。

アマゲ鳥「ホロロ」と鳴くが、鳴くと必ず雨が降る。(小柏)

ホトトギス 八千八声鳴く。夜明けに鳴くが、時には昼間でも鳴く。

昔、兄弟がいて、兄が弟はうまい物を食べていると思つて殺したら、食べていなかったので悲しんで「オットノドツツキッタ」と鳴くのだから。(小柏)

(四) その他

日常語

オツカンナイヨコワイ

ニシラフ 〓オ前達い

ザツベニ 〓ノクセン

(例) 女ノザツベニ

(赤浜)

山の忌みことば

塩 なみのはな

なし ありの実

ごまめ たつくり

すりこぎ めぐし棒

すりばち あたりばち

猿 やえん、向う山、山のおっちゃん(道全)

トナエコトバ

蛇ノマジナイ

「アビラウケンソツワカ」

地震ノ兆

「九は病、二七の雨に四つ日であり、六つ八つは風としるべし」

水

「水は辰巳の水が一番いゝ」

種蒔きの禁

「四十九ナ」菜大根は四月九日にまかぬ。(赤浜)

その他

亭主がかみさんの尻にしかれることをベズキンかぶせられている、ザブトンにされているという。(赤浜)

三 俚謡・謎・諺など

岩の平の大けやき

岩の平に七人でかかえる程の大樗があった。その根っ子は今も少し残っているが、大きな種打板(メンメイタ)が沢山とれて、これも今ある家がある。

岩の平の大けやき

伐っても伐っても

伐りきれない

掘っても掘っても

掘りきれない

ついてもついても

つききれない

このつくとは臼にして餅をつく車かと思われる。(赤浜)

一 家の歌碑

① 熊野神社東の空地にあるもの

四四八四四七二八億十百三九二二三

四九十四万四千二百四十六一十

② 田中山道の峠より東百五十米の地にあるもの

八万三千八百九十三四七一八二

四五千三百四十四億四六

石の碑は、①は近年この地の神官曾根出羽の記したもので、碑面右下に「出羽」とある。②は古くからこの地にあったもので、江戸時代の頃にたてられもので、弁慶秘書の伝承がある。

なぞ

古い井戸から大蛇がとび出し、あとでコブナがとめているものナニニ
— 自在かぎ

池につり橋園子ちんこナニニ鉄びん

ことわざ

なき山に霧がかかると雨が降る。

しやくじっこうの花がよく咲く年はあたり年。(上宿)

イトナンバン・ホーズキナンバン、とうがらし、なないろ。(下平)

四 伝 説

(一) 歴史的伝説

碓氷貞光

熊野神社の西百メートル程の地に貞光霊社という石の標柱があり、その奥に小さな石祠がある。これは碓氷貞光をまつたものと伝えている。貞光は、この近くに育ち、碓氷の荒太郎、荒童子などとよばれ、怪力があり、力試しにさしあげたという巨石が見晴台に行く途中にある。また、軽井沢町志に「惑時荒童子が牛追いをしていた処、牛があやまって谷底へ転げ落ちてしまった。童子は少しも驚くことなく谷底に下りて、谷から元の道へ牛をかつき上げて帰ってきた。」とあり、力餅もこの怪力にあやる事からおこった名物。

なお、詞の傍に貞光梨と称する山梨がある。普通の山梨よりやや実が大きく、町志には「少年の頃父の重病を看護して、諏訪明神に祈願をかけて日参した。その甲斐あって父は全快した。その時往復に使った杖の棒を家の裏に挿しておいたのが梨の木であった。その巨木は枯れたが、跡目の梨の木が又二抱えもある大樹になって貞光梨と云われている。」とある。(峠)

力 餅

碓氷貞光の伝説から生れた土産品で、峠のどの商店でも自家製により売り出している。製法は、普通の餅より水を入れてやわらかくつき、カ

メの中に入れ、お湯にひたしておき、注文があるとそこから小さくちぎってアンかけ餅にして売る。

信越線能野平駅で販売していた力餅は、この峠の人が移住販売したものである。

丸目蔵人の話

剣客で知られている丸目蔵人は、戦国時代に前橋市上泉町の上泉伊勢守について修行し、その四天王の一人といわれたが、彼は坂本町城山の頂上に道場を建てて弟子を養成したという。その道場跡というところに近頃まで石垣がのこっていたが、炭焼きの人がカマドを築くために取り除いてしまった。なお丸目蔵人は現在坂本に住む佐藤熟さんの先祖の弟で熊本へ養子にゆき丸目となったといわれている。(坂本)

山賊

山賊に灘田の佐太夫というのが居た。坂本の小柴弥吉に今夜蕎麦をぶつからおいで下さいと云った。小柴の親分が来た時、まだ用意がしてなかった。一寸待ってくれといつて、鎌と背負こともって出かけたが一時間ばかりして帰って来た。見ると蕎麦の草ごと刈って背負って来た。それは信州原迄行って刈って来たので足を洗うと水がにえたと程熱が出ていた。早速そばをこいて、粉にして、その晩の内に蕎麦に作って食べた。

(赤浜)

ナダタのサダユウと坂本の弥六という二人の仲のよい狩人があった。ある時弥六がサダユウの家に招かれていった。サダユウは、ちょっとまわってくれ、と言って、それから馬に乗って信州平に行ってそばを刈り、馬につんでかえって、こなしで粉にひき、それをすぐに御馳走した。

(明賀)

灘田のさだゆう(左太夫)

左太夫は、十人力の勇士であった。百万石の加賀のお殿様のお通りが、たまたまあった時に、そのかごかきを命ぜられた。坂本から碓氷峠

を越えるのであった。

二人で殿様のかごをかついで、乗っている殿様はたいへんだろうと考えた左太夫は、大きな石をかごの反対側につけ、ふり分けにしてかつぎ、山道を休まず、とうとう峠までかつぎ上げてしまった。

たださえ難儀な山道で、このように乗々と上った左太夫に、家来たちは、すかりドギモを抜かれました。家来に「左太夫、休め」といわれて、杖をからだのかわりに立てて息を入れた。

殿様は、「休み」と聞いて、かごの扉をあけたところが、びっくり。かごの下は、何十丈という谷底。

殿様は、命の縮む思いをしたという。このことがあってから後、殿様は、江戸から加賀へ帰る途中、坂本に来ると、「左太夫はいるか。」と家来に尋ね、いないとわかると安心したということである。

この左太夫は、浅間の砂で埋まった土地に、池を掘り、田を開いた。今、峰岸万作氏の住んでいる屋敷の裏に石垣があるが、左太夫の築いたものだという。

力にまかせてか、悪事を働いた左太夫は、土地を追われて、裏妙義の一角左太夫の穴に住み、その後どこで死んだかわからない。

生前「死んだら、これを墓石にしてくれ」と、はるか下の川から、一人できり上げた大きな石があった。

友人たちは、これを左太夫の墓とした。伝えられる墓石には、正面に梵字が刻まれ、下部に、施主、三郎右衛門、忠四郎、彦太夫、寛右衛門、武兵、清右衛門、政右衛門、与四郎甚左衛門と九人の名が刻まれている。年月日はない。

英雄の末路あわれ、というべきか木立をもれるわずかの光が、墓石を照らしている。(灘田)

国境争い

①峠に「あちやとだんべの国境」という句を書いた石があったという。その石は、国境をあらわすものであり、古くはもつと信州側にあつたが、あちやがどこかへこの石をもつていってしまったという。

②浅間山は、今は上州側より信州側が多いが、これはむかし国境をきめるとき、上・信両方から牛を峠にむけて歩かせることをきめ、一番鶏がないたら出発させることにした。このとき、信州側は、鶏の足をしばって蒸気で蒸したので一時間早くに鶏がなきたので、牛を歩かせるのが早く、上州分がとられてしまったという。

③甘栗郡の砥沢は信州にとられるところだったが、そのとき上州側に頭のいい人がいて、扉に「上野の国や戸沢でなくやほととぎす」と書いて日本中にばらまいた。その結果裁判はかどらないでいたのに、役人がこの扉をみつけ、砥沢は上州側につきまっていたのだという。ところが、浅間山の争いのあるとき、信州側は浅間山を全部取ろうとし、扉に「信濃国浅間山」と書いたものを全国にくばったので、浅間山は全部群馬のものであつたのを六・七分も信州に取られてしまったという。

入山のこと

遠山の先祖の佐藤監物が、三百五十年ほど前に、源氏の落人(？)としてここ入山に入り、住みついたとき、ここには先住民がいた。監物はこの人たを追い出したという。そこでこの人たちは入山から逃げ出して、吾妻の奥、草津から二里ほど奥にあるいまの六合村の入山に移り住むようになったが、昔住んでいた土地をなつかしみ、その名をつけて、ここも入山としたという。

坂本の入山と、六合村の入山とはその後何のつきあいもないが、この話は死んだ父からよく聞かされたことである。(遠入)

佐藤監物さんがここへ来たとき、百姓がここに住んでいたが、武士が来ていばりちらしたので百姓たちはいやがって吾妻にひき移ったという。(遠入)

遠入というところ

横川の方からみてとわい(遠い)山の奥だからそういうんだらう。

(遠入)

千ヶ淵

むかしの付近の家に「おせん」という子守っ子が奉公していて、つじの花を取ろうとして枝を折りながらこへ落つてしまい、ましがいをおこしたので、おせんの淵ということから、千ヶ淵とついた。(遠入)

キイジオトシ

久保のキイジ(キヘイジ)という男が、タメをかついでこの尾根を行つたところが、足をふみ外したのもサラケオツチ死んだので名がついたという。(遠入)

へび塚

入山の小学校(現在の松井田第四小学校)のわきの高いところのこと、むかしの道は今よりもっと高いところを通っていたが、このあたりのがけの穴には、ヤマガカシなどの蛇がいつばいいいたのでつけられた。

(遠入)

箱尾山

裏紗義の一つの山だが、いつのころだったか坊さんがやって来てこの山に入ったが、この山は九九九谷あって、もう一谷あれば高野山に次ぐ名山になるので大きなお寺をつくらうとして一生懸命さがしたが、どうしても一谷足りなかったという。そのためこの山には寺が建てられなかった。(遠入)

ヒダリブチのオカバミ

小柏部落の下の方にタヤマというところがあり、その水の落ちるところにヒダリブチというのがある。でっかい淵で、どおんどおんと水が落ちていた。

むかし村の中でお祝いごとなどがあつておぜんなどを必要とするときにはヒダリブチへ行つて、いついかにオフルメエをしてえから何人分

の膳物を頼むよう」といって頼んでおくと、その日になると必らず頼んだだけのお膳を出しておいてくれたという。このため村の人はずいぶんと調法していたが、いつのころのことか誰かがお膳を借りておっかいたまま（まま）返してしまつたところ、それ以後はいくら頼んでも誰が頼んでも貸してくれなかった。お膳を貸してくれたのはオカバミだったと村の人はいつていた。オカバミとは蛇の大きなやつで、ジャともジャテエともいう。（遠入）

キツネガヤ

岩鼻の代官所から役人が来て、この辺が初めてナワウケをしたときのこと、測量している敷中に近くのカヤの中でキツネが鳴いたのでおどろいた役人が「いま鳴いたのはキツネカヤ」と聞いたものだといふ。これがかきつかけでこの地をキツネカヤというようになり、長い年月に次第にキツネガヤというようになつた。（狐薈）

インキヨヤシキ

佐藤八左衛門が隠居したところだといふ。（狐薈）

クツヤシキ

これも初めてのナワウケのときのこと、ナワハリや案内役に土地の人で八十才をこえた年寄りが出て、毎日元気で手伝つたので、岩鼻から来ていた人が感激して、「御苦労であつた」といひ、「くつでもつくれやあ」といって免租地をもらった。小柏の向き合ひの土地で、およそ二十町歩くらいの広さで、山林とサタバ（作場——田畑のこと）で、今は七反歩くらいになつてゐるところだが、この広い土地からのあがりてくつでもつくれやあといふので、その後この土地はクツヤシキという名でよばれるようになった。ここでいうクツとは、馬にはかせるクツのことでもとはカナダツがなかつたからそのかわりにクツをはかせたものだった。

それから後しばらくの間免租地になつてゐたが、明治の改正で民有地になり、免租はなくなつた。（狐薈）

ニヨボウヤシキ

狐薈の開祖である八左衛門のメカケがいたところなのでこういう名がついた。（狐薈）

関所破りの坊主

いつのことかわからないが、ある時のこと、お供に長持を担がせた坊さんがいた。関所で不思議に思つて調べたところ、長持の中には女がかくれ、横川の田んぼの中でハリツケになつた。この坊さんは悪い奴で、ドロボウもしていたのだつたといふが、辞世の句には、これまで盗つた金は一文も身につけなかつたが、「……身につく金は今朝の一槍」といふ意味の狂歌だつたといふ。（遠入）

安中さまの鉄びん

遠入の佐藤武平さんの先祖に仙太という人がいた。この人は学問のよくできる人で安中さま——安中藩の殿さまの先生をした人で、横川の関所を手形なしで通行できた。

あるとき安中さまが、「仙太の家の方へ行ってみよう」といひ出して、遠入までやって来た。のどのかわいた安中さまにお茶を出した仙太さんは、番茶をヒシヤクにくんで出し、お茶うけには大根葉を漬けたバリバリしたのをさしあげたところ、安中さまはヒシヤクの番茶を見て、「仙太これは何だ」とたずねたので、「番茶といふものです」と答えたところ、「仙太こんなお茶は飲めないぞ」といわれ、大根葉についても「こんなものは食べられないぞ」といわれた。そこで仙太さんは「殿さま、ここへ来てはいいお茶が飲みたいといつても無理といふものです。このお茶をみんはうんめえ、うんめえといつて飲むんだし、大根葉だつて食べるんですよ。」「ここにはお城のようなお菓子もない。茶がまもないんですよ」といつたところ、殿さまは「そうか」といつて帰つたといふ。

それからしばらくして安中さまはもう一度遠入に來られたとき、「仙太、三分とられたぞ」といつて、鉄びんを買つて来てくれたといふ。

その鉄びんはいまでも家宝として大切に取ってあるが、鉄びんのつくられた初期のものだから形は少し違っている。(遠入)

ツラギ

田家橋の下の淵の名。坂本のシバキリ(先祖)の小林弥六がヨーツリをしていると、小さいへびが出て来た。シシキリ(山刀)で切ったら大蛇で、三日頃血が流れて、明賀の淵に血がたまつた。

ババーノイ

この池のほとりで、婆さんがうどんをこねて夕飯を作っていたら、狼が来て食ってしまったという。

ゴリョーイ

四十年に流れた。下に宝物があるといわれた。(下平)

陣馬の原のヒズメ石

新田義貞がこの地に来たとき、下が深い崖で馬がとまったのでそはにあって大きな石に馬のヒズメのあとがついた。これをヒズメ石とよんでいる。(峠)

ところてん坂

横川から汗をふきふき上る馬方が「オーイ、たのむよ」といって、遠くから銭を箱に投げこみ、馬を止めずに、ところてんをかっこんだので坂にこの名がつけられた。

最近まで、その銭投げ込み箱があつたという。(川久保)

コロモが岩

高岩にコロモが岩という穴があり、そこにお坊さんが住んでいた。お小僧が鎖を外して下りてしまったので、坊さんは、その穴の中でひびいてしまった(恩賀)

高岩の白岩に仙人が住んでいた。火にあてたものは食わず、そば粉をてのひらにのせて水でこねて食べていた。(恩賀)

清鏡の淵

道全の清鏡の淵で、むかしキコリが斧を落した。淵が深いのであきら

めていたら、あるとき用事で榛名湖へいったら落した斧が浮いていたという。榛名湖と清鏡の淵は通じるのではないかという。すると、魚がきりも

なくたくさんいるので捕えようとしたら大夕立がきてもとの淵になってしまった。この淵はどこか通じているので干せない淵という。

この淵の魚は釣るのはよいが、毒を流して捕ろうとしてはいけない。むかし、坊さんが毒を流すなといってダンゴをくれていたで、そのあと毒を流して魚をとった。捕った魚の腸の中からダンゴが出てきたことがあつたという。(道全)

原の七不思議

坂本字原の七不思議というのは「木屋で木を売らない。榛名で棒をつくらぬ。梨屋で梨を売らない。車屋で車をしない。など」で、屋号と現実の職業が一致しないことからいわれた。(坂本字原)

ホシアナ

昔日本武尊がムスビを投げて穴をあけたという。五科でふんばつた足跡があつたという。(芦田谷)

星穴

国道の碓氷ドライブインの処から妙義の方を見ると、山の一角に穴があいているのが見える。これは昔日本武尊が五科からムスビを投げた跡で、あの穴がそのムスビのぬけた処である。五科にはふんばつた足跡がある。

弘法井戸

坂本のヘンネン山の頂上近くお茶屋が二軒あるが、水のない所である。下の宿からかつきあげていた。或時弘法大師が来て、「のどがかわいたので水が欲しい」と求めた。下のお茶屋ではそのとき与えなかつた。そこで次の家に行つて同様に求めたが、おかみさんは快くくれた。このとき僧はどこから汲んでくるのか聞いたところ、下の宿まで行くことを話した。すると僧は井戸を掘ってやるという持っていた杖を地上

につきさし穴をあけてくれた。水をくれなかつた家の人がそこに行つて飲むとおなかを悪くするという。

この井戸は碓氷峠旧二号トンネルの上で、井戸の上の方で日本武尊が吾妻の方をみて「吾妻は……」といったという。(芦田谷)

(二) 信仰伝説

霧積と子供

昔からお湯が出なくなると二才児を薬師にあげるとよいという。二才の子の病氣は湯ではきかないともいふ。二才の子が入湯して死んだ例もある。

十一才の児もお湯がきかないという。むかし、十一才の児をつれた父親がこの湯にきたとき、実家へ米をとりかえつた。子供が追いかけて行つたら何かに喰われてしまった。そのあと十一、十一と鳴く鳥(慈悲心鳥)がなくてさういふ。十一才の子はお湯で病氣がなおつたと思つても余病がでるといふ。

霧積の湯の移り変わり

今の湯は狩人の犬が足をいたためにお湯に足をつけていたのをみつけたのが湯のはじまりで、犬のお湯と名づけて小屋づくりではじめたのがほんもと。後に入りの湯となづけ、大正になってから霧積(きりずめ)と発音している。温泉というようになった。

明治時代には金湯社があつたが、明治四十三年の大水で流され、一夏は空家になり、翌年三月の彼岸過ぎに金湯館にした。上原多三郎という人がこの名をつけた。三十四年後に今の佐藤義秀氏にゆづつた。もとは坂本、土塩から出た人と佐藤氏の小屋があつたが今は佐藤氏一軒。

大水と湯

入りの湯は川に流れ出ていた。掘つてみたら三段の層があり、そこから木がでてくるから、三回大きな洪水になったことは明らかである。

(道全)

霧積の入湯

金湯社時代は異人屋敷に外人がきていた。湯治客は原市、磯部、中之条、富岡などの人が多く、皮膚病によいといわれ、ヒゼン、デキモノ、マムシにかまれた人、ウルシにかぶれた人がきた。温度は三十七・五度位といふ。入湯客は月の八日に来たら九日に帰るものではない。旅も八日に旅立ちするな、九日に帰るなという。農休みに一晩泊りの人、自炊の人などが多かった。今はハイキングの学生などが大部分で農家の人は少なくなつた。(道全)

天狗の入湯

霧積のお湯の上に、天狗様の庭があり、明治のはじめ頃までは日にやり旗が立つたり、笛が聞えてくる。注意してみるとなくなる。これは天狗の仕業というので、五月五日には天狗様の入湯と称し、浴場を清掃してあげたしていた。ある年、若者が足がいたいといつて頑張つていたら、若者の鼻先へ大きな足でできたので、驚いてにげ出してしまった。

(道全)

小柴の不動様

弘法大師の投げた筆といわれているが、明治の中頃、永井(本陣)の番頭が、その石を欠いて、火事にあつた。

白ひげ神社

昔、日本武尊が御東征の際、ここを通る時に、深い霧におおわれて道がわからなかつた。その時、白ひげの翁があらわれて案内をした。白ひげ神社は、その翁をまつている。(原)

大武士神社と目玉の化物

大武士神社というのがあつた。そこは熊野神社の飛地境内になつてゐる。そこに目だまのばけものが出るというはなしがあつた。目だまのばけものは、ひざ坊主のところ目だまがあるという。そんなものが出るはずがないと馬鹿にした男が、そこへ出かけたところが、人にあつた。「今晚は」といふと、「なにしに来た」といふ。「この辺にひざに目だま

のあるだけものが出るといすが、そんなことはないと思って来た」というと、「それじゃこれか」といってひざをまくって見せたという。その男のひざに二つの目があったという。出かけていった男は、おどろいて家へげかえったという。(峠)

雨池

和美峠の南に湿地があり、これをサゴシの池または雨池という。こはもと満々と水を湛えた大池であった。そして竜神が住んでいた。ある時、一瞬の間に黒雲があらわれて池の水をすくいあげて、下平の八幡様の池に降りた。竜神がすみよくなってひっこしたのであるという。(恩賀)



竜神が移った池(下平)
(撮影 都丸九十一)

諏訪五郎大神

鎮守様はお諏訪だがこれをまた五郎大神ともいい、幟には「諏訪五郎大神」と書いてある。

鎌倉権五郎が落ち武者なつてやうに、祠をつくって住みついた。その子孫である佐藤氏は、右の目が細いという。

また義経の兄弟のどちらかが、落ちのびたともいう。(恩賀)

(三) その他

ヘッピー関さん

灘田のなべつるで、昭和十六年に七十八、九才で死んだ関さんは、ヘッピーの名人であった。

本職は、左官。

いなかの火閘、あるいは関取りという意味で、こゝろ呼んだらしい。

チョンマゲをつけていて、ふぎを売り歩くこともあった。いよいよ尻

をすることになると、必ず用たしに行った。帰って来ると、四つばいになるように身構えて、いろいろと尻をひり分けた。

低音、高音はもちろん、鶯の谷渡り、はしこっべ、数々の曲芸があった。店に行つて、かけをして、みごと百八つの尻をしたが、おまけをしたのでかけに負けた、という話もある。

はしこっべ

関さんは、山へ行つてはしこにする木を見たるところから尻を始め鋸で切り倒すところの尻、木を二つにさくところ、十三段に組み立てるところという様に、説明をしながら尻をひり分けたという。

よその国の名人と尻比べをしても負けたことがなかったとも伝えてい

(灘田)

気の短かい人

イロリで薪き木を抱きくべて燃え上ると、もう立上つてしまう癖の人があった。

また、木をけすのに指し金や墨糸をしなだけでけずり始める癖があった。(赤浜)

住居

調査に当って

ことしの調査では和美峠道の恩賀・下平、入山峠道の赤坂・遠入・竜馬、坂本宿の三つの地区をみた。坂本宿は次の引用によるとおり中山道宿駅で慶長年間に宿割が定められ、町屋作りの一つの型が現在もよく残る地区であり、他の地区は農家作りで群馬県の北・西方面の広域に亘る民家の型がみられ、両者の対照とつながりが、どんな形で表われているかに興味を持った。そこで農家型地区で、みたのは次の六家の母屋が主となった。ただ武田家は再調査に当って支障があり不十分な結果に終わった。

- 1 恩賀 佐藤福太郎家
 - 2 下平 半田 泉一家
 - 3 同所 小林 春男家
 - 4 赤坂 佐藤 房一家（現物置）
 - 5 遠入 佐藤 一一家
 - 6 竜馬 武田市五郎家
- 坂本宿では他にも対象となりそうな家その後の調査で、現地の人々から教示を得たが、時間ぎれで将来の再調査にまっことにした。
- 7 上宿 荒川慶一郎家
 - 8 同所 田沼 時造家
 - 9 中宿 佐藤 房吉家

忙しい調査で、ちょっと家の内そこを眺めてつぎの家に移るので、バスター待時間や歩きに時を過してしまつた。それで、せっかく対象としたお宅について把握したことも不満だらけで、再調査の必要にせまられた。十一月になつて三回また各家にお邪魔した。しかし日程をくむこともできなかつたので、不意に出向くほかなかつたので、ご迷惑をおかけした。それでも武田家の他は多くの資料を加えることができた。それに萩原調査員から坂本宿について次の報告を頂いたので大へん参考になり、引用させていただくことにした。以上の関係各位に厚くお礼を申しあげる。

「坂本宿の民家―往還をはさんで対いあっている整然とした区画の屋敷に、宿場の民家が規画を一にしてつくられている。屋根の高さを一定にし、ほとんど二階造りであつた。道路に面した家屋はすべて二階とし、屋根は往還に平行につくられ、破風はすべて向つて左右に出るようにして、宿場の美観を考慮している。その二階屋に接続し短冊型屋敷の奥に向かつて、直角に平屋が付設されている。ちょうど「T」字型になつている。T字の縦画の部分の屋敷に僅かの空地ができるが、そこを「庭」とか「路次」と称している。往還に面した縁側や二階の窓には、むかしは原則として格子戸が外側にとりつけられていた。これは、大行列などの場合、家の外から内部が見えないためだという。」

一 マドリ（間取り）

調査地区のマドリ慣行は大別して二つに分れる。その一つは農家造で

あり、他は町家造ともいふべきものである。農家造は和美峠の道筋と入山峠の道筋の方面などで坂本宿以外の地域で行われる。町家造は中山道宿駅としての坂本宿の地域に行われている。この二つのマドリ型の各別系列に展開されて来たもので、発生当初は同一か、あるいは別物かを明らかにできないが、江戸時代に既に系列を異にして来ているようである。現状では異種として記載する方が便利なので項を別にする。

(一) 農家造マドリ

管見した中でダイコト柱を境としたユカ上が二室と見られるのが遠入の佐藤房一家で現在モノオキとしているのが一棟、三室が思賀の佐藤福太郎家、下平の半田泉一家、四室となっているのが下平の小林春男家、竜馬の武田市五郎家である。遠入の佐藤一家は五室である。

二室の佐藤房一家モノオキは戦後まで人が住んだのであるが奥がわの室をタタミ敷として中仕切りして使ったというが、その仕切り方が明らかにできなかった。

四室マドリの武田家は明治末年に大改修を行って、ドマの部分を選択して、ダイコト柱列からユカ上部分を全面に亘って新規にした。その以前の状況は不明で、当初から四室か否かは分っていない。小林家の四室はドフ寄りの二室がシキイ・カモイとも差し込みで後補に成るもので当初は一室として造成されたことが明らかである。このように不明の房一家のモノオキ、武田家を除いた三例の家は三室として設計されたものである。五室の一二家の一ばん奥の一室は当主一二氏の祖父の代に増築したものである。明治の末年頃で、三人力といわれた大力の人物で、増築したエンガワの隅柱に、その部分の築山と池を作って池中に柱の礎石を据えた。礎石は一抱えほど、高さ三尺ほど、これを入山川(?)の岸から一人で運びあげたとされる。ヤシキは神社の石段の下、遠入では一ばん高い方であり、車はもちろん使えなかったという。そこでこの家も当初は五室でなく、四室として建てられた。

この地域の農家のマドリ方は、三室が多く、四室も行われたことを思わせる。

四室の場合に、マジキリ(間仕切)はクイチガイ(喰違い)で「田」字形でない、アガリハナ寄りの表てがわを広くとり、その裏がわの奥行を狭くするいわゆるヒロマ(広間)型にしたもので、県内の北部西部の山村から山麓地帯に広く分布するものと規を一にする。さらにこの型のマジキリ方は長野・新潟県から東北に広がっている。同じ県内でも東毛から中毛の平坦地帯では、関東平野地帯にまで広がる「田」字形マドリと慣行の系列がちがうわけである。

二室マドリに見える房一家モノオキについては、ユカが異状に低い。ユカ下が不明なので推定するものが無理かも知れないが、当初ユカ張りをしていないでドザ(土座)であったのではないかと疑われる。長野県に峠一つで境する地であり、南佐久郡には元禄年間以後にもドザズマイの行われたことは既に前回調査にも引用したことである。

なおドマ(土間)の部分は、房一家を除いて、どの家もウチウマヤがあった。ウマヤがわの表てが入口でトボクチ、いまは戸は新しくなったが大戸がなくなつた。あつても大戸を動かしてみようかと引っぱつたが、ガタガタで動かすなかつた。トボと対向の位置にウラダチがあつたのが、思賀の福太郎家、下平の半田家・小林家、遠入の一二家、竜馬の武田家と全部にあつた。赤坂の房一家はスマイとしたときに、南に大戸があり、東にドマダチが開口していたが、東口はゲヤがあつたらしく、取り去られたゲヤ部分はウマヤがあつたのかどうかは、ヤシキのカイドに削りとられてわからない。

トボグチのつき当りに板ジキがどの家にもあり、そのあいだの片がわにアガリハナがある。板ジキの部分はイロリがダイコト柱境に三尺ほどおいてあり、現在はイタジキを払って、イロリの位置を移動している。もとのイロリが遺るのは半田家だけであつた。カギ竹に鯉を斜にあけて黒ぐるとか、ソダの火がチロチロと小さな焰をあげていた。同

じく小林家ではコタツにしたが、カギ竹を半分に縦にわりしたのが保存されていた。これには、正宗遺訓というのが二行に刻んでありすごく立派なのに驚いた。

ナガシが板ジキの奥にあるのと、もとのミンベヤ・オコンマヤ・コウマヤに移動したもあり、カマドもイロリのキジリの奥にナガシと対向していたのが、みな移動したり、プロパンがまに変わったりした。

エンガワは後補されたもの、その補加の時期の古いのが半田家、最も新しいのが恩賀の福太郎家である。家の背面がわの開口はほとんどどの家も行ってた。原形をもつともよく保存した半田家もイロリの奥壁に高い小窓をつけていた。遠入の二一家のコジャシキは表で向けてトダナと仏壇を両側におき、中一ケンをフスマで仕切り、イロリの奥境もオビドにしていた。コジャシキの閉鎖性がよく示された。ただしシキイはタタミの面の高さで、チョウダイ(帳台)構ふるの痕跡は何もない。半田家のイドコの奥は仏壇と戸タナが右がわ一ケンにあり左一ケンをフスマにしたが、その後奥は奥行が狭くて、ナンドであったか否かはつきりしない。それにこの部分の土カベは三尺ほど出ているが、もし、もう少し出が大きいとすれば、その室はナンドで閉鎖性を非常によく発揮していることになり、ナンド分化の過程を示すことになる。背後の壁の部分の検討が十分にできなかったのを遺憾とする。

マドリの名称や広さは一応次表にゆずる。

(二) 家作の規模

マドリに関連して家作の規模を考察しておきたい。調査に当たった家々の立地が山村という点から、かつての多野郡上野村・鬼石町田美原・吾妻郡六合村、昨年の勢多郡東村の各報告書に報告したものと共通類似を予想したが、今回ははげれた。大小それぞれの地区としての家の個性が示されるが、これらの各地区内では地区的個性のなから何某家という個体を類別する要素が現われていたと思うが、今回の坂本地区では個体

表 1 室の広さ・名称

室数	ドマに近い室		中の室		奥の室		備考	
	一室	二室	表	後	表	後		
		表						後
佐藤福太郎家	3	アガリハナ11帖	/	/	/	イドコ8	オヘヤ4	
半田泉一家	3	イドコ12帖	/	/	/	デエジキ(オヤシキ)8	ヘヤ6	
小林春男家	4	(イドコ)12帖	イドコ8	コベヤ5	/	ザシキ8	ヘヤ6	イドコ・コベヤは一室後に分割した
佐藤房一家 モノオキ	2	不板ジ坪	明キ坪	/	/	不板ジ坪	明キ坪	イスマイとは2、たたは分割した？
佐藤一一家	5	/	トッパケ10	コジャシキ3	ナカノマ8	ヘヤ6	オタノマ11	
武田市五郎家	4	-	-	-	/	-	-	11.25日再調査に向いたが来客中で調査できなかった

ごとの要素に共通した点が幾つか出て来た。その一つは家作規模が平均化されていること、各室毎の大きさの傾向にも、集合した室の合計規模にも、室とドマ側の面積の比率にも、それが感じられる。

ヒロマに当るイドコ・トツツケバが8-10帖に、ナンドに当る室が4帖に、それぞれ室面積の配分の中数となり極大から極小までの階段の巾

表 I 家の規模 ゼンキがわの広さ

	ドマ位置	家の規模			ゼンキがわの広さ		
		マグチ数	オキケン数	ユ同合ケン数	ドマ算数	柱下ケ	同マケン
恩賀一佐藤福家	右	8.5	3.5	4	4.5	4.0	.98
下平一半田家	左	8.5	4	3.5	3.5	4.5	1.3弱
一小林家	右	8.5	4	4.5	4.0	4.5	1.13弱
赤坂一佐藤房家	右	3.5	2	2	1.0	2.5	2.5
遠入一佐藤一家	左	10.15寸	4	4.5	4.2尺	0.6	1.42
竜馬一武田家	右	—	—	—	—	—	—

がごくせまい。
家作規模のオクニキ(つまり梁間)の大きさが3.5ケンほど、見通しは4ケンだがゲヤ半ケンを見込むと3.5ケンぐらいである。梁間の面はもつと多数に当たると、3ケンになるかも知れない。ゲヤは梁間では背面にだけ見られ、表てがわにはない。これは坂本宿の町家作りと規を一にする。ドマとユカ上の比率にも類同性が多いことが予想される。

なぜそうなるのかは想像の域を出ないが、山村というものの箱谷が比較的広く開けており、鬼石町美原地区のような峻しさがなからかも知れない。赤坂や妙賀などはヤシキ同士の高低落差が烈しいが、それでもヤシキの立地は幾分ゆとりのあるとり方をしている。耕地は狭いが山仕事を中心に経済生活が依存されて来たからであろう。後項で触れるヤシキ作りの苦心もさることながら、ドマの広さがユカ上広さに比べて少し大きい点にもそんなゆとり原因がありそうである。

町家造り
一種の片がわズマイ

家の広さは2表で数字をあげておく。

はじめに少しばかり触れたごとく、宿は江戸時代から引きつづいて、町家作りである。和興・入山の峠道通りが自然発生的に展開した家作である。対して、中山道宿駅として開発された人為的の家作が行われたもの思われる。坂本宿は三ケン半マダチを基準としたヤシキ割が定められ宿駅の公的賦役に参加する各戸の資格によって「ヤシキ・二ヤシキあるいはそれ以上のマダチを与えられ、そのマダチの広さに相当した家作が営まれた。

往還の中央に溝を通していたが現在は、溝を南がわに移した。また、往還を大廻りして裏手がわにも分溝を通した。ヤシキは往還四六三ケン半のうちに、総一六一軒、ほぼ等分して往還の南北両がわに並べた。三ケン半のマダチは半軒役、一軒役は七ケンが伝馬ヤシキでこれに一軒について五反歩のヤシキ畑を付与された。それでヤシキは短冊形に細長く往還と直角に並んだ。(群馬県郷土史辞典「坂本宿」宿場」による)

こうしたヤシキで往還に面接して家作すること、その上宿駅としての体裁をととのえること、宿駅の機能を発揮することのために生活の知恵が生んだのが片側ズマイの家であった。坂本宿のみで考案された駅設計であったか、原形が他に在って、それを模したのか明らかでないが、信州路には類似のマドリもあった。(伊東ていじ氏「民家は生きてきた」)

↑甲州信濃路(二四、五頁)
上宿荒川屋、荒川慶一郎家は往還の南がわ、北向きに建つ。馬のハタゴ(旅籠)であった。室は北から南へ一列に三室ならぶ。オメテのエンバナは現在壁よりも三尺巾の板張を残してドマになっている。当初の広さは2×2ケン相当、往還に面して内エンがあったから室としては六帖に当る。その南隣りが、東へ三尺だけ広くなって2.5×2ケン、西の壁ぎわにオシイレがあるから八帖のマ、なおこの南に接して、2.5×2ケンのオシイレ・トコノマつきのジャシキ八帖、それにエンガワがつく。この三室の東がわにドマダイドコがより添う。ドマをへだててエンバナに対してシタミセ1.5×1.5ケン、中の室に対向して1ケン15寸×5.5ケンの建具

なしの細長いタタミ敷があり、コタツも設けてある。ジャンキに對向する場はドマのまま、ナガシもあり、カッチに相當する。

建物の西がオシイレの背面は全部壁になって開口部がない。東がわは、細長いタタミの場所の高マドがあつて明りがさしこむ。

家の入口はドマの北にガラスド四枚をたててある。はじめは格子戸であつたという。裏グチはナガシなどあるドマの南端である。片がわズマイというより現状は家の中央辺をドマが縦に貫通した格好になつている。シタミセと細長のタタミ敷が当初からのものかどうかは明らかでない。裏グチを南とくに抜けると、東がわ西がわともに板間に辨状にヤシキ境に添つて続き、外便所やモノオキがあつて、次に馬ベヤ(部屋)が妻入で建つている。板壁で、中央が通路、左右(東と西)に馬を休息させた馬ベヤがある。上宿本陣に休息する大小名などの馬をとめた。それで馬の出入りの大戸が東がわにあり、いまそこに馬を飼う大釜が遺つてゐる。釜には上宿を示す「上」の字が陽鏝になつてゐる。また大戸の外は往還にも匹敵する広い路次が往還に開いてゐる。馬の通路である。荒川屋から数軒離れて大野屋、田沼時造家が、やはり南がわにある。

室は北から南に一列に重つてゐる。

表てのガラス戸の内がわに2×2.5ケンのオモテノマがある。表がわは三尺のエンガワがあり建具はない。西がわはフスマとオビド各一ケンのオシイレ、次がチャノマでドマダイドコ(三尺張り出ししていることは前例の荒川家と同じである。八帖に、仏壇・神ダナなどがあり、建具はショウジ。その南となりがジャンキ六帖オシイレが二ケんあつて、ドマがわの建具は板戸である。ドマダイドコがオモテノマからチャノマに突き當つて三尺すれる点は荒川家と同じ。ドマを距てた対向の板張りは建具を設けないシタミセで仕事場、家業のタタミの新ドコが積んである。ユカは三寸ほど。チャノマの向いは板張り建具をおかない2.5×1ケンと15寸の細長い場所である。ここはユカが高くなつて相向いのチャノマと同じ。ジャンキと對向する場はドマで調理台がある。この室とドマとの取合

せ方も荒川家と同じ性格でドマの広狭、オシイレなどの違いぐらい。裏グチのそもそも附属舎の相違だけで、ヤシキ境を板で囲うところは同じである。またマグチが15寸延びの点も同じようである。ただ非常に異なる点は裏グチ上方に中二階の一部が遺存することである。中二階からそとがわの裏は全部取りこわしたが、もう一部。部屋があり、往年金井之恭や名士の來往逗留する處が多かつたという。

中宿に若荷屋、佐藤房吉家がある区長早津弓之助さんに案内して頂いて家の内々を見せ頂いた。この家も往還の南がわにある。北表てがわに内エンがあり、切目エンである。北の第一室が十帖でエンガワ境は三本ミゾ、西カベに浅いモノイレ二ケんがつく。第二室は三尺入込んで六帖、西にオシイレ二ケん、第三室は三尺出張つて七帖、オシイレ付、室の広狭によつてマジキリに凹凸出入りがあるが、前二例と同様に一列に南奥へ三室縦並びとなつてゐる。次に前二例と異なる点は、第一室横のドマダイドコが著しく広くなり、ナカノマの横(東)前に第一室より一ケン広く室名はないがタタミ敷の出張りがある。出張りは更に延びて第三室横に延び終りの一ケンでなおもう一度出張る。ここにはタタミがない。ドマ突き当りにはショウジ二枚があるがドマがわは建具なし、このタタミ敷の奥にドマに面してトダナ仏壇があり、カモイ上に二ケんに亘つて神ダナがあり、片流れ共同の屋根の三つの宮が並んでいる。ドマは入グチから第二室横のタタミ敷に突き當つて右(東)に折れ、土カベとのあいだを南に通つて裏グチと通じる。第二室はナカノマ、第三室はオトザシキという。オトザシキの南はエンガワでこれがダイドコに突き出したイタジキの後ろで裏グチと通じる。裏グチのそとに新補の二階棟と小ベヤがある。オトザシキ南に中ニワがあり松などの植込がある。第一室とドマを距てて對向するシタミセに當る室から東隣りへエンガワが一ケン半延びて、二ケン桁行の建物と通じる。タタミ敷のジャンキの横(東)は土カベが直線でウラグチに至る。

この家の桁行三一・九尺、なお第一室のモノイレ一・五尺が付いて前

表 Ⅲ

一階の梁桁柱

柱とハリ(梁)——(四周の壁は柱などを省略)・(うちのみ)

武田家 (小屋2階)	佐藤一家 (小屋2階)	佐藤房家 (2階)	小林家 (ドマ2階)	半田家 (ドマ2階)	佐藤福家	ダイコク柱の梁間柱列	ウマヤ柱の梁間柱列	ミヤコ柱の梁間柱列	桁行のハリ	ウチのみ ウマヤ・軒の
—	4.5	2.0	4.4尺	4.0	4.0	梁間(ケン) 数	間(ケン)柱(本)ヤ	間(ケン)柱(本)ワ	上	て
—	4	0	5	5	5	柱	内	内	上	ろ
—	0.5	0	計 1.1尺	0.5	0.5	エン	ゲ	エン	上	
—	0	0	0	0	0.5	ゲ	其	ゲ	上	
—	4.5	2.0	4.4尺	3.5	3.0	梁間のハ(ケン)柱(本)	梁間のハ(ケン)柱(本)	梁間のハ(ケン)柱(本)	上	
—	4	0	4	2	3	梁間	同内	同内	上	
—	4.5	0	4.4尺	3.5	3.5	梁間	同内	同内	上	
—	4	0	1	5	5	同内	同内	同内	上	
—	0	0	0	0.5	0	ゲ	其	ゲ	上	
—	0	0	0	0.5	0	梁間	同内	同内	上	
—	上ドマ中夾 上ハリ1	上ドマ中夾 上ハリ1	上ドマ中夾 上ハリ1	上ドマ中夾 上ハリ1	上ドマ中夾 上ハリ1	同内	同内	同内	上	
—	4.5	2.0	4.1尺	4.0	3.5	梁間(ケン)柱(本)ワ	間(ケン)柱(本)ワ	間(ケン)柱(本)ワ	上	
—	6	0	3	5	4	同内	同内	同内	上	
—	0.5	0	4尺	0.5	0.5	エン	エン	エン	上	
—	0.5	0.5	0	0.5	0.5	ゲ	ゲ	ゲ	上	
—	他に3	0	外に2	3外に2	2外に2	梁間内	梁間内	梁間内	上	
—	2	0	3	2	3	同内	同内	同内	上	
—	4	1	4	2	3	ド	マ	マ	上	
—	4	1	3	2	3	ユ	カ	カ	上	
—	1	1	1	1	1	表	後	後	上	
—	1	1	1	1	2	後			上	

のができた。

これらを総合して四周を囲む柱を除いて柱や梁桁を表圖とした。

佐藤福太郎家ではダイコク柱4寸余で、同じ列柱も4寸、これにナゲカケ梁を架けた。またウマヤ柱にシキ梁をかけて、この上に桁行の梁を一ケン毎に渡している。ユカ上部分はネダ天井として天井板を張りつめたので内部不詳、材は太くないが天井が低いのでガツシリと落ちついで

見える。

半田家ではコヤ梁に柱が通しており、ダイコク柱の梁間列はナゲカケ梁をその上に重ねて、ナカビキ梁を挟みつけている。二階のシキ梁にツカを立ててダイコク柱上部とトリイ状に組んでいる。この柱と梁の組み合せ方は小林家のダイコク柱の上方でも見られる。コヤ梁の末端はエンガワ柱の頭の上で切つてあり、ここはサスにもモヤにも接触していない、半田家はアタラシヤと呼ばれるそうであるから家作が新しいのか、村に入居したのが新しいからか、はつきりしない。半田泉一さんより五代前、文政頃、作ったという伝承であるが、それも確実かどうかわからない。小林家は下平の草わいの本家であるが、フルヤとは言わないから、アタラシヤの名が同じ村内は不明である。ただ両家が同じ村内のごく近接しているから同じような

技術の大工があまり年を距てない頃に建てたものだろう。ただ小林家はドマの部分に手入れをしてドマ二階をあげ四注(寄棟)造りから片カブト型の妻とし、エンガワを4尺もせり出し、其の上ドマ二階に二階ダイ、ダンゲタを突き出したりで、コヤ組みもこの部分が改造されている。佐藤房一家のモノオキは通し柱の上端にイカリ妻ゲタを架し、これ

に軒桁を載せている。このような折置組に属する小屋組は佐藤福太郎家半田家・小林家・次項の佐藤一一家、何れも表てがわはこの構架式によっている。佐藤福家と佐藤房一家・同一一家はみな現状切妻造りである。福太郎家の妻は一方にゲヤをおろし他方は下平へ逆落しの崖の突端で、思賀川の向いの崖でないとい妻が見えない。房一家の妻は妻ゲタにツカを立ててムネを支える。小林家の東妻は妻ゲタ・棟ツカ式一重梁であり、佐藤一一家の妻も同様である。

断面図、半田・小林・房一家のものはその要点を抜き出したもの、架構図、半田・小林・房一家のものには前記のように不明の点もあつたが推定できる諸点から作つてみた。これは未定稿として了承を得た。

コヤ組で注目されたのは柱頭が何れもコヤバリ下バまでであること、サス合掌は相欠ぎで縄カラゲであること、半田家は柱のほかにツカが多い方なのであるが、コヤバリがモヤを載せたモヤ梁を兼ねて、この上にツカを立てないこと、つまり二重梁以上を作らず、従つてサスの押ミからカネ勾配の高い空間が実際よりも広く見えること、縄の結節から下つた縄の端のうるささに此べて、整つた感じに受取れる。モヤと柱の上にモヤ竹が葺地になつており、結び縄が多少さがつても苦にならないこと。この点小林家も同じようである。

コヤ梁上の正三角形の空間の広いことはここも養蚕の場になつたことを物語るもの。

半田家は西妻をカプト型として小林家と逆でここから採光は十分とはいかないが窓ぎわは明るい。それに半田家は軒ゲタ下に一ケンの低い小窓を開いており、小林家は二階台の小窓を広くとり、その上妻のカプト型に切窓を開いたので一そう明るい。佐藤一一家、武田家は前面を二室とも半窓にした。

二階台のダシゲタはエンガワ外柱の上の軒コウリヲウを支点としてテピン桁状に桁を出し、これにキリメエンをはる。エンガワ外柱のそと

前方に出すので、軒も伴つて深くなる。この型のセガイ造りは吾妻郡西部から多野郡奥地に見られる。群馬の平垣地方のセガイと少しちがつてセガイの出が大きいこと、マダチ一ぱいにすることなど形が大きい。思賀の路傍で見たのは今度の調査中での右翼のものだった。小林家では改造後のドマ二階に出したのだからマダチの半分である。

柱は石塊建て、チウナハツリが各部に見られる。小林家の柱には特に整然とした刃形が見られる。角刃で逆「八」字形に柄差が当っている。刃渡り三寸に足りない。カモイ・シキイ等指物は柄差、梁の納まりは折置が多い。また梁は柄差し、小屋組では皮つきの梁も多く使われていた。

(二) 町家造りの架構

佐藤房吉家など宿場家作は、規模の大小の差はあるが、基本型はほとんど同じである。

表てがわに切妻造平入二階建のひと棟があり、これに接続する後ろがわの一と棟がある。後ろの切妻造りでこれは妻入りで平家建てである。それ故に、表て棟は東西方向に後ろ棟は南北方向に向いている。棟は直接に連つていないが、平面図だけでは境界がわからない。表て棟の部分は、キレメエン・第一室ミセ・入口ドマ・シタミセ、後ろ棟の部分に、第二室ナカノマ・第三室オクザシキ・無名タタミ敷・ドマダイトコがある。表て棟の通し柱は、隅柱と中央入口のハメコロシにした格子戸を挟む梁間列の一本の柱である。これに梁間の二階ネダ(根太)バリを柱と桁行の軒コウリヲウケタ・中引などが架けられる。コヤ梁もこれら柱と管柱に一ケン毎に架き置かれる。コヤ組は石置き屋根と同じような緩勾配(立上り四寸弱)のサス合掌が組まれる。オガミの組合せは相欠ぎで化粧棟にかけてある。上に棟木があり、これにサスと二重に極が下り極を押えてモヤが細かくわたり葺地は板、これらの各材はチウナではつた断面矩形の太い木割りとしている。これで見ると、農家造である思賀の佐藤福太郎家や遠入佐藤一一家などの小屋組と恐らく同性格、サス組

構造であることがわかる。外形は町家造であるが中みは変っていない。この点で萱葺の半田・小林家と勾配の差があっても、コヤ組は等辺三角形に組んだサス（合掌）を骨組とした点で性格は同質であることがわかる。従って、家作にあつた大工の仕事が地区一帯にかつてなかつた特異な仕様を行つたのでなく、地元の大工が、常にこの地の建築にたずさわつた人々の仕事だつたことが推察される。

後ろ棟は近年第三室上に二階をあげたり、後ろグチに別棟を最近建てて改造をしているので、小屋組も旧のままであるか否かは不明であるが、第三室までは当初の形だけは残っていると見られる。表で棟中央の柱列から延長して仏壇わきの戸ダナに接した柱が、後ろ棟でも棟の中心線に当るであろう。二・三室オシイレの前面列と、これに対応するドマの中央の線上の二つの柱が中軸で、そのそとがわはゲヤに当る。幸いに表で棟の境カべの上方に接合部が表われており、ここで後ろ棟の棟が接するところが見られるので、房吉家断面を参照して図にしたが、まだ未定稿である。

町家の出桁二つの型

坂本宿表で通りを歩いてすぐ気づくのは切妻造り二階建の似た建物が両がわに並び続くことである。それをなお見ると、二階出桁と出桁の下にヒサシのついたのが入交つていることが注意される。上宿荒川家は二階出桁の例、荒川家は二階出桁にヒサシの加つた例である。

荒川家の表で入口と縦格子ランマ上に3⁴5尺の軒コウリョウが隅柱にホソ差して納れておられ、この上に五本の桁先が挺出している。出桁上の桁に管柱を建てて窓を設けている。

田沼家の場合は荒川家と酷似した挺出した桁の直下にヒサシを附している。なおこのヒサシ上の桁を一段としその桁上にツカを立てまた一段を出して二段のデ（出）を作っている。二階窓は二段目の桁をシキイとしてゐる。出桁鼻は鏡形とし、これに木鼻状の持送り添えている。中宿佐藤房吉家の場合も二段くり出しの出桁で、田沼家とちがう点はヒサシ

をつけてないことである。外形上から二つの型としたが構架の上からは小異にすぎない。

出桁ではあるが、農家造のと著しくちがうのは、宿のは出桁上の壁面に窓開口部をつけるのに対して、農家造では壁や窓を設けず、手すりをつけて出桁上は吹放しのままにしておき、縁側の面から三尺内外つき出ていることである。つまり、ハシラマ（柱間）に構造部を設けるか否かの差がある。

三屋 根

萱葺屋根の半田・小林両家はカネ勾配、棟木と合掌サスからモヤ竹とタルキ竹を縄で結縛する。棟飾はハフ板を山形にあてて、そのある棟木をのせる。小林家のグシ棟と後ヒラ（平）には夏草がそよいでいた。既に述べたように小林家は東妻を、半田家は西妻をそれぞれ小ビラの半ばで切落したカプト型としている。隅サスのカプト上桁に当る点はその軒になっている。この妻には半戸を設け採光通風に便する。半戸のシキイから下は直ちにウマヤの外壁になる。

和美峠道も、入山峠道も沿道の村で萱葺は非常に少なく、板・トタン・瓦・セメント瓦になっている。これらは赤坂の佐藤房一家のモノオキに見えるような切妻造り平入である。二階建が比較的多く見られる。屋根勾配は緩く、瓦葺で谷一番古いという佐藤二一家の4寸が最も強く、四寸を越えることは少ない。

宿の荒川家もトタンで4寸で、この緩勾配は石置屋根の名残である。

石置の頃は栗板を割りそいで軒先から葺きあげ、割竹でおさえ、竹を角ばつた比較的平らな石で押える。佐藤家は石置にしているが、以前にはトントン葺にした。栗板三尺ばかりの長さ、巾5⁶寸を、軒先から葺きあげる。軒先は板を重ね、板巾三分の一をすらせて並べる。葺き足は5⁶寸（板長さの五⁶分一）であつた。板を釘留するので金鋸で

とんとんと打つのでトントン葺きという。普通の石置の板は長さ11寸ほど巾は原木によつてちがう。厚さ一分ぐらい。房一氏はその板割りもしたという。棟と軒先はほとんど飾りをつけない。宿の瓦葺きがわずかに鬼瓦をのせたり、ヤグラをつけたりの程度。田沼家のヤグラはその一例。

葺葺のサス組高きでは、梁間の梁長さの二分の一になるのでコヤ高さが大へんに高いし、葺シロ(代)の厚みと棟押えの厚みも加わるので外見はカネ勾配よりずっと強くなる。

その他の屋根で、正確に測つたのではないが概略として判つたのは次のようである。

恩賀所見の一セメント瓦 三・五寸
同所 二〇寸

同所佐藤福太郎家 〃 三・四寸
同 同家ゲヤ 〃 三・三寸

遠入佐藤一一家 瓦 四・五寸
坂本上宿荒川家 トタン 三・四寸

注 荒川家の例は坂本宿では中等度の勾配らしい。田沼家はこれより僅かに強い。

四 ハシラマ(柱間)

壁は竹コメ(小舞)でワラ縄で結縛する。萩やそのほかの小枝などを用いることはない。竹は割竹であるが、土蔵は二三ヶ所で欠損の木舞が露出したの際に三寸弱の丸竹を使っていた。

荒壁のままもあるが白のシツタイ壁もある。切妻造りでは妻を化粧貫と柱とツカをみせて白く塗つたのが各地にあった。武田家や佐藤一一家のは美しく、特に一一家の小屋二階前面に、両袖と中間に白壁面を作り化粧貫をあしらつたのが目についた。板カベも散見した。

(一) 三筋ミゾのシキイ・カモイ

佐藤福太郎家ではエンガワ境が三筋ミゾであつたばかりでなく、アガリハナ境に三筋ミゾがあり、特にダイコク柱裏手は三本のシヨウジを各ミゾ毎に一本づつ納めてあり珍らしい使用法を見せた。このシキイ・カモイは当初のものでなく、他の箇所指入れてあつたものをダイコク柱の表で後ろに差込みにしたものである。半田家・小林家・佐藤房一家・同一一家・武田家・佐藤房吉家など、みな三筋ミゾを入れていた。福太郎家の三筋ミゾは通しミゾでハメコシではなかつた。

腰高シヨウジが目についたのは、アガリハナ境のダイコク柱後ろがわのもの。オビドはミヤコ柱の表でわ境に用いられているのが普通であるが、ヘヤ境その他にも使つた小林家・武田家があり、特に武田家の仏壇わきのはりっぱであつた。

坂本宿では入口を一方にとり他の方に内エンが設けられると、その表でに縦格子を入れ、二階マドも縦格子を入れている。本文初めの萩原調査員の報文中に、それに関しての伝承をあげているが、ありそうな話である。房吉家では入口わきの内エンの袖をハメコシの格子にしているのが面白い。

宿の家の側面の壁にシタミ板を張つたのが多いことも目に立つた。

(二) 仕口跡

房一家のモノオキ東口柱は対で外がわに仕口の貫穴があり、そこにドマの延長か、内ウマヤでもあつたかと思はせし、田沼家表で戸の中のミセには天井ネダ下バに内エンを境とする柱とツカの跡と見られる穴があり、そこに仕切りを設けてシヨウジ二本づつ建てたことが推察される。このような仕口の跡は柱の面にも見られたが、特に跡の残つていない程度が、小屋組内部に高いことが知られた。柱間際の壁つきの場所——特にイドコとヘヤ(ナンド)境に注意したが仕口の発見ができなかつた。

五 ヤシキ

入牧地区のヤシキ構えは他地方の山村と似たところもある。ヤシキの形は地形に左右される。赤浜・明賀・下平など通りすがってみて、広く思いのままの区画にヤシキをとることが、非常に困難なわざであることが察せられた。福太郎家・半田家・小林家・房一家・武田家などのヤシキも高低・広さ・平面形それぞれ工夫もあり、削平したり石積みをしたり、ずいぶん努力のしかつたヤシキに見られる。それでも多野郡上野村・鬼石町・吾妻郡六合村・利根郡利根村などに比べるとずつといふ。恩賀の福太郎家の附近の湧清水の井戸など弘法伝説をもちコンコンと清れつな水が湧いているし、一一家ヤシキ裏の井戸にはシメを張っていた。それでも福太郎家のニワ先はすぐ二米もの崖になり畜舎に下るには垂直の梯子を昇降する。半田家と小林家は裏手二万が軒より高いのを削って表でニワに出したものであろう。房一家はカイドから土蔵とモノオキのあいだを下り、入牧川で背後の三方をめぐらせる。一一家は八幡様の石段わきから陳高に達する崖を削ってあり、武田家は母家から三段にヤシキを築いている。一三のヤシキの見取図を作ってみたが測ったのではない。これに比べると宿のヤシキは前記したとおりヤシキの مادチこそ狭いが、短冊形でヤシキ畑までついで、めぐまれた地形になっていた。平垣地と違う一つはヤシキが少いこと、ニワが狭いことである。赤坂の房一家などはこの点異例に属する。

六 意匠

スマイは一般に質素である。整ったザシキとして武田家のトコ・ヒラ

ションなどを筆頭にあげなければならない。素材であるが小林家の軒コウリコウとカモイのあいだの櫛形の場所に、黒い木肌の巾のある縦子を入れたランマ、こんなに効果的なのは類例少ない傑作である。房吉家の神櫓もりつばな一つに数えられる。三社に共通の片ヤネをつけ、繁垂を下し、戸はこまかいキツレ格子とし、戸の腰にゴウザメ(格狭間)。ようゝの鏡形を刻むなど、ニケンマに一ぱいに亘ってみごとな神棚とした。田沼家の表で二階格子戸は縦子を一本置きに頭を一段低くし、中央辺に横の子を二本入れた意匠も、単調な格子戸の一つのフシ(節)を作ったもの。また田沼家・房吉家の出桁の櫛の鼻、その下の特送りの鏡形も目につく。

土蔵の数例をあげてみるならば豫込の腰をナマコ壁としたのがわりあいに多かった。信州に多いのでこの地にもこういう仕法をしたのかもされないし、ナマコ壁は県内各地にも見られるので珍らしいのではないが素朴なスマイのヤシキに黒地に白のナマコ壁は一種清潔な美しさがある。また妻の小窓の上に(水)としたり名字や水に關した文字を入れたものもあり、なかに小林家はケンカタバミの紋を入れていた。

イロリのカギ竹についたサカナの木彫り、半田家のはまっくらになっていた。小林家のカギ竹には正宗家訓という二行の文字が彫りつけてあったのを半割にして愛蔵していた。魚も遺訓もい記念品となる。竜馬の薬師堂の厨子をまっくらなかでひどく感心してみたのだが、佐藤邦雄夫人に案内されて再調に出かけてみたら天保年代、江戸末期のことかわかつて、力落ちしたが、邦雄さん一家が非常に大切に保つてくれているので此上とも保存に力添を頂きたい。また同じ谷の阿弥陀堂を区長さんの奥さんに開いて貰って拝した。阿弥陀如来の尊像は慈悲深いまなざしで定印を結んでおられ台座もものものでりつばであった。なお一一家の奥室の隅柱が石囲いの池中の礎石に立つこと、同家のエングワの外柱を自照木の弓形の柱としたことなど大力の祖父の方の意匠として高く評価したい。

図 1 ① 平面 下平 半田家 一家

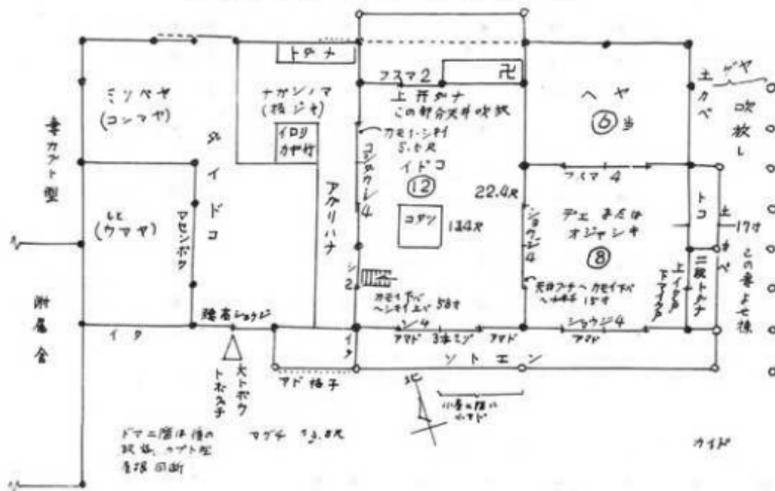


図 1 ② 断面—半田家

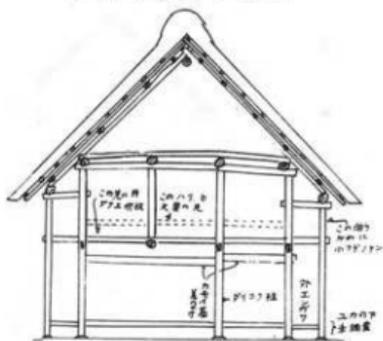


図 1 ③ ヤシキ—半田家

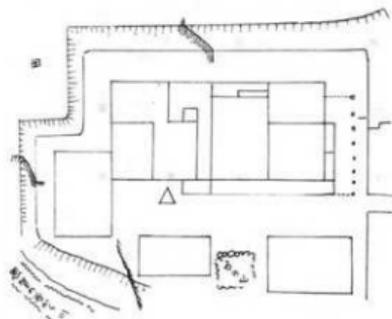
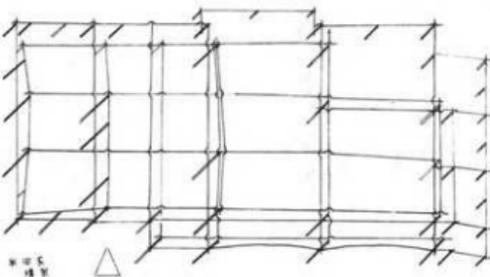


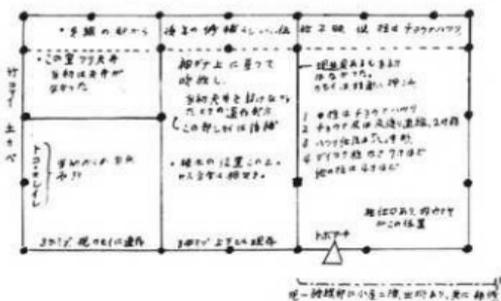
図 1 ④ 構架—半田家



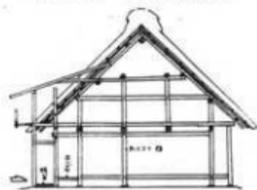
図Ⅲ① 平面 下平 小林春男家



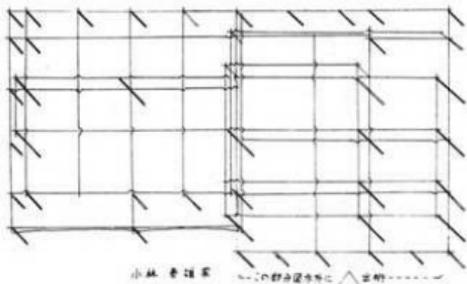
図Ⅲ③ 小林家復元



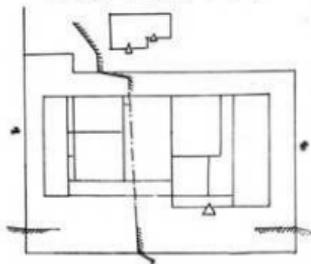
図Ⅲ② 小林家断面



図Ⅲ④ 小林家架構



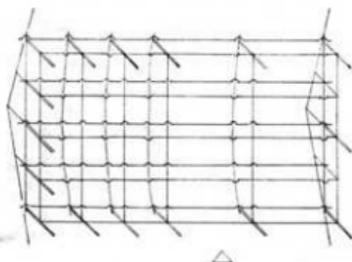
図Ⅲ⑤ 小林家ヤシキ



図① 佐藤房一家物置平面



図③ 房一家架構



図② 房一家断面

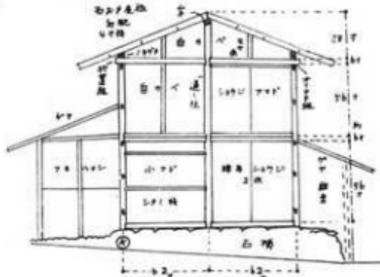
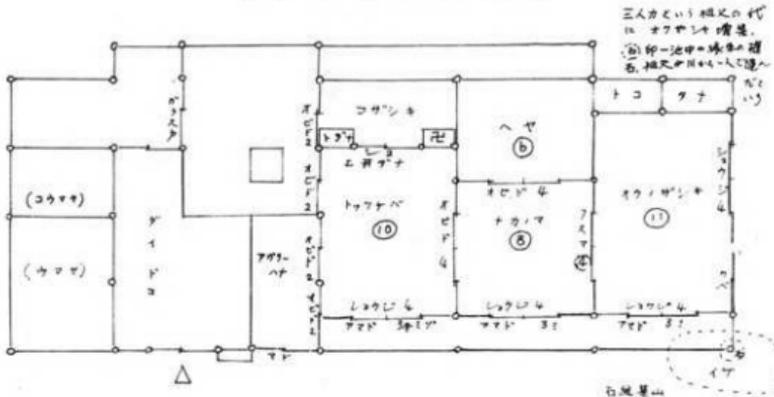
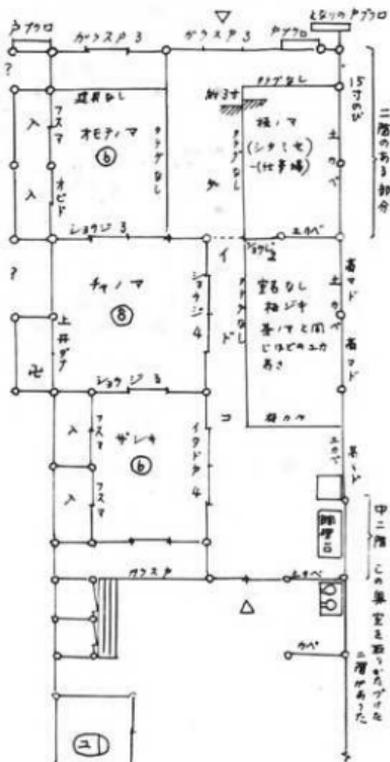


図 V 遠入 佐藤一一家



図Ⅴ 坂本上宿 荒川慶一郎家



図Ⅵ 坂本上宿 田沼時造家



図 1 板本中宿 佐藤房吉家平面

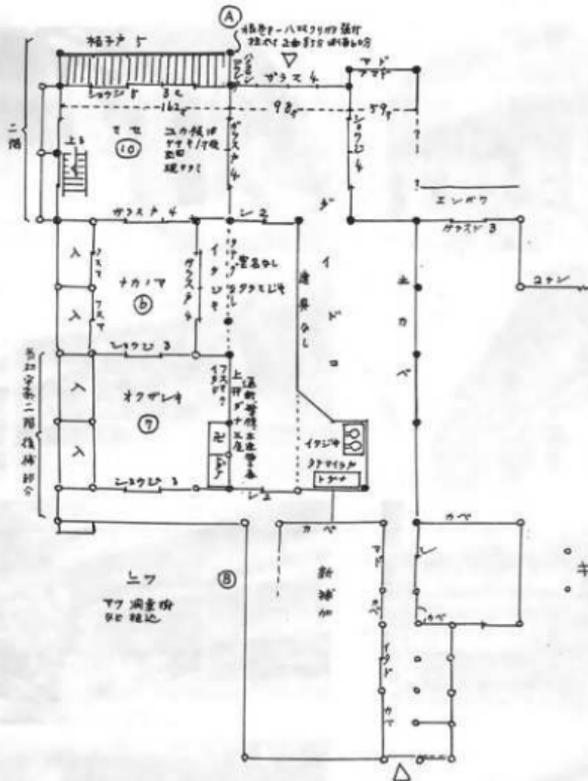


図 2 房吉家断面

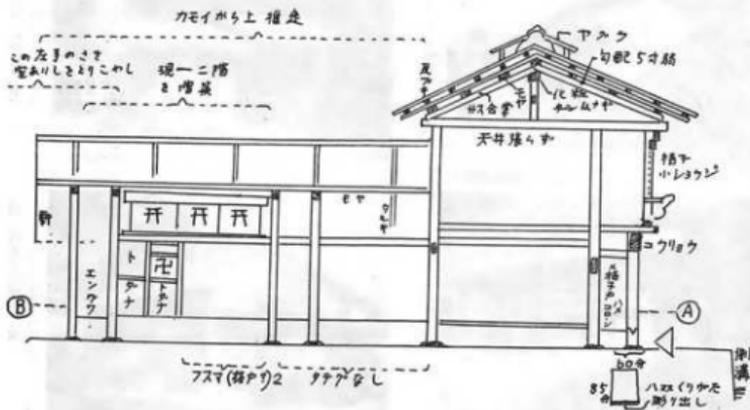


写真 1 家の景観



1 伊賀—出桁の家



2 伊賀—佐藤源太郎家



3 下平—半田泉一家



4 伊賀—妻の白壁



5 下平—小林春男家



6 同—小林春男家
右手に小屋二階がある



7 赤坂—屋敷入口に土蔵



8 赤坂—佐藤房一家
石おき土蔵根、現ものおき



9 赤坂—佐藤房一家の母家



10 遡入—佐藤二家
入牧谷で最初の瓦おき

写真Ⅰ 家の景観



11 坂本—上宿—二階建ての家々
左奥の森は八幡宮



12 坂本—下宿—二階にヒサンがあるのと、ないのがある



13 上宿—荒川屋—一郎家
江戸時代馬ヘタゴ屋



14 上宿—田沼野島家、ヤグラのある家、大野家という
金井之丞が逗留したことがある



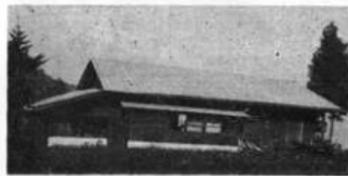
15 中宿—佐藤房吉家、マダチが二軒分ある、高野屋という



16 川久保—霧積川の河岸段丘。中央上方は坂本の中学校、長岡徳次家の二階から見た



17 思賀所見の屋根、スレート瓦もある。勾配がゆるいのは石おきだったから、左が3.5寸右は4寸余



18 思賀—佐藤福太郎家
スレートで勾配三・四寸



19 下平—平田泉一家 西の妻はカブト型のカヤブ中、サスはこれでカネ勾配、ゆるく見えるのはレンズの魔術



20 下平—小林春男家の棟の西端、グシ抑えは野の草ユリもある。樫木の右上はDPP屋さんがマスクで切ってしまった

写真 III 家の景観と出桁(ダシゲタ)



21 遠入―佐藤二一家のみごとな瓦ぶき、裏の八幡様の大木のすきまから



22 坂本上宿―荒川慶一郎家の西妻、妻桁に大きな牛梁が見える勾配は13.4分である。



23 坂本中宿―佐藤房吉家のヤダラ二つ、左隣家のハフ下はシヤタイのウダツ



24 坂本上宿―田沼時威家の一つヤダラ



25 墨賀所見の出桁細部



26 下平―小林春男家の隣家出桁、前側と同じくエンガワより裏面に突出している、手すりだけで建具がない



27 坂本上宿―荒川慶一郎家の出桁は出桁の前端からカベがつき、建具がある。戸ブタの持送りのタリガタに注意



28 同上宿―田沼時威家の出桁の端はコブシハナのように持送りにハクゾマキの文様もある。



29 同田沼家出桁の下にヒザシがあるこの宿の表てがね二階の型はヒザシがある、ないの二種



30 坂本中宿―佐藤房吉家の出桁二重の出桁、大きなコウリョウ、中央の柱の正面は8寸・側面6寸と比べるといい。ヒザシがない。



31 下平—半田泉一家のトボグチ
大戸は片付けて懸高シ・ウジ左
Fマ



32 庵馬—武田市五郎家のトボグチ



33 坂本中宿—佐藤房吉家のトボグチ、内エン出
格子より3尺奥に戸グチ



34 坂本上宿—荒川慶一郎家のウマヤグチ、馬のお
客さんがこの中に二列の馬のへやに宿をとった。



35 同上宿の田沼時造家のトボグチの内部、畳登
さんだから注文のタタミのあるところがミセ
右手低い板張りはシタミセ仕事場である



36 同中宿—佐藤房吉家の出格子の内部のエンガ
ワ、エン板はシキダイ（色代、式代）ように
正面に直角にしきつめる。



37 岡田沼家の戸ブクロ、内がわが田沼さんのうち
半々に使う、ちよつと珍らしい。



38 中宿佐藤房吉家のミセのタタミ
(左手)をあけてニカ板を見せた
ところ、ケヤキの一す板、モク
メ(生目)のみごと。



39 田沼さんのミセのエンガワ境の
ハリの仕口ホゾアナ、当初柱が
あった。



40 黒賀—佐藤福太郎家のカミダナ
左にフツダン、イドコの奥



41 下半—半田一家のフツダン
(右)カミダナ



42 上宿—田沼時造家のカミダナ



43 中宿—佐藤房吉家のカミダナと
フツダン(左)三ツゲン社一ノキと
あるがシゲダルキ(右)横戸は細
格子、二ツゲンマダナ、大いさで
は小林春男家のとこにも互換



44 下平—半田景一家のイロリばた、カギダケも
イもまだ生かされていた。



45 同—半田さんのトコノマと二段
戸ダナ、上はイタド、下は荒
いがマイラド、年月の手入れで
黒光りする。



46 電馬—武田市五郎家のトコヒラ
ション、細棧で棧棧はフキヨセ



47 同武田さんのフツダンとカミダ
ナお位階がりつばである。

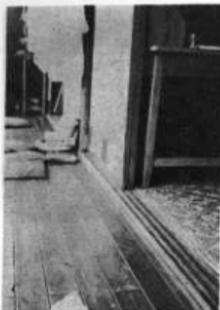


48 中宿—佐藤房吉家のカマド横、
ダイコク柱(相対か前の作付紙
マイラ戸の二段戸ダナ



49 上宿—荒川さんのウマヤの大戸ロ(南口)に残る大釜、
「上」の字の駒出しは上宿本陣御用の「上」の字

写真Ⅵ ハシラマ(柱間)

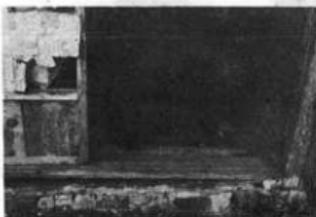


50 恩賀一佐藤福太郎家のエンガワのシキイ、三本ミゾ

51 同福太郎家のカモイ、この家ではダイコク柱の後ろに3本ミゾを完全に生かして障子をたてていた



52 龍馬一武田市五郎家のエンガワ、カモイの三本ミゾ



53 赤坂一佐藤房一家モノオキの東口の3本ミゾのシキイ



54 同房一さんの三本ミゾのカモイ、内部も出窓として露光程度となり、おまげに印刷紙も合わなかった。でこらんの通りの仕儀とは相なった。



55 上宿一田沼家の表て二階のハメコヨン格子、綾子が一本おきに強い意匠に注意



56 中宿一佐藤房吉家の表て出椅子、五枚ハメコヨンの両端の柱は表ての巾8寸、どのように使ったか踏石もある。



57 赤坂房一家のモノオキ南口の太戸



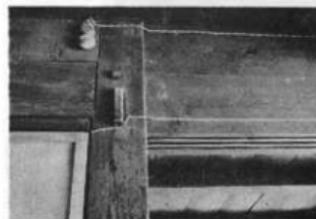
58 上宿一荒川家のウマヤの馬ベヤの重厚な太戸



59 思賢一佐藤福太郎家のダイコク柱の上方
カミダナの上方がふきはなし



61 下平一半田家の小屋内部仕口穴のあるのがダイコク柱上部、一重のハリの下で、右の柱も下から通柱、二重バりにハりに啓散するモヤが通る。サスは上端空又



63 竜馬一武田家のニンガワ柱に出たハリの端、上にコミセン(込巻)がある。



65 上宿一田沼さんのダイドコ奥の上の中二階、その奥(現とちわした)の室に金井之額が滞在したという。



66 下平一小林家のダイコク柱ナヨウナ目が組紐のように現われていた。



60 遠入一佐藤房一家の青銅スミ柱の上に薬指をのせその上に軒桁をあげた折置組



62 同半田さんの一重のハリ短い板の左手上方にムナ木があるネガでは見えるのだが図にはほとんど見えない。



64 中宿一房吉さん方の表で二階と裏手ヒラヤ(当初)の取合せ、ハリ上の壁使るが表で二階



67 中宿一房吉家的小屋組化柱棟と棟木のあいだに巨大なサスが相欠きで組み、上方斜に奥に向うのがモヤ2本その上にタルキ、又、その上にコマイ板、葺地となる



68 恩賀一福太郎さん方のケエド



69 下平一平田さんのケエドを出ると東隣家の石垣になる。野石積であるが、一〇〇年余を経て石のはらみ出しつない。

70 竜馬一武田家のケエド、左手方の屋根の後方になお一段高く母家がある。



71 下田一平田さんのケエドから、上段の石垣のすぐ西、左手物置きのは思賀川(というのか)の崖



72 中宿一房吉さんの後ろ木戸の外にヤシキ神の石祠が清楚に建つ



73 同房吉さん裏手の木戸、手前左の石の差べがヤシキ神につづく



74 下宿の本陣のヤシキ跡、ヤブのように繁った中に畑となっていた。



75 松井田町教育委員会保管の本陣図縦ジワを伸す時間がなく、強く引けば破れるので、かくの通り

写真 V 土蔵—ナマコカベ



76 下平 小林春男家、足場が組んであった。



77 同西妻のマドと紋マルにケシカババ



78 赤坂—奥から二軒目の道上のクラマドとマルに「水」



79 竜馬の武田さんのクラ、マドとマツガタの中に「市」五郎さんの名に因むか。



80 竜馬の住居跡地さん方ドマ下にコマイが見えたのでとらせて頂いた。土蔵の構造を知るための貴重な資料として。



81 赤坂一房一さん方のナマコカベ77のもナマコカベである。



82 下平—小林三郎家のタテグルミの土蔵、ここで初めてこの町にめぐりあった。



83 房一さん方のハフ下佐藤の「住」で小マドがつけてない



84 下平—半田さんの裏田んぼから川をへたてて遠望



85 84のクラ、築造でのぞいてみたらカラサと種かざりが見えたので一応バチリ

【補遺】

板屋根のこと

上州名物は「屋根の石、かかあ天下にからっ風」とこの辺ではいわれている。このうち、板屋根についてみることにする。

この近くの山からは栗材が多く出た。これは地ふく、まくら木になったが、ささ板もつくられた。そのために、この近在の屋根はほとんどがくりでふいた。くりの屋根には、ささいたとこけらぶきと二通りあった。ささ板の方は、長さが尺一、二寸程度、巾はとくにきまりがなく二寸から三寸五分ぐらい、厚さは一分から一分二、三厘ぐらい。こけらぶきの方は、ささ板より短いのがあった。長さは八寸ぐらい、巾はきまりがなく二寸から四寸ぐらい、厚さは三分ほど。

昼間は山どりして、夜割った。なたをつかって割った。なたは鍛冶屋に注文してつくってもらった。両刃(大なた、大わりをするのにつかった)と片刃(ほそかった、小わりをするのにつかった)とがあった。一日割って、小東の場合には十把程度、大東(一東半がけ)は六把から七把ぐらい。大正六年ごろで、一把七十銭ぐらいであった。屋根一坪に大東で六把ぐらい必要であった。

板屋根は釘をつかわず、板と板のあわせ目に竹の割ったのをのせておさえとし、その上に石をのせた。石は坪あたり、十五ぐらいの見当のせた。板と板とは、二寸から二寸五分ぐらいずらして。

屋根のハナには、板どめをつくった。五、六寸ぐらいの大きさで、厚さ一寸ぐらいの栗板のもの、下のタル木にぶつけて、かねのかぎがたのをおさえとしておいた。

屋根ふきはエネッコで、素人でもできた。大きい家でも十人ぐらい居れば一日でふきあげることが出来た。時期としては春と秋であったが、十月から十一月ごろが多かった。

板屋根は、五年も十年もおけなかつた。一年か二年でうらがえしをする必要があつた。丁寧な家では、毎年ふきかえた。

板屋根のほかに、くす屋根があつた。これはかやぶきの屋根で、近くの山からかやをとって来てふいた。これは、本職の屋根ふきかふいた。(水谷)

水谷のくぞのこと

水谷は明治の中ごろ開墾し入植したころなので、そのはじめに生計をたてていくのに大変くろうした。はじめのころは、そば、あわ、いも類などをつくっていた。麦をつくるようになったのは、そのあとであった。はじめのころ、藤の根をたたいて、くぞをとった。このくぞを干したものを仕事の合間をみて近在へ売りに行った。水谷のくぞとして有名であった。さかんなころには、米の値段の三倍ぐらいになった。その金で米などを買って来た。大正のはじめごろまで売りに行ったようだが、しまいには売れなくなった。

生活がくるしかつた頃には、くぞのわるいところを主食にしていたという。小麦粉をまぜて、ゆでたり、焼いたりして食べたという。

(水谷)

炭焼き

炭がまは手伝ってもらつてつくった。エネッコの場合もあるし、人々のんでやつた場合もあった。かまをつき終ると天井あげ祝いをした。手伝ってくれた人をよんで祝つた。(水谷) 天井あげ祝い(はちあげ祝いともいう)のときには、寄つた人が、御神酒をあげたり飲んだりした。かまつきるときには、仲間など、いつ天井あげだといふ聞く。そのときには、三人仲間がいれば、五人分ぐらいいちその用意をした。かまがつき終わると、「さあさあ、くろろうさまでした。一杯やりましょう」といって、まずくろも(かまの口)とお(けむりの出る方)に酒をふりかける。かまがみさまにあげますといつて、酒をあげる。茶碗

に酒をついで、山の神さまにあげたものを、最後に、あつまつたもので、飲みわけるのである。(道全)

かまの大きさによって、きりこをつかかって焼く人もある。一人で焼くのが標準。

山が遠ければ泊りこみで焼いた。寒さをしのぐ仕度と、煮炊きの用意をして行った。最近では泊りこみで焼く人はすくなくなつた。小屋は九尺×二間程度のもので、獨立小屋であつた。屋根はかやか木の皮。床にはかやか丸太をならべて、その上をうすべりをしいた。のちには、板に割つてしいた。小屋は、焼子が焼分とあわせて、つくつた場合もあつた。小屋ぶ(分)を出したのである。

炭は、大きい山で、一山二千俵から三千俵ぐらい焼けた。小さい山では、五百俵から六百俵ぐらいであつた。一度に四十から五十俵、あるいは、七十から八十俵やけるかまで、やきあがるまで十日ぐらいかかる。かまがよいと七日ぐらいで焼ける。四十と五十俵のかまだと、八日間焼くのは中ぐらゐの腕だ。五十俵のかまを一人きりでやつた場合には、焼いて出荷するのに十五日はかかるといふ。炭を焼いている間は、まきをつくつたり、炭俵をあんだりしている。一かまやける間に三たな分(一たな半は八俵分)のまきをきつた人もあるといふが、これは強い方。一たな半ぐらゐがふつうのようだ。(山のよしあしなご場所にもよるが)炭俵は、炭を入れるまで用意して十五俵分つくるのがふつう。一かま分は、大体二日ぐらゐで炭俵に入れてしまうようにする。かまに入れてから俵に仕上げるまでには、大体次のように時間がかかる。

一日目―たてかえ

二日目―たきつけ

六日目―火をとめて、炭をけす。

(これが三晩かかる)

大体十日ぐらゐはかかる。この位の日程でやらないと商売にならなかつた。(四、五十俵のかま)

炭焼き関係のことば
炭ぶるい(よそではしょうぎという)
かなえぶり―炭をかき出すもの。

たてかえ―はりかえ―まきをかまの中につめかえること。
はつがま―炭がまをついて、はじめて焼くかまのこと。はつがまと、そのあとのかまとは、炭の焼ける時間が、一日も、二日もちがうという。はつがまの方が長く時間がかかる。

かまだし―焼けた炭をかまから出すこと。
いぶり―不完全燃焼で、下まで炭にならないことをいう。早めに消すことができる。おくれると炭化してしまつて、まきのあたまの方がまっしろになつてしまふ。出来高に数俵の差ができるという。

せいれん―ねらしをくるともいふ。尾の方に煙突があるが、はじめのうちはそこをふさいでおく。適當の時間をみて、煙突をあけて風をいれることをいう。

炭のやけ具合は、煙の色とにおいてわかるという。煙が青とかげの背の色にならないと焼けていないという。また、マツチを煙突のところへ出して、一つ、二つ、三つとかぞえて、火がつけばやけるともいふ。黒炭の場合は、火をつけて、四、五日で焼けた。(水谷)

カズ(こうぞ)
紙の原料にするカズは、大正の頃まではどの家でもやつており、イロリのそばの台所にカズフカシのかまがあつた。昭和になつてからはだんだんへつて来たが。どの家でもムキカズのカリカリにしたのを一駄ぐらゐはあつた。一駄は六把で一把は六貫だったが後で五貫になつた。村中にも二人ほどの仲買いがいて、仲買いに売つた。仲買いがいなくなつてからは農協を通して売つていて、松井田の新堀でやつている。村中では厚質の岩さんがやつている。(赤坂)

やきまき
この辺の山は雑木がはえていた程度であつた。二月のころに、山に火

をつけて焼いた。そのあとに、そばとか大根をまいた。やいたあとへ、種子をちらかして、かきまわしておく程度であった。これをやきまきと
いった。(水谷)

やきまきは、なんでも、同じ場所へは、一年しかつくらなかった。山
を焼いたあとにつくったものは、そば、小豆、葉(しゃくしな、うぐい
すな)大根、いんげんなど。(道全)

一人前の仕事の量

炭焼きは一日四俵焼けば一人前とした。

炭の背負い出しは三俵がふつう。六俵というのはほとんどない。

炭俵は一日に十五俵ぐらい編めた。

植林の下刈りは一日一反歩が一人前という。下刈り用の鎌は秋間に鍛
冶屋が居てつくっていた。鎌の刃の大きさは、一尺一寸から二寸ぐら
い。この鎌で一反歩を六時間ぐらいに刈ればよいとした。強い人にな
ると、一日に一反五畝から二反分も刈った。

杉苗などの植付けは、くわをつかってやって、一人で三百本ぐらい。

これは穴を掘ってうえるだけが大体一反歩ぐらいの広さに相当する。

田植は一日六畝うえが一人前。(水谷)

産賣の習俗

お産のときは、近所の人れた人にたのんで産ませてもらった。むかし
は坐産であった。長子の場合には実家へ帰って産んだ。実家にはお産を
してから一カ月ぐらいはいた。

お産の神としては、産婆神社を信仰した。また、熊野神社の烏牛王うぎゅうおう
のお札のなかで、さかさからすをきりとり、水にうかしてのむと、安産
できるといわれた。これは初産のときだけで、二度目からは、そんなこ
とは考えなかった。

のちさんは自分の家の墓地へもって行って埋めた。(水谷)

水谷のドンドン焼き

一月十三日に各家のおかざりをドウロクジシバというところにあつめ

る。各家ごとにおかざりをもつていった。山から雑木をきってきて、
小屋をつくった。高さは十尺ほど、直径は九尺ほどの円錐形の小屋であ
る。小屋の中には、十人ほどの人が入れるぐらいの広さであった。この
小屋を十三日の夕方までにつくった。

戸から一人ずつ男衆が参加して、小屋の中で酒をごちそうになり、
一年のはなしあいをして夜になってから解散した。費用は各自平等に出
したが、前の年に祝いごとのあった家では、酒などを余計出した。

十四日の早朝になると、女衆や子供たちが小屋のところへお参りに行
った。適当な時に小屋に火をつけた。この火でまいたまをやいてたべ
ると、かぜをひかないという。

厄年とか、お祝いのあった人は、みかんと酒を出した。

この行事は、終戦直後ぐらいまではやっていた。今は、お正月のおか
ざりは、各家ごとに処分している。(水谷)

山賊

山賊では

ギヤクマクの善九衛門

ナダタの佐太夫、小栗の弥吉などが有名であった。

佐太夫は早足で甲州迄一晩に仕事にゆき、翌朝は帰ってきていた。

この人がケマンが穴にこもっていた事があるという。

これも徳川時代の話。(赤沢)

上州気質と信州気質

上州人は向う気が強いが根気強くない。こしがよわく、もちこたえが
できない。

信州人はこしが強い(根気強い)。信州の学校の生徒が霧積にきたと
き、おじいさんこの街詰りを売るときいたから、いくらいくらという
と、それならこの街詰りを売るといった。こちらで売る値段で売るとい
うのだからなかはしっこい。(道全)

動物の鳴き声

蚊はカーンと鳴く。「カーン、カーンがくるから早く家に入れ」といふ。

ツツドリロポポポポポ

トラツグミロヒロヒードリ、これは雄はヒーン、ヒーンと鳴き、雌はホイと鳴き合ひ、沢から沢に渡り飛ぶ。(新井)

靈異現象・その他

梅吉さんのお婆さんが、八十才ぐらいの時、山の畑へ草むしりに行ったつぎり帰らないので、村の人が探しに行った。やっと探しあてたのは赤浜谷息のケゲンガ岩のところ、婆さんはその岩の下にじつとかがんで、それまで登ると、たいい草履などもぎれてしまふはずなのに、それがぎれていなかったもので、婆さんは天狗にさらわれたんだらうと噂をしていった。――赤浜の話――(明賀)

山がどんより曇って、高岩がぼつと半分ぐらい見えるときには、よくどいーんどいーんと音が聞こえてきたものだ。それはお天狗さまがいさんで太鼓をたたいているのだ、と聞かされた。それが、天狗を天狗岩にまつてからは聞えなくなつた。(恩賀)

承応五年に松井田の人々が十二人で寄進した鐘(群馬県指定重要文化財)は、昔吾妻郡の方の人が一の字山を越えて盗んでいったが、峠恋しやと鳴るので恐ろしくなつて返してきたので現存するという。(峠)

一家四人がせきりにかかつたときには、春に一ひろもある太い青太郎(青大将)が家の中に出た。かまっちゃいけないというので手をつけないで、萱ぶき屋根にいて、姿がみえなくなつたら兄が病み出して亡くなつた。(狐堂)

「屋敷蛇は殺してはならない」といって大事にする。武田氏の本家に大きな蛇が住んでいて、寝床の中にどくろをまいていたこともあつた。いく年前その家の人には姿を見せた。草原の草が風もいたのにおて、大蛇がのたつてきて、ペロペロンと舌を出したので、気持が悪くてとてもそこにはいられなかつた。(小柏)

ダイゾウさまのおふくろさんが、ズウズウ潤のそばの畑に草むしりに行つた。くもの巣が顔にかかるのでそれを側の柿の木にかけておいた。帰ろうと思つたら、水中より、ヨイショ、ヨイショとかけ声が聞えて、柿の木は水中にひきずりこまれてしまつた。(明賀)

武州上岡の観音様がアラタカな神とされて、そこから絵馬をもらつてきた。絵馬とともにササと豆の護符を買つてきて、これを馬に食べさせると、馬が病まない。(恩賀)

オノサキマケ。嫁に行く時、オノサキが一つがいつて行く。よその家の妻など運んで行く。ネビツチヨ、ナマダンゴマケともいう。(下平) ハドリヤに過ぎたるものが二つあり、もりの樺に、ぐんぞうの碑。もりの樺は明治四十五年に切つた。東本願寺の扉をとるといったが、中がウロタツポだつた。中に入つて、からかさおつぶつても届がないくらいだつた。(下平)

雨乞いはしなかつたが、天気祭りはした。お諏訪へフトンを持って行つて、神様にお経をちよつと上げて泊つた程度で、それもあまりやらなかつた。(恩賀)

ワカイシヨが、お諏訪様にふとんを持参して泊る。三日のうち雨が降るといふ。(恩賀)

タカアサン山に霧がかかれば雨がふる。(道全)

カンナリサマ(雷)

谷急山(一、一六二)から来るものは、なかなかやつて来ないが、出てもそれることが多い。千駄木(九九七)から来るのは、たいい東にそれる。高岩(一、〇八四)からのものはいきなりやつてくる。(恩賀)

女郎のはなし

若エ衆の女郎買いはさかんだった。土塩村、松井田、甘栗の千駄木、中野からも女郎屋へきて遊んで翌日の仕事に差支えないようにしたという。土塩の者は盗人道(宿場の屋並の後の細い道)を通つてきた。妙義下からも若エ衆が女郎買いに来た。女郎でも身請けされた者もいた。坂

本に身請けされたまま落ちついた人もあったが今はもうみんな死んでしまった。女郎は越後出身が多く、三河国や尾張国の出も多かった。(坂本)

田舎の大尽が女郎屋に入り浸りになるもとはお伝馬で宿駅へ出てくるのがはじめであった。お大尽は坂本のものに二銭やって代役をさせ、自分は女郎屋に入り浸りとなった。しまいには「天井おがみ」(無一文になること)になると「ツケウマ」がその家についてゆき金をもって帰ってくる。通わなくなると、女郎が恋文を送るがその代筆を自分はやったものである。こうして呼び寄せてはしほったものである。

女郎は小さいうちに引きとり、一人前になると仮親になって店へ出してやったものである。女郎はわしのことをオトツツアンとよんだ。(坂本)

遊女の墓

坂本宿の遊女や飯盛女で、この地で死亡した者の墓は、宿の地内では見つからないが、堂藩番所のあった例石山の弘法井戸の上方と、霧積川の支流になる墓場尻川の水源にあたる山の中に、相当数のビクニの墓があり、土地の人たちもこれが遊女の墓だと伝えている。

六角の湯

霧積川水源と金山の沢との合流点にあたる金山沢入口付近に湧出する温泉を導いて立派な旅館が沢山できた。長成館というのもその一つであったが、あんな山の中に旅館が軒を並べ、さらに東京の有名な別荘を建ててにぎわったものである。今でも山の中に平らな地形が遺っているが、これは当時の別荘の跡である。この事業は主として有名な金井之恭の手で開発された。外国人もこの別荘地には沢山来たもので、その異人の別荘地を地元では六角とよんでいるが、ここに総ガラス張りの六角堂が建てられていたからだという。遊廊もできて夏は一大歓楽境と化したものである。明治二十七年の大水害で、六角の湯一番の建物や施設は流失あるいは埋没してしまい全滅してしまった。それ以後再建する者もな

く現在にいたったものである。(坂本)

湯の沢

六角の湯とおなじ頃に湯の沢の出口に、日本郵船社長近藤廉平の別荘と道全に八重乾電池と佐藤虎清氏の別荘があったが、近藤の別荘は明治四十三年の水害で流されたしまったという。折悪しく別荘にいた近藤の二男と首相桂太郎の長男、東群馬出身の鈴木代議士の息子などが流され行方不明となってしまった。(坂本)

碓氷川の水源

峠から百メートル程松井田方面に下ると右側に清水の湧出している池がある。これが碓氷川の水源地で、尾崎号堂の書い水神の碑の右に水神の祠がある。峠の人は全部これから水を汲みあげ講中の人々の用にもまにあわせた。七月十五日のナギの葉祭りのときこの女神様もまつる。

資

料

新田郡	笹崎、粕川、太田各村内	合	計	二五〇
水郡	坂本、白井、細野、九十九、後開各村内	受持者	中山	一一二五
馬郡	東郷村、中川、園府、清里、駒寄、明治、桃井、大類、岩鼻、澁川各村	合	計	四三五
多野郡	八幡、吉井、多胡、長根	受持者	曾根	一、六三五
北甘菜郡	小坂、西野牧、馬山、下仁田、青真、磐戸、月形、尾江各村内	合	計	二、六二〇
水郡	白井町内	受持者	曾根	一、五四〇
妻郡	中之条、原町、大田	合	計	一、五四〇
勢多郡	大胡、宮城、粕川、新里、黒保根、東、新里各村内	受持者	曾根	一〇〇
山田郡	桐生、大間々、蓮川各村内	合	計	一、一五〇
水郡	磯前、東横野、鳥淵各村内	受持者	曾根	四、八五〇
馬郡	中川、園府、室田、倉田	合	計	二、二二〇
妻郡	中之条、名久田、伊参各村内	受持者	曾根	五〇〇
吾妻郡	長野原町、草津、嬬恋ノ各村内	合	計	九三〇
馬郡	大類、京崎、澁川、片岡	受持者	曾根	一、六五〇
水郡	東横野、岩野谷、九十九、細野、安中各村内	合	計	四〇〇
		受持者	水沢	五八〇
		合	計	一、四八〇
		受持者	水沢	三〇〇

群馬郡	久留馬、塚沢、佐野、大類、岩鼻、高崎各村内	受持者	水沢	不可止
水郡	東横野、磯部	合	計	一、五〇〇
佐波郡	玉村、芝根	受持者	水沢	一、一五〇
多野郡	新町、藤岡、美土里、平井、吉井、多胡各村内	合	計	一、二〇〇
甘菜郡	一ノ宮、吉田、奥平各村内	受持者	水沢	三三〇
甘菜郡	秋畑、白倉、新屋、妙義各村内	合	計	三、一八〇
馬郡	片岡、佐野、倉貫野、岩鼻、大類、澁沢、明治各村内	受持者	黒崎	千代
新波郡	伊勢崎、上原、赤堀、采女村各村内	合	計	一、二〇〇
邑菜郡	尾島、綿打、葦塚新町、中野水島、太田各村内	受持者	佐藤	重三郎
水郡	坂本町、白井、原市、安中各村内	合	計	三、五四〇
馬郡	長野、室田、各村内	受持者	坂西	高嶺
水郡	白井、松井田各村内	合	計	三、四一五
馬郡	新高尾村内	受持者	坂西	千尋
水郡	坂本ノ内	合	計	七八〇
多野郡	新町	受持者	坂西	七〇
		合	計	八五〇
		受持者	坂西	一四〇
		合	計	二〇〇
		受持者	坂西	三四〇

甘 梁 郡	妙義、高瀬、新屋各村ノ内	六二〇
多 野 郡	入野、吉井、八幡各村ノ内	六二五
群 馬 郡	六郷、車郷、倉田、倉賀野、佐野各村ノ内	六四〇
吾 妻 郡	坂上、沢田、岩崎、原町各村ノ内	一、二八〇
	合 計	三、一六五
	受持者 佐藤英雄	
碓 氷 郡	里見、豊岡、里見、細野、坂本各村ノ内	五五〇
北 甘 梁 郡	額部、福島、新屋各村ノ内	七二〇
多 野 郡	吉井、入野、平井、美土里各村ノ内	一、二四〇
	合 計	二、五一〇
	受持者 曾根安善良	
吾 妻 郡	伊妻、東、各村ノ内	三三〇
群 馬 郡	古巻、伊香保、長尾	三三〇
多 野 郡	小野、神流、藤岡、美九里各村ノ内	五九五
北 甘 東 郡	小磯、額部、富岡	四〇〇
	合 計	一、六六五
	以上受持者 佐藤修三	
利 根 郡	屋形原、上川田、今井、上戸鹿野、沼田、横名、大妻町田、森下、貝瀬、其原、大原、尾倉、上久屋各村ノ内	七、二五〇
勢 多 郡	米野、山口、片貝、各村ノ内	二七〇
	合 計	七、五二〇
	受持者 曾根忠祠	
群 馬 郡	古巻、豊秋、渋川、金崎、高山、前橋各村ノ内	二、六〇〇
吾 妻 郡	東、太田	三三〇
勢 多 郡	横野、敷嶋	一、〇五〇
	合 計	四、〇〇〇
	以上受持者 曾根竜尾	
碓 氷 郡	横川、松井田、原市、九十九、安中、八幡各村ノ内	五二〇

群 馬 郡	堤岡	二四〇
多 野 郡	平井、美久里、神流、小野、鬼石、三波川、美原各村ノ内	二、五五〇
吾 妻 郡	久賀村、須川各村ノ内	五〇〇
利 根 郡	古馬牧、水上、桃野、湯原、川崎、池田、薄根各村ノ内	三、二六〇
	合 計	七、〇七〇
	以上受持者 曾根忠植	
碓 氷 郡	安中、原市、烏瀬、秋間各村ノ内	一、七六〇
群 馬 郡	駒寄、高瀬、惣社、清里、長尾、白郷井、各村ノ内	一、一六〇
吾 妻 郡	坂上、岩島、原町、太田各村ノ内	二八〇
多 野 郡	神川、中里、上野各村ノ内	一、七七五
	合 計	四、九七五
勢 多 郡	前橋市ノ内	三、六〇〇
佐 波 郡	武士、木島、下瀬、各村ノ内	一、一〇〇
	合 計	一、七一五
	以上受持者 佐藤正雄	
	總 合 計	八七、六九〇

(注) (資料提供 水沢邦善氏)
地名の誤記町村と大字小字、あるいは郡名等に若干混入がみられたが、原文のままとした。

群馬郡				多野郡																						
大類	国府村	清里村	町村名	合	黒川村	新多村	多胡村	八幡村	平井村	三波川村	中里村	入野村	万場町	上野村	美原村	吉井町	鬼石町	日野村	神川村	美九里村	町村名	合	西丹	計	生村	
			郷社																		郷社					
	2	1	1	2															1	1	1	8				
	1		無格社	22									1	6	1	2	2	2	7	1	無格社	8				
	1		抵社	22	1	1	1	1	1	1	1	1		4	3	4		1	1	1	抵社	17	1	1		
	4	1	1	46	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10	4	6	2	3	9	3	計	33	1	1		

勢多郡													佐波郡														
富士見村	芳賀村	南橋村	新里村	粕川村	桂登村	下川淵村	荒砥村	町村名	合	倉田村	室田町	小野上村	豊秋村	堤ヶ岡村	新高尾村	箕輪村	京ヶ島村	滝川村	桃井村	古巻村	片岡村	明治村	中川村	高崎市	車野村	長野村	
								郷社																			
						3	1	1	8															1	1	1	1
	1	1	1	1	1	3	1	無格社	13						2	1	2	2	1	1	1	1	1	1			
	2	2	1		1	1	1	抵社	12	1	1	1	1	3				2		1	1						
	3	3	2	1	2	4	5	計	33	1	1	1	1	3	2	1	2	4	1	2	2	1	2	1	1	1	

新田郡				佐波郡																							
世良田村	町村名	郷社	村社	合	豊受村	名和村	宮郷村	上陽村	伊勢崎町	玉村町	剛志村	安女村	東郷村	三郷村	殖蓮村	町村名	合	黒保根村	北橋村	上川淵村	前橋市	木瀬村	東郷村	数島村	横野村	宮城村	
	郷社															郷社											
	1		1	1											1	村社	5										
		無格社		7					1	1	1	1	2	1	無格社	16			1	1	1	1	1	2	1		
	1	抵社		14	2	3	2	2	1	2		2		抵社	16	1	3	2				5	1		3		
	2	計		22	2	3	2	2	1	3	1	3	1	2	計	45	1	3	2	1	1	6	2	2	4		

ら、三、五部落に約一社の割合となる。

第二に、全般的にみた場合に、東毛の方が西毛に比して数が少ないこと。これは、本県の熊野信仰の伝播について考える場合に注意すべき点と思う。

第三に、旧社格が村社以上のものが西毛地方に多くみられ東毛地方に少ないこと。これは第二の点と関連して本県における熊野信仰の新旧を暗示しているのではあるまいか。

第四に、碓氷郡の熊野神社の数が、周囲の郡に比してやや少ないこと。これは、たとえば、赤城山に南面する勢多郡に比較的赤城神社の数が少ないことと同様に、本県の熊野信仰の中心ともいべき峠の熊野神社の存在と関連するものであろうか。

第五に、利根・多野・勢多の三郡に熊野神社の分布が、他郡に比して多いこと。このことと関連して利根・勢多に散見する鈴木氏の土着伝承に一応注目したい。また多野郡の場合は、神川村と上野村とで十九社を占めている点に注意されるが詳細は不明である。

二
本県における熊野信仰の伝播を系統的にとらえることは困難なことではあるが、今後の研究の素材として、勧請の伝承を中心に以下に記してみよう(地名は旧称「原簿」とあるのは「神社明細帳原簿」のこと。必ずしも原文のままの引用ではない)

(一) 伝承関係

- 碓氷郡坂本町峠 旧県社熊野神社 景行天皇四十年十月、熊野三社を勧請したという。(碓氷郡誌等)
紀州の熊野様は伊弉那岐命で男神、峠の熊野様は伊弉那美命、二神は女神で夫婦神であったという。あるとき、両者が夫を婚しをしたが、峠の方がまけてしまったという。そのため紀州の方は熊野皇太神と記すが、こちらは、熊野皇大神と記して区別するようになったという。(土地の伝承)
- 碓氷郡安中町上野尻村 域下旧村社熊野神社 往古大穴半運少名昆古那二神を鎮祭して、元野後郷の鎮守であった。永祿二年安中城を野後に築き鬼門の守護神として越後国新発田より熊野神社権御氣野命を勧請し合せて三神を鎮祭したのも。(原簿)
- 碓氷郡秋間村東上秋間字下久保旧無格社 熊野神社 慶長二年創立(原簿)。
- 碓氷郡安中町古屋村田端 享保十九年寅年創立(原簿)。
- 吾妻郡名久田村赤坂字矢場 旧村社熊野神社 応永十五年戊子年三月、紀伊熊野より勧請すという(原簿)。
- 吾妻郡名久田村大字塚原 旧村社熊野神社 応永十五年創建(神社明細帳)。
- 吾妻郡端恋村門貝字鳴尾 旧村社熊野神社 創建大同年間と云う(原簿)。
- 吾妻郡高山村尻高字熊野 旧村社熊野神社 永保元年辛酉秋紀伊国熊野三社勧請し一村の鎮守とする(原簿)。
- 吾妻郡坂上村須賀尾村字久平 旧無格社熊野神社 天正四年九月紀伊国牟婁郡本宮より勧請す(原簿)。
- 吾妻郡上村本宿字関口 旧無格社熊野神社 万治二年六月十五日、当国碓氷嶺の熊野神社より勧請す(原簿)。
- 吾妻郡六合村赤岩村字鍛冶谷戸 旧無格社熊野神社 元文二年創建(原簿)。
- 吾妻郡沢田村上沢渡大字鮫野 旧無格社熊野神社 正徳二年九月創立(原簿)。
- 吾妻郡端恋村今井村字峰 旧無格社、熊野神社 明暦三年十月勧請
- 吾妻郡高山村尻高字関田 旧無格社 熊野神社 応永中村社熊野神社より分社(原簿)。
- 利根郡古馬牧村後関村字上野 旧村社 熊野神社 文祿四年未八月領主真田伊豆守信之再建(利根郡村誌)。
- 利根郡東村平川字中ノ前 旧無格社 熊野神社 正徳二壬辰年六月創立(原簿)。
- 利根郡桃野村小川字大峰 旧無格社 熊野神社 明暦二年三月勧請(利根郡誌)。
- 利根郡東村大字日光平 二荒神社末社熊野神社、宝曆十二壬巳年十月、碓氷神社より勧請(原簿)。
- 利根郡桃野村石倉字小膳 旧無格社 熊野

- 神社 元弘元年辛未木村の小野次郎これを勸請し、寛永中真田信直再造す(明細帳)。
- 20 利根郡新治村須川字中原 旧社村 熊野神社 文応元年庚申勧請(郡村誌) 紀州より勸請 利根郡誌。
- 21 多野郡美九里村美九里字上宿 旧社村 熊野神社 万治元年創建(多野郡村誌)。
- 22 多野郡多胡村塩字浅間山 浅間神社 末熊野社、字熊野前に鎮座し、橋爪氏一統の鎮守であった。明治十年十月当社(移転(原簿))。
- 23 群馬郡国府村西国府字薬師廻り 旧社村熊野神社 大同年間紀伊熊野三山を勧請すと云う。別当は大蔵坊(廻国雜記中に、大蔵坊の記事あり)(群馬郡村誌)。
- 24 群馬郡車郷村和田山字中和 旧社村 熊野神社 和田山開闢元祖松本彦蔵が、丑寅鬼門守護として、天正十壬午年三月に勧請したものと云う(原簿)。
- 25 高崎駅赤坂町 旧社村熊野神社 往古寛永年中和田小太郎正信相州三浦より勧請す。其後、井伊直政町割の節籠内総鎮守に定め、明治十一年三月町取の節籠失に付造営(原簿)。
- 26 群馬郡中川村井野字熊野 旧社村熊野神社 延暦年間に紀州熊野大権現を勧請(中川村誌)。
- 27 勢多郡横野村宮田字熊野 旧無格社熊野神社、本社、の別当南光院は修験道、同院には中の遺物(嘉吉文明・永正)あり(横野村誌)。
- 28 勢多郡南橋村上細井字天王 旧無格社熊野神社 本社は、上細井の草分け鈴木家がまつっていたもの(南橋村誌)。
- 29 新田郡藏塚本町藏塚字中原 生品神社末熊野神社 宝暦十三年未年三月字新堀に勧請 明治十一年五月十一日移転(原簿)。
- 30 山田郡梅田村浅部字浅部 旧社村熊野神社 天正十二年紀伊熊野神社遷祀、文政二年焼失再興(原簿)。
- 31 山田郡蓮川村上小林字堂目木 旧社村熊野神社 元享十二月造営、後寛文二年十月再建(原簿)。
- 32 邑桑村館林町台宿町 旧無格社熊野神社 元禄八年奇異の神験あり、信仰者が相談して別当延命院を通じて領主に出現し、許可を得て神殿を創建、奇異の神験は、旧別当延命院住僧の夢想により覺を擲りだし、その覺を熊野神社として祭っていたところ神験あり、信仰者が多くなり、熊野神社を勧請したものと云う(原簿)。
- 33 利根郡赤城根村の鈴木氏の先祖は碓氷峠熊野神社の神主であったが、あるとき熊野神社が焼けたのでその再建基金募案に諸方に下り、さて集めて帰つてみると、すでに予定の資金が集まっていたので面白くなり、日影南郡に引きこもってしまった。もう一人は和久原に往んだ。だから、昔は熊野牛王の符が必ず来たものだそうである。現在熊野神社が三
- 34 利根郡桃野村小川の鈴木熊蔵さんの曾祖父鈴木景清の墓石には鈴木家の先祖が紀州熊野鈴木三郎重家より出ていると記されている。また、鈴木家の近くの所久保地内の利根川に清治が淵と呼ばれるところが八百比丘尼の伝承がある(詳細は利根郡誌にあるが別の伝承を「利根と上州」の上巻に紹介して別いた。清治の娘が八百比丘尼であり、鈴木家は清治の子孫と称している。また所久保にオクマン様の石室があるが、これは、景清が紀州の熊野権現より勧請してきたものといひ、小川の鈴木家で現在もおまつりしている)。
- 35 勢多郡横野村宮田の熊野神社は、もと津久井一家の氏神であったといひ、これは、室町の頃相模国から兄弟で移住してきた津久井氏の先祖が、兄は修験者となって熊野神社をまつり、弟は武士となって菅原道真をまつつたためといひ。なお、同所には南光院と称する聖護院の末派があったが、津久井氏が代々修験となつて同院を継承していたことである(横野村誌)。
- (一) 金石文關係
上毛金石文表、郡誌類には、次の二資料を取録している。
1 碓氷郡坂本町峠 旧県社熊野神社 洪鐘(正応五年壬辰卯月八日 銘文省略)

- 2 同神社 多重石塔（文和三年甲午卯月十八日、銘文省略）

（三）文献関係

- 1 平治物語巻之三、牛若奥州下の事（上野国大窪太郎の娘が十三の年に熊野参りをしたという記事があり）。群馬郡吉岡村大久保に女塚というところがあり、平治物語の大窪太郎の墓という伝承がある（群馬郡村誌）。

- 2 「廻国雜記」中に、群馬郡国府村西園分の大蔵坊のことが出ている。なお、この大蔵坊については、新城常三氏が「社寺と交通」（至文堂、日本歴史新書）の中で内山文書を引いて、「応仁、文明以前に、武蔵太田道真が上野先達大蔵坊薩下百名の参詣者に、毎年関税免除を約している」ことを紹介して、中世における東国からの熊野参詣者の多かったことを示しておられる（同書・四三・六四頁）。
- 3 正文文書（ちうしん、にったのみしやうやお二ねん目六）によると、「くまのミミヤに二町」という記録がある。これが、どこか熊野神社をさしたのか、まだ研究していない。なお、太田市の金山の麓に熊野という地名があり、もと兼川村東長岡の小字名であった。ここには無格社であった熊野神社がある。建久年中、新田義重の創建と伝えているが、くわしくは、富岡牛松氏「金山太田誌」にある。

（四）「熊野」という地名

明治十三年地理雑件、郡小字名調査（県議会図書室所蔵）によれば、熊野（熊野森、熊野小根も含む）という地名が、県下に、四十認められた。

あとがき

熊野信仰の伝播という立場からみれば、当然講読係の資料についてもふれるべきであったし、神の御師の活動についてもふれるべきであったが、まだ調査が緒についたばかりなので、今回は不十分ながら以上にとどめて、後日を期したいと思う。

末筆ながら、資料閲覧について種々便宜をはかって下さった、県会図書室長の萩原進先生、前県社会教育課社教主事の近藤義雄先生に、誌上より深く感謝申し上げる次第である。

（一九六三・五・三稿）

（群大史字9号より、一部補筆）

松井田町の民俗

——坂本・入山地区——

昭和四十二年三月二十八日印刷
昭和四十二年三月三十日発行 非売品

編集兼発行者 群馬県教育委員会

発行所 群馬県教育委員会事務局

前橋市元総社町六七

印刷所 朝日印刷工業株式会社

電話(四)四三六七番

